

文部科学省平成19年度・20年度先導的大学改革推進委託事業

「英国におけるギャップ・イヤーなど、学生または入学予定者に対する
長期に渡る社会経験を可能とする取組みに関する調査研究」

最終報告書

平成19年11月1日 ～ 平成21年3月31日

広島大学 高等教育研究開発センター

研究代表 秦 由美子

目 次

- 平成 19 年度及び平成 20 年度「先導的・大学改革推進委託事業」内容・・・・・・・・・・5
- 事業実施プロセスでの調査研究に関わる審議・検討・・・・・・・・・・13
- はじめに
 自己の人生をデザインする力をつける自らの生き方を見つけるための「振り返りの時間」
 － Gap Time / Gap Year 秦由美子・・・・・・・・・・15

第 一 部

イギリス

ギャップ・イヤーとは

1. 高校-大学間の1年の遊学期間： ギャップ・イヤー
 トニー・クラーク (Tony Clark)・・・・・・・・18
2. ギャップ・イヤー：概説 モリス・ジェンキンス (Maurice Jenkins)・・・・26
3. ギャップ・イヤーの要約 大橋純子・・・・・・・・・・32

イギリスの大学

4. キングストン大学 登道孝浩・・・・・・・・・・37
5. バーミンガム大学 登道孝浩・・・・・・・・・・45
6. ブラッドフォード大学 登道孝浩・・・・・・・・・・49
7. ヨーク大学 登道孝浩・・・・・・・・・・62
8. リーズ大学 登道孝浩・・・・・・・・・・68
9. オックスフォード大学キャリアサービス・センター 佐藤万知・・・・・・・・・・91
10. ギャップ・イヤーに関する報告書 アール・キンモンス・・・・・・・・96
11. ギャップ・イヤー研究ノート ロバート・アスピノール・・・・104

ギャップ・イヤー支援団体

12. 英国における Gap Year に対する社会的支援
 －企業の取り組みと支援団体の活動に焦点を当てて－ 大佐古紀雄・・・・108
13. ギャップ・アドヴァイス 佐藤万知・・・・・・・・・・118
14. ボランティア・サービス機関 (Voluntary Service Overseas: VSO) 佐藤万知・・・・122
15. イヤー・イン・インダストリー (Year in Industry) 佐藤万知・・・・・・・・・・128

イギリスの企業

16. KPMG 佐藤万知 134

日本

日本の大学

17. 日本版ギャップ・イヤー導入に関する制度的支援の可能性 飯塚和明 136
18. 倉敷芸術科学大学訪問調査報告書 田中正弘 153

ギャップ・イヤー支援団体及び日本の企業

19. Gap Year 受入団体と日本企業における GY 的活動支援の事例報告 大佐古紀雄 156
20. 日本ワーキング・ホリデー協会訪問調査報告書 田中正弘 166

ギャップ・イヤーに対する私見

21. ギャップ・イヤー報告書 景山愛子 170
22. 日本の大学における国際戦略と GY 導入の可能性 岡田昭人 172

第 二 部

文献調査及び資料

23. 地平を拓く
Broaden Horizon? — Geographies and Pedagogies of Gap Year
ニュー・カッスル大学・シンプソン講師 (Kate Simpson) 174
24. 島根大学第一回公開研究会
「短期海外研修制度の現状と課題の概要について 田中正弘 185
25. 高等教育機関によるボランティア活動について 秦由美子 187
26. ボランティア運営 — インペリアル・カレッジ・ロンドン
(Imperial College London) 秦由美子 192
27. 2008 年 2 月 29 日のギャップ・イヤー・ニュース[GAP YEAR NEWS 29. 02. 08]
— 政府のギャップ・イヤーへの拠出 — 1000 万ポンド — 秦由美子 195
28. Volunteering and health Nov07.doc
Skill: National Bureau for Students with Disabilities 秦由美子 196
29. タイムズ紙教育版新聞 (Times Education Supplement) 秦由美子 197
30. 語学系学生イラクで軍隊補助活動を行う 秦由美子 197

3 1. VSO は「大人の」ボランティアを求める 秦由美子・・・200

第 三 部

ギャップ・イヤー研究会

講演

3 2. 小山悦治教授 (倉敷芸術科学大学)・・・203
3 3. 菅井直也教授 (広島文教女子大学)・・・208
3 4. 熊谷紀良主任 (東京ボランティア市民活動センター)・・・214
3 5. 酒井亮征氏 (名古屋商科大学)・・・220

結 語

日本版ギャップ・イヤー (GY) あるいはギャップ・タイム (GT) 導入の可能性について
秦由美子・・・236

ギャップ・イヤー (Gap Year)、ギャップ・タイム (Gap Time) のまとめ
秦由美子・・・239

編集後記・・・256



➤ 平成19年度及び平成20年度「先導的大学改革推進委託事業」内容

調査研究テーマ： 英国におけるギャップ・イヤーなど、学生または入学予定者に対する長期に渡る社会経験を可能とする取組に関する調査研究

【テーマの趣旨・目的】

創造性豊かで幅広い教養を有する人材を育成するためには、学生の社会体験や異文化体験を促進することが重要である。かかる中、英国においては、「ギャップ・イヤー」と呼ばれる入学延期制度が存在するが、このように、学生または入学予定者に対する長期に渡る社会経験を可能とする取組について、英国等における現状・普及状況、我が国における普及・導入の可能性等に関する調査研究を行う。

【得ようとするアウトプット】

- ① 英国等におけるギャップ・イヤーの実態把握（規模・支援組織・普及状況・入学定員・学籍・授業料等との関係）
- ② 我が国における類例の収集
- ③ 我が国におけるニーズ調査（学生側、大学側、企業側）
- ④ 我が国においてギャップ・イヤーを行おうとする場合、定員管理や入学金等との関係等で課題となる事項の洗い出し及びその解決策の検討

I 事業の内容

1. 事業期間

第1期： 平成19年11月1日 ～ 平成20年3月31日

第2期： 平成20年 4月1日 ～ 平成20年6月30日（大阪大学での事業期間）

平成20年 7月1日 ～ 平成21年3月31日（広島大学での事業期間）

（2カ年計画）

2. 事業の具体的方法等

（1）実施方法（アプローチ方法）及び分析手法

ギャップ・イヤーに関しては、下記の5項目を調査する予定である。

- ① ギャップ・イヤーの実態把握（規模・支援組織・普及状況・入学定員・学籍・授業料等との関係）を文献により下調査を実施。
- ② 渡英し、インタビューによる訪問調査を実施
- ③ 大学、学生、企業、ギャップ・イヤー実施団体を訪問
- ④ 高等教育機関（Higher Education Institutions: HEIs）は、伝統的大学、旧市民大学、

新市民大学、ロンドン大学、1992年以降の新大学（旧ポリテクニク）を対象とし、面談調査を実施する。

- ⑤ 我が国における類例の収集、我が国においてギャップ・イヤーを実施する場合、定員管理や入学金等との関係等で課題となる事項の洗い出し及びその解決策の検討を行う。

3. 事業の実施体制

<イギリス側>

トニー・クラーク（元教育雇用省・高等教育局、現教育省顧問、ギャップ・イヤー実施団体（BUNAC）理事）、バーラム・ベカードニア（イギリス高等教育政策研究所）、モリス・ジェンキンス（元ブリティッシュ・カウンシル職員）、アンドリュー・ジョーンズ（ロンドン大学・パークベック・カレッジ）

<日本側>

大佐古紀雄（群馬育英短期大学）、川島啓二（国立教育政策研究所）、溝上慎一（京都大学）、西垣順子（大阪市立大学）、モリス・ジェンキンス（元ブリティッシュ・カウンシル）、福留東土（広島大学）、景山愛子（広島大学）、登道孝浩（市川学園・ロンドン大学）、田中正弘（島根大学）、ロバート・アスピノール（滋賀大学）、アール・キンモンス（大正大学）、飛鷹茂忠（滋賀大学）、飯塚和明（日本大学）、橋本充悠（京都大学）、甲斐泰（福井工業大学、前大阪大学）、舘泰史（大阪大学）、佐藤万知（青山学院大学ヒューマン・イノベーション研究センター）、有本章（比治山大学）、秦由美子（広島大学）

<調査項目>

大学を訪問する場合

Admission Office

- ① GY 制度の受け入れ状況
- ② GY を受け入れることになった経緯
- ③ GY 受け入れの手続き、要件など
- ④ GY を取る学生の割合、男女別、学科別などの数値データ、できれば過去5年間
- ⑤ GY プログラム推奨の有無
- ⑥ 制度的な支援制度の有無
- ⑦ その他

教務課 (Department of School Affairs)

- ① GY への大学の係わり。全く学生個人の自由意思か、教育的配慮の有無、GY を実施したことによる大学での就学への影響

- ② GY を実施した学生とそうでない学生の比較の有無、比較の指標、比較の結果
- ③ GY を実施したことの修学上のメリット、デメリット
- ④ GY プログラム推奨の有無
- ⑤ 制度的な支援制度の有無
- ⑥ その他

<④と⑤は Admission Office と同じ>

Student Union

- ① GY についての Union の公式見解の有無とその見解
- ② GY 推進のための Union の活動の有無とその内容
- ③ その他

個人

- ① GY の具体的内容
- ② GY を行った動機、目的、期待など
- ③ GY を実施しての感想、当初の計画に比べての反省点
- ④ GY 実施が大学入学後の修学にもたらした効果
- ⑤ GY' 実施によって得たもの失ったもの
- ⑥ GY をこれから入学してくる学生に勧めたいと思うか否か
- ⑦ その他

各種団体

- ① イギリスにおける GY の実施状況
- ② 普及状況
- ③ 実施学生の割合、男女比
- ④ GY の内容
- ⑤ GY に要した費用の平均と分布
- ⑥ GY のプログラムと提供団体など。プログラム別実施学生数（過去 5 年間）
- ⑦ GY を実施するための財政援助を国、公的機関、民間団体などに求めているか
- ⑧ その他

産業界

- ① 雇用に当たっての GY 経験の考慮の有無とその指標、程度
- ② 入社後の業務遂行に対する GY 経験の効果の有無とその内容
- ③ 企業として GY を推進する意向の有無とその内容
- ④ インターンシップ実施の有無とその内容

- ⑤ インターンシップとGYの評価の有無とその内容
- ⑥ その他

英語版調査項目を下記のように作成し、訪問調査を実施する各大学、各支援団体等に事前にメールで送付し、訪問調査当日に調査項目を中心にインタビューを実施した。

Survey Points of Gap Year

[You do not need to answer all the questions shown below.]

[Admission Office]

- ⑧ When is the Gap Year (GY) taken?
- ⑨ How widespread is the GY? (The number of universities that have implemented it; is it on a departmental basis?)
- ⑩ The percentage of total students vs GY taken students (Statistic number for 5 years)
- ⑪ The proportion of students and their sex distribution (Statistic number for 5 years)
- ⑫ The differentiation of departments (Statistic number for 5 years)
- ⑬ The merit to the university of affirmative support
- ⑭ Reasons for universities being unenthusiastic about GY
- ⑮ The procedure of taking GY students and how to prepare for it (paperwork)
- ⑯ Does your university have the system of promoting GY program?
- ⑰ Provision of funding for GY students by various stakeholders
- ⑱ Do universities have a specific program for aiding GY?
- ⑲ Provision at the university side of funding for students who have elected a GY
- ⑳ Provision of funding for students who have selected a GY on the part of the national government
- ㉑ Do universities have a specific program for aiding GY?
- ㉒ The merits and demerits of a GY
- ㉓ The expectations of universities that have introduced GY

[The Academic Affairs Section]

- ① Does your university have the curriculum for the GY?
- ② What is the content of it?
- ③ The condition on deferred entrance of your university
- ④ The differences among students take a GY
 - Do you have any benchmarking (or any assessment) regarding the students' profile?
- ⑤ The merits and demerits of students take a GY for his/her university learning

- ⑥ Do universities have a specific program for aiding GY?
- ⑦ Provision at the university side of funding for students who have elected a GY
- ⑧ The proportion of students and their sex distribution
- ⑨ The content of the GY
- ⑩ The average cost of a GY

[Student Union]

- ① Do you have any official opinion on GY? If so, please let us know.
- ② Do you have any students unions activities on GY? If so, please let us know.
- ③ (Other questions)

[Individual students]

- ① Reasons why you took a GY
- ② When was the GY taken?
- ③ What type of GY did you take?
- ④ What were your motivation, purpose and expectation of the GY ?
[elective options from UCAS materials shown below]
 - To have a successful career
 - To contribute to the world
 - To learn something new every day
 - To see the world
- ⑤ What did you acquire through your GY, and what was your impression, and what were the points for reconsideration?
- ⑥ The effect of GY you take after your entrance
- ⑦ The merits and demerits of a Gap Year
- ⑧ Do you recommend GY to the students who will enter the university?
- ⑨ The merits and demerits of a gap year
- ⑩ What were the methods for generating funds (bank [loans], savings, family support, foreign work, public funds for students, etc)

平成 19 年度・平成 20 年度に、文献調査及び訪問調査を実施、完了したものは下記の通りである。

括弧内は訪問調査責任者である。

1) 文献調査

区 分

①ギャップ・イヤー： 高校ー大学までの1年の期間	トニー・クラーク氏 (元イングランド教育雇用省・高等教育局長 現教育省顧問)
②ギャップ・イヤー： 概説	モリス・ジェンキンズ
③ギャップ・イヤー産業に関するレビュー	アンドリュー・ジョーンズ博士 ロンドン・バークベック・カレッジ
④ <i>Broad Horizons? : Geographies and Pedagogies of the Gap Year</i>	
⑤イギリス政府のGYへの支援に関する情報	Guardian 紙

2) 訪問調査

◆イギリスでの訪問調査

1. 大学

①「セックス大学(キンモンズ)	1960年代の新市民大学
②シェフィールド大学(キンモンズ)	1905年の旧市民大学
④ヨーク・セント・ジョン大学(登道)	1992年以降の新大学
⑤バーミンガム大学(登道)	名声ある研究大学で旧市民大学
⑥リーズ大学(登道)	名声ある研究大学で旧市民大学
⑦ブラッドフォード大学(登道)	旧高等工科カレッジ：1960年代に大学に昇格
⑧キングストン大学(登道)	1970年に創設された旧ポリテクニク
⑨ウォリック大学(飯塚)	1964年創設された急成長の大学
⑩マンチェスター大学(Aspinall)	19世紀中葉にその起源を持つ研究大学
⑪エセックス大学(Aspinall)	20世紀中葉にその起源を持つ新市民大学
⑫カーディフ大学(Aspinall)	
⑬ケント大学(Aspinall)	1965年に設立勅許を受けた中位の研究大学
⑭オックスフォード大学(キンモンズ)ー一部	伝統的大学
⑮ケンブリッジ大学(秦)	インターソップが発達している工学系伝統

	的大学
⑯ ロンドン大学・インペリアル・カレッジ(キンモンス)	工学系研究大学
⑰ オックスフォード大学 (追加) (佐藤)	伝統的の大学

2. GY 支援・関係団体

① 教育慈善団体 (Gap Activity Projects: GAP) (大佐古)	現在は、Latitude と名称変更
③ Community Service Volunteers: CSV (飯塚)	
④ 大学・カレッジ入学サービス (UCAS) (キンモンス)	
⑤ Year Out Group: YOG (飯塚)	
⑦ The Year in Industry (佐藤)	
⑧ Oxford Admission Office (佐藤)	
⑨ Oxford Careers Service (佐藤)	
⑩ Gapadvice org. (佐藤及び秦)	

3. 大学・政府関係団体及び企業

① Universities UK (UUK) (秦)	全国大学長委員会
④ Department for Innovation, Universities and Skills (秦)	前高等教育技術省 (DfES)
⑤ KPMG (佐藤)	イギリス企業

◆ 国内での訪問調査

1. 大学

① 名古屋商科大学、光陵短期大学 (飯塚)	
② 倉敷芸術科学大学 (田中)	
③ 秋田国際教養大学 (GY 実施大学) (飯塚)	
⑥ 龍谷大学 (ボランティア、NPO センター開設) (秦)	
⑦ 東京ボランティア・市民活動センター (秦)	
⑧ 明治学院大学ボランティア・センター (秦)	
⑨ 立教大学ボランティア・センター (秦)	
⑩ 立命館大学理事 (秦)	

2. GY 支援・関係団体

①CSV National Full Time Volunteering Team (飯塚)	
②CEC Japan Network 文化教育交流会 (飯塚)	池頭氏
③日本ワーキング・ホリデー協会 (田中)	
④Latitude (前Gap Activity Projects: GAP) (大佐古)	英国人の日本人担当者とのインタビュー調査
⑤興望館 (飯塚及び大佐古)	
⑥VSO (佐藤)	
⑦京都 NPO センター・事務局長 (秦)	

3. 日本の企業

①SONY (大佐古)	
②キリン・ビール (大佐古)	

3) ギャップ・イヤー・セミナーの開催 (平成 21 年 3 月 9 日)

<p>● ギャップ・イヤー研究会 小山悦司、菅井直也、熊谷紀良、8 国内大学・VC の参加</p>	NPO 関係団体，ボランティアと GY をどのように結びつけることが可能か。
---	--

事業実施プロセスでの調査研究に関わる審議・検討

事業遂行のために立てられた「実施計画」を具体的に展開していくための調査研究の審議・検討は、平成 20 年度から平成 21 年度の期間において 3 回にわたる会議において確認された。以下、時系列に、会議での審議・検討の概要を列記することにした。

<平成 20 年度>

- | |
|---|
| I.日時 平成 20 年 1 月 14 日 |
| II.場所 大阪大学 大学教育実践センター |
| III.議事 |
| 1)研究者の自己紹介 |
| 2)趣旨等について |
| ・秦研究代表による、本委託研究調査事業の主旨・内容及びギャップ・イヤーについての説明・確認 |
| 3)実施スケジュールと質問項目について |
| ・本年度における実施スケジュールの確認 |
| ・質問項目の実施方法及び内容について |
| 4)国内・海外調査実施機関の検討 |

第 1 回検討会議では、本事業の主旨、実施スケジュールの確認がなされた他、秦研究代表による「ギャップ・イヤー」の概要説明がなされた。また、出席した研究者それぞれが、各人のギャップ・イヤーに関する意見交換・情報共有を通してその合意が図られた。

また、国内・海外(特に英国)の調査訪問機関に関しては、国内及び英国の調査訪問対象としての大学・支援機関の検討を行った。

- | |
|---|
| I.日時 平成 20 年 8 月 30 日 |
| II.場所 広島大学 学士会館 会議室 1 |
| III.議事 |
| 1) GY を日本に導入する際の問題点の洗い出し |
| 2) 今後の調査対象大学選定(その基準の見直し)と渡英者の確認 |
| 3) 訪問すべき対象企業(国内及び UK)の選択とそれら企業への質問票の精査と修正 |

第 2 回検討会議では、まず、1)GY を日本に導入する際の問題点や障害、また、その財源確保をどの様な形で実施することが可能か、ということを各研究者が発表し意見交換を図った。そ

して、2)本年度の訪問調査対象大学及び企業、について、特に、ギャップ・イヤーを实际行っている機関、支援団体及び企業を重視し調査訪問対象とする旨の合意も図られた。また、企業への質問票について修正・追加部分がないかについて検討が行われた。

<平成 21 年度>

I.日時 平成 21 年 3 月 9 日

II.場所 広島大学高等教育高等教育研究開発センター 112 授業研究開発室

III.議事

1)第 1 部 ギャップ・イヤーとは 講演

- ・秦由美子（広島大学高等教育研究開発センター准教授）
- ・小山悦治教授（倉敷芸術科学大学）

2) ギャップ・イヤー実施大学からの報告

3) 第 2 部 ギャップ・イヤーとボランティア活動との有機的連携 講演

- ・菅井直也教授（広島文教女子大学）
- ・熊谷紀良主任（東京ボランティアセンター）

4) ボランティア活動実施大学からの報告

5)総括

最後に、第 2 回検討会議として、ギャップ・イヤー研究会の「ギャップ・イヤーとボランティア・社会体験との連携」と称するセミナーを開催した。参加した各大学の教授・ボランティア団体・大学ボランティアセンター・学生のボランティア活動報告等において、現在、ボランティア・社会奉仕活動に携わる現状と課題が提示された。またギャップ・タイム制度の導入に関する様々な肯定的・否定的意見が挙げられた。総括では、今後のギャップ・イヤー/ギャップ・タイム導入とボランティア・社会奉仕活動等の連携の在り方について検討された。尚、セミナー終了後には、参加者に対してアンケート調査の協力を依頼・実施した。

序章

はじめに

(下記の文章は、中間報告書で掲載した内容であるが、本研究の基本モチーフ、原点と呼べるものなので再度掲載する。)

自己の人生をデザインする力をつける自らの生き方を見つけるための「振り返りの時間」

— Gap Time / Gap Year —

秦 由美子

大阪大学 大学教育実践センター

今日の日本における人材育成に必要なものは何か。それは「振り返りの時間」といえる許容、
敢えていうならば認可された時間なのかもしれない。

許容された時間には、二種類が考えられる。

第一の「許容された時間」とは、年齢で細分化された日本の教育に不可欠な時間である。日本はどちらかというと、ライフコースに関して年限としての“遠回り”をあまり許容しない社会であると思われる。しかし、本ギャップ・イヤー共同研究者である大佐古氏が述べたように、そのことが子供たちや学生に精神的圧迫を与えている場合もありうる。そう考えた場合に、まず大学という場で遠回りも可能なのだ、という点を国として許容することには大きな意味がある。ここで重要なことは、制度的に認可されていること、あるいは、政策として推奨されることである。何故ならば、そうしなければ、有名無実化する恐れもあるからである。

第二の「許容された時間」とは、「反省あるいは振り返りのための時間」である。近年、少子・高齢化や団塊世代の大量定年、国際競争力向上などを背景に、物作り人材、技術経営人材、知的財産人材、高度 ICT 人材等、様々な省庁・分野において人材育成施策の実施が盛んである。これらの特徴は、産官学連携によって、産業界や社会のニーズを反映した人材育成の実現や、デュアルシステムや社会人大学院にみられるように、多様で複線化した学習機会の提供など、効果的で効率的かつ柔軟な教育によって人材を育成しようとする傾向が強い。

しかし、こうした人材育成を全体として捉えた場合、学びのプロセスの中で重要とされる「リフレクション（振り返り）」という学習者が自分の学習について意図的に吟味するプロセスをどう実現するか、という問題が十分に解決されていないという盲点がある。つまり、知識や技能を習得し、反復、強化する教育機会は多様で十分に提供されつつあるものの、リフレクションが十分組み込まれていないため、学んだことが概念化されにくい、ということである。その結果、不確実な環境に対応するための応用力や問題設定力、創造力などの高次の技術の習得やそのための成長に結びつかない場合があり得る。簡単にいえば、事実や経験を知識として蓄えることも大事だが、自分の中でいかに消化して、自分なりに付加価値をつけて世間に提供していくか、経験をどのように自分に有益なものに変えていくのか、そのプロセスが大切であり、そ

れをできる人間が伸びる人間なのである。

また、産業界における空白の時間については、IT 業界で急成長を遂げるグーグル (Google) 社の 20%ルール (週 1 日 (全勤務時間の 20%) は本業以外の自由な研究を実施してよい (行わなければならない)) が有名である。このように、インプットすることだけに満足するのではなく、学びや業務から一旦離れ、振り返る時間を持つことで、これまでの学びの概念化や、物事の本質の問い直しができ、結果として、組織・社会に更なる価値を還元 (アウトプット) することができるのかもしれない。

もしも、日本において人材育成を望むならば、需要と供給のミスマッチの解消、実践的・専門的リカレント教育の促進など、インプットの質と機会の向上を目指す現在の方向性を維持しつつも、加えて、ギャップ・イヤー (タイム) のように敢えて「振り返り」の時間を保障するなど、インプットを効果的にアウトプットにつなげる仕組みが必要であろう。

このギャップ・イヤー (タイム) として許容された時間は、制度的に認めることが良いかどうかという議論は別にあるとしても、一つの振り返りの時間であり、彼あるいは彼女のその後人生を過たず進むための考える時間としての体験を与えるものでもあり、人としての生き方において、良い意味でのゆとりが出てくるのではないかと思われる。それ故に、日本版ギャップ・タイム (イヤー) が検討される意義は重いと考えられる。

第一部

イギリス

ギャップ・イヤーとは

1. 高校-大学間の1年の遊学期間： ギャップ・イヤー

トニー・クラーク (Tony Clark)

元教育雇用省・高等教育局、現教育省顧問、ギャップ・イヤー実施団体 (BUNAC) 理事

英国の事情

1. 1950年代、大学に進学する若者は全体のわずか5% (大部分が裕福な家庭の出身者) であった。当時は、全ての若者に2年間の兵役義務が課せられていた。大多数の学生が大学進学前に兵役を終え、20歳前後になって大学課程を履修し始めていた。1958年に徴兵制が廃止されると、ほとんどの学生が18歳で大学に進学するようになる。その頃、各国政府は、旅行と文化交流によって若者の国際理解を促進することを検討していた。そして「活気あふれる」1960年代、ヨーロッパの若者たちは、アメリカ・インド・極東・オーストラリアなど、広く世界を旅するようになった。陸路でインドやタイなどを訪れることが、大学に通う若者の共通の目的になったのである。自由旅行を希望する若者を手助けするために、専門の旅行機関も設立されている。

2. 1967年、教育慈善団体 Project Trust が、初めて3人の学生をボランティアとしてエチオピアのアディスアベバへ派遣した。これは地域住民の生活向上のために、地域事業を支援しようと計画されたものである。1973年には、Top Deck Travel 社が2階建てバスでネパールのカトマンドゥーを訪れる有料のツアーを企画した。そして同じ年、世界的な旅行ガイドブック『ロンリー・プラネット』の初刊として、アジアを巡る陸路の旅の案内書が出版される。ボランティアと自由旅行が、若い人々の間で人気となった。それらの多くは、大学生と卒業直後の若者を対象とするものだった。

3. 1977年、教育慈善団体 Gap Activity Projects (GAP) が設立され、高校卒業から大学入学までの間に「ギャップ・イヤー」を取る若者にボランティアを斡旋し始めた。1978年には、最初のギャップ・イヤー旅行となる Operation Drake が始まった。これは、イギリス人初の世界航海を果たした Sir Francis Drake を真似て世界中を巡る旅行計画である。1990年代の初めには、ギャップ・イヤーは大学入学前の選択肢の1つとして、特に英国の私立校に通う少数の富裕層の間で人気となっていた。しかし、一般的に費用や経歴の面で、家族に及ぶ影響が大きくなった。そのため、自由旅行・ボランティア旅行と共に、「働く」こともギャップ・イヤー中の活動の1つとなった。

4. 飛行機を使って安く旅行ができるようになると、自由旅行はますます盛んになり、高校-大学間のギャップ・イヤーもより多くの幅広い層の学生の間で人気となった。現在の英国では、50%近くの若者が30歳までに大学レベルの課程を取っている。少数だが、20代になって大学課程を始める人や、働きながら定時制で学ぶ人もいる。大多数は18歳で高校を卒業した直後か、あるいはそれほど期間を置かずに、全日制の課程に入る。比較的短い3年か4年の学部課程を取って、学士号を取得する学生が多い。

5. ギャップ・イヤーは、英国、オーストラリア、ニュージーランド、カナダで急速に拡大してきた。英国の授業料の値上げがそれに影響を与えるかどうかは、まだ未知数である。一部の学生は、給料を稼いで教育ローンを返すために、1日も早く大学課程を終えなければならなくなるのでは、という意見もある。ただ一方で、ギャップ・イヤーを経験することで学生の能力が高まり、収入の良いフルタイムの仕事に就けることも考えられる。また、飛行機の環境影響が要因で、今後、安価な旅行が難しくなる可能性もあるだろう。

英国のギャップ・イヤーの在り方

6. 既に述べたとおり、大学入学前にギャップ・イヤーを利用する学生は、通常、以下に挙げる3つのうち、1つまたは複数の目的を持っている。

- a) 自由に旅をして（きちんと計画された休暇旅行ではない）、いろいろな人と出会い、視野を広げる。
- b) 英国国内、あるいは海外で、ボランティアとして他人を助ける活動に携わる。
- c) 海外で働き、視野を広げると同時に、幾らかの収入を得る。

7. 近年は、特定のスキルを持つ経験豊富な海外ボランティアが重視される傾向にある。したがって、将来的に増えるのは、それぞれの目的を見据えた旅、海外での労働、（例えばボランティア団体 Community Service Volunteers を通じた）英国国内でのボランティア活動ではないかと思われる。

CSV (Community Service Volunteers) によれば、(英国国内で) 面白いボランティアが選べるので、学生たちは落胆する必要はないという。同団体は、毎年国内で2千人の人に、「家を離れた」フルタイムのボランティアを紹介している。その多くは、ギャップ・イヤーを利用する若者たちだ。CSV は、障害者の世話をしたり、若い犯罪者が再び犯罪に手を染めるのを防いだり、ホームレスや難民と一緒に働くなどの機会を提供する。

8. 留意すべきは、ギャップ・イヤーの活動が個人の需要に応じて発展してきたという点だ。

雇用者などは（政府報道官も含めて）、ギャップ・イヤーは若者にとってプラスになると思うと述べているが、これまで政府からも、ほとんどの雇用者からも、直接的な財政支援はない。現在、毎年5万人程度の若者が、大学入学前に1年間の遊学期間を取っていると推定される。

ギャップ・イヤーの評価

9. ギャップ・イヤーの利用者が携わる活動の幅広さを考えると、包括的な評価を下すのは現実的とは言えない。また、その有効性を調査するのは容易ではない。評価の大部分は、利用者個人とその1年間の努力に左右される。

10. それでもやはり、CSVの調査によれば、新卒採用担当者の88%が、巧みに組み立てられたギャップ・イヤーを経験することで、意思決定やコミュニケーション能力、関係構築などのスキルが養われると考えている。また79%が、ボランティア活動を通してスキルを身につけている大学卒業生は、職場での進歩もより速いと認めている。

11. 個人の能力を伸ばすというギャップ・イヤーのメリットは、雇用者と学術機関の双方から次第に認められ、評価されてきている。

「大学入試機関（UCAS）は、緻密に計画されたギャップ・イヤーを経験した学生は、自分の選んだ専攻に満足し、それを無事修了する傾向が高いと考える。うまく組み立てられたギャップ・イヤーのメリットは、今や大学側からも広く認められている。その後の人生にとって、間違いなく有益なものとなるだろう」

ギャップ・イヤーに何をすべきか？

12. 既に述べたように、これは個人個人によるところが大きい。Gapyear.comのTom Griffithsは次のようにアドバイスする。

「ギャップ・イヤーの過ごし方として、中国に行って孤児たちに英語を教えるのと、タイのビーチでのんびりするのとどちらが良いかと尋ねると、大抵の人は中国の孤児院を選ぶでしょう。しかし、それは焦点がずれています」とGriffiths氏は言う。

「何をするかということよりも、そこから何が得られたかということのほうが重要です。つまり、その活動を自分の意志でやったのか、そのための資金を自分で稼いだのかが問題なんです」

「もしすべて自分の力でタイのビーチに辿り着いたのなら、それはママとパパにお金を出して

もらって中国で決められた仕事をするよりも、すごいことだと思います」

Griffiths 氏は調査の結果、大学入学前にギャップ・イヤーを取る若者の数は今後数年で倍増するだろう、それは1つにはやはりキャリア的に有利になると認められたためだと語る。

13. 雇用に関わる人々は、さらに次のようにアドバイスする。

HBOS 銀行の広報担当者 Jason Clarke は、ギャップ・イヤーの経験は成績上位の有望な学生をさらに魅力的に見せることがあると認めている。「有益なギャップ・イヤーとは、自分をぬるま湯に甘んじる地帯から連れ出してくれる経験です」と Clark 氏は言う。「だから、アフリカのザンベジ川で急流下りをしたくらいでは物足りません。もちろん、恐水病だったというのなら、話は別ですが。ならば、その経験のおかげで、いかに恐怖に立ち向かい、克服できるようになったかが語れますからね」

「我々が知りたいのは、その人が何をしてきたか、何故それをしたのか、そこから何を得たのか、ということなのです」

英国人材開発協会のアドバイザー Jessica Jarvis は、高等教育の拡大によって大学卒業生の就職活動が困難になり、企業側の選別も厄介になっていると言う。

しかし彼女は、ギャップ・イヤーを「工夫する」ことが時に決定打になるとも語っている。

彼女によれば、ギャップ・イヤー利用者がやるべきことは、自分が何を心得何を学んだかを未来の雇用者にはっきり示すことだという。山のような志願者に忙殺されている企業にとっては、それは当然ありがたいことだろう。

Jarvis 氏は、ギャップ・イヤーを単に海外で過ごすだけでは、もはや十分とは言えないと認めている。

より重要になりそうなのは、面接試験で仕事に関わる幅広い能力に結びつけて語れるよう、様々な経験を積むことだ。

Jarvis 氏によれば、大学卒業生の就職戦線がこれほど厳しい中、皮肉にも英国企業の5分の4が、適当なスキルを持つ人材を採用できていないと不満を述べているようだ。

14. 以下に示すように、エンジニアリング事業者は特殊なニーズを認めている。

大学入学前に産業界で働く Year in Industry というプログラムに参加した学生は、同年代のライバルたちに比べ、職場経験において数段勝っている。片や、若者に質の高い職業経験のチャンスを提供する企業は、最終的に恩恵を受けることになる。

ギャップ・イヤーを利用しているシェフィールド出身の19歳の工学部生 Kate Earnshaw は、英国で最高レベルの権威を持つ若者を対象とした産業界の賞を受賞した。英国エンジニアリング事業者連盟 (EEF) 主催の Year in Industry 「ビジネスへの貢献」賞である。

Kate は大学入学前にギャップ・イヤーを取って、シェフィールドのエンジニアリング企業 Firth Rixson Group 社で働いた。同社は、航空宇宙・鉄道・石油・ガス産業用の部品を製造する会社である。Kate が中心となって、熱処理工程を辿り、幾つかの製品ラインの故障率を調査した。その結果、部品の故障に関連する問題を解決しただけでなく、生産量増大の可能性が大きいことを算定してみせた。

彼女が推奨する新たなソフトウェアシステムと加熱炉を利用すれば、1日の加熱炉1台当たりの生産量が1万2千ポンド増えると予想される。また、それは同社内の他の職場にも変化をもたらすことになった。

Year in Industry は、大学入学前の才能ある学生に産業界で実際の仕事を体験する機会を提供する国家プログラムで、学位取得・就職の可能性を大きく高めるものだ。first class honour (第1級学位) 取得の全国平均は10%だが、このプログラムを経験した学生では26%が第1級学位を取得している。

ギャップ・イヤープロジェクトの選択

15. ギャップ・イヤーのコンセプトが拡大するに従って、英国の学生はより幅広い機会を得られるようになった。ギャップ・イヤーのプランを自分で立てたくなければ、以下のように代わって計画してくれる営利団体が数多く存在する。

3d Education and Adventure : 学生に課外活動と教育経験を提供する英国有数の企業。

Accenture : 8か月間の Accenture Horizon 計画により、大学進学前にギャップ・イヤーを利用する A レベル試験合格者 (大学入学資格取得者) をサポートする。

Euro Academy : 語学力向上のための EuroAcadmy 語学コースを用意。また、ヨーロッパや南アメリカの文化の中心地での仕事も紹介する。

Boat Building Academy : 38週間で、プロ基準に沿ったボートの作り方を学ぶ。希望であれば、自分自身のボートを造ることもできる。

CSV : 英国国内で刺激的なギャップ・イヤーを過ごしませんか？ 助けを必要とする人々の人生に、あなたが変化をもたらすのです。

Global Vision International : 世界20か国での海洋保護の旅、野生生物調査プロジェクト、地域社会のプロジェクト、各種コース、インターンシップを用意。

Independent Living Alternatives : ロンドンとカンブリアで障害者の自立を手助けするボランティアを斡旋。

Tall Ships Youth Trust : 60Mの横帆艦装船に乗って、爽快な大型帆船の航海を体験。自分自身の課題と向き合い、様々な人と出会い、スキルを高められる感動的な海の旅になるでしょう。

The Prince's Trust : 能力向上プログラム「Team」に参加し、重要なスキルを身につける。

UK Sailing Academy : ヨット産業（海運業）における主要な専門職用の訓練を施す各種コースを用意。

wowo.co.uk : 世界各国の若者に対して、英国での専門分野別の自己資金によるワーキングホリデイを提供。

BASP UK Limited : あらゆるアウトドア活動のインストラクター・指導者資格課程で必須となる応急処置訓練を提供。

Global Choices : 職業技能・個人的技能向上を手助けする、幅広いプログラムを用意。（世界各地での）数多くの仕事を紹介します。

16. さらに、ギャップ・イヤー関連企業を代表する非営利協会 **Year Out Group** は、ギャップ・イヤー利用者のサポートに関して、以下のような高い基準を掲げている。

- 提供するプログラムとサービスの内容を明確かつ正確に説明すること。
- 国内としかるべき海外諸国において、高水準の個別支援を行う。支援プログラムには、安全・警備の手続きを整えること。
- プログラムを評価し、機能向上を図るためのシステムを備えること。
- プログラムは責任を持って、社会・環境・地域の問題に十分配慮して実施すること。
- 顧客の資金を守るため、関係する財務上の規制・安全措置を順守すること。

大学の役割

17. 学生が大学入学前にギャップ・イヤーを取る場合、通常、大学側からのいかなる承認も必要ない。しかし、ギャップ・イヤーに入る前に、前もって大学の籍を決めておきたいと考えるなら、大学側に申し入れる必要があるだろう。志願者が他の入学資格を満たす場合は、ほとんどの大学がそのような申し出を受け入れる。

18. 志願者がギャップ・イヤー中に将来の専攻と関連する活動を行う場合には、普通、大学側はそれが適切かどうかについてのアドバイスを惜しまないだろう。一般的に、大学側はギャップ・イヤーを経験した入学志願者を歓迎する。高校からすぐに大学に進んだ学生と比べて、ギャップ・イヤー経験者は成熟度が高く、自立していて、確固たる目的を持っていることが多いからだ。

日本の若者のためのギャップ・イヤーとは？

19. 英国での経験に基づくなら、最適なアプローチは、若者が自主的にギャップ・イヤーのプランを立てるよう促す方法を講じることだろう。それは日本でも他の国でも同じである。以下のようなギャップ・イヤーの目的を、学生にアピールするべきと考える。

- 学問研究を一時休止する
- 世界に視線を移し、他の興味を追求する機会を持つ
- 自立心を養う
- 新たなスキルを得る機会を持つ
- 最終的なキャリアの将来性を高める
- お金を稼ぐ
- ボランティアや地域社会の仕事を通じて、他人を助ける
- 視野を広げる

20. プランの詳細なフォーマットは、若者個人個人に決めさせるべきだろう。地域社会の援助に関わる組織に、ギャップ・イヤーをとる若者が参加できる機会を増やすよう求めることもできる。また、雇用者側に、若者が働く機会を提供するよう働きかけてもよいだろう。

21. 最も重要なことは、雇用者側と大学側がギャップ・イヤーの潜在的なメリット—大学での勉強上の効果とキャリアの将来性の双方におけるメリットを認めることである。政府が雇用者側と大学側に、それを認めるよう働きかけることも大切であろう。

2. ギャップ・イヤー：概説

モリス・ジェンキンス (Maurice Jenkins)

元ブリティッシュ・カウンシル職員

定義

「ギャップ・イヤー」とは正確には何だろうか。この質問に答えるのは一見難しく思える。簡単に言うとそれは、若者が中等教育終了後大学入学までの間に取る1年間の期間のことである。ところで、1年間休みを取っている18歳の若者全員がギャップ・イヤーを取っているのだろうか。実際の例を見てみよう。学生Aは大学入学を許されているが、基本的にリラックスして過ごし、マクドナルドでのアルバイトで幾らかのお金を稼ぐために1年の休みを取っている。学生Bは東南アジアで環境保護のボランティアに参加するために1年入学を遅らせている。学生Cは日本の私立学校で比較的待遇の良い英語教師の仕事をするために1年の休みを取っている。(注：本稿の筆者は東京のブリティッシュ・カウンシルで働いている時に上記の「学生C」のケースに何件か遭遇した。英語教師の仕事は、「プロジェクト・トラスト」の創設者であるMaclean-Bristolさんによって紹介され、日本のギャップ・イヤーリエゾンオフィスと同じように機能しているかどうかを確かめるように求められたのだが、ブリティッシュ・カウンシルは実施しなかった)

ギャップ・イヤーはさらに広い意味を持っていることもここで述べておかなければならない。大学卒業後、就職するまでの間の1年を指す場合や転職をする際の1年間、または結婚前後の1年間を指す場合もある。しかし本稿では、中等教育終了後大学入学までの1年間の意味に限ることとする。

歴史

ここでギャップ・イヤーの歴史を簡単に見ておくことは、さらにその正確な定義を得るために役に立つであろう。ギャップ・イヤーという概念は1960年代に生まれたと言われているが、実際はさらに遡ることができる。17世紀の中頃から19世紀初頭にかけて、英国の上流階級出身の若い男性は、「グランドツアー」と呼ばれるヨーロッパ各地の主要都市の文化や上流社会を経験するツアーに参加した。ツアーは数ヶ月のものから数年間のものまで様々であった。それは富と自由の象徴ともなった。「グランドツアー」に参加できるのは上流階級の人々に限られていたことは注目すべきである。当時の英国には色濃く階級社会が残っていたわけだが（現在でも残っていると主張する人もいる）、労働者階級は農地や工場内でこつこつ働き、その搾取の結果上流階級は悠々自適な生活を享受することができた。グランドツアーの参加者の社会的特徴を頭に入れておくことは、ギャップ・イヤーの参加者の特徴をつかむのに役に立つ。

グランドツアーの内容や目的についてさらに述べると、まず広い意味での目的とは、参加した若者の精神発達を促し、世界に関する見聞を広めさせることであった。英国内に留まった人々

の為に、ツアーに参加して発見したことを報告する義務も負うようになった。芸術や考古学、そして彫刻術を学ぶことがツアーの主な内容である。

19世紀に大量輸送が可能になって以降は、旅行はさらに容易になった。多くの使用人を伴って大型バスで旅行する必要はなくなった。しかしツアーへの参加はそれでもなお、特権階級の富裕層に限られていた。19世紀後半に入って、若い女性の参加が見受けられるようになり、イタリアへの旅行が流行となった。しかしながら常に、成人としての生活に入る前の「休み」は、一般教養を身に付けその過程で付加的に成熟するという目的を持った個人によって試みられた。そしてツアーへの参加は、自分で資金調達ができる人々に限られたままであった。

経済不況、2つの大戦そして戦後の平和構築の結果、20世紀の後半になってグランドツアーは復活したのであるが、形はかつてのものとは大きく変わっていた。1960年代は寛大な時代であり、大英帝国の遺産が色濃く残っておいた。そして知性を育て国際理解を深める手段としての若者の海外旅行については、第二次大戦終焉以降活発的に議論されてきた。英国では「ギャップ・イヤー」として一般的に知られ、他国では他の呼称で呼ばれる「休み」が実施されたのは1957年であり、その年はNicholas Maclean-Bristol 他が「若者を海外にある程度意義のある（長い）期間派遣し、地域社会のために働き、そこから学ばせることを目的」として「プロジェクト・トラスト」を立ち上げた年である。

プロジェクト・トラストがその後歩んだ道のりについては、Nicholas Maclean-Bristol が発した次の言葉が最も良く物語っている。

「最初に3人の青年が、アジスアベバの貧民街にあり、エチオピア皇帝の孫である Alexander Desta 王子が所有している学校へ派遣された。そしてここ40年間で、6000人近い若者が3人の先駆者の後を追ったのである。彼らはそれぞれ50以上もの異なった国に派遣された。中国からチリまでの様々な国での英語教育の仕事、南アフリカでエイズ患者の子供たちの為の仕事、モーリタニアでイナゴの大量発生を監視する仕事、南アフリカで外国人向けの学校運営の手伝いをする仕事、ウガンダで親がいないチンパンジーの代理母になるという仕事、など仕事内容は多岐に渡った」

プロジェクト・トラストは現在も運営されており、(ギャップ・イヤーの) 現状調査のための本稿においても今後言及されるであろう。ボランティア活動はこれまでもそして現在でもこの経験(=プロジェクト・トラスト)の主な特徴である。派遣前に集中的・徹底的な訓練があり、帰国後に報告の義務があることもまた重要な要素である。費用面に関しては、「ボランティアに選ばれると、海外に行くのに4480ポンド(961536円:2008/09年)を稼がなければならない。それで旅行に関するほとんど全ての費用(11-12ヶ月分)がカバーされる」とプロジェクト・トラストの担当者は言う。プロジェクト・トラストには旅の概要説明と帰国後報告が含まれ、ボランティア活動と地域コミュニティとの共働に重点が置かれる。この費用はギャップ・アクティビティ・プロジェクト(下記参照)よりも高く、費用には航空運賃、集中的な概要説明(スコットランドのヘブリディーズ諸島で行われる)と帰国後報告が全て含まれていることも強調しておかなければならない。

ギャップ・アクティビティ・プロジェクトについてもここで述べておかなければならない。ギャップ・アクティビティ・プロジェクトはボランティア参加者の配置を容易にするために1977年に設立された。派遣期間は通常4ヶ月から6ヶ月である。11ヶ月かかるものもあるが、これらは学校派遣である場合が多い。オーストラリアの学校で参加者が11ヶ月間正確には何をしているのかということと、これがどのようにギャップ（イヤー）の概念とつながるのかということは明らかになっていない。費用は1300ポンド（279,107円）で、これには航空運賃・保険等は含まれていない。ギャップ・アクティビティ・プロジェクトはプロジェクト・トラストと似ており、下記に挙げる商業企画とは違って合法的にギャップ・イヤーの概念に当てはまっている。

上記のプロジェクトとは違って、「プリンストラスト・チームプロジェクト」も場合によってはギャップ・イヤーの概念内に入ると考えられているが、それは英国中の青年サービスや地方政府によって運営されている12週間のプロジェクトとして、中等教育の延長線上にあるもの、または、中等教育終了後の職業教育訓練として見る方が適切である。

プロジェクト・トラスト型やギャップ・アクティビティ・プロジェクト型とは違って、他の全く違う種類として認識されるべきものは、営利的な冒険旅行である。この種の活動の先駆的な存在（または少なくとも初期の例）としては、1973年にオーストラリア人のグラハム・ターナーによって計画された、英国のダブルデッカーバスを利用したカトマンズへの旅行がある。これは冒険休暇であり、時代の流れに即していた。1986年にグラハム・ターナーは自らのビジネスを売却し、「トップデックトラベル」という名前の旅行会社によって運営は引き継がれた。その売物の中に「ギャップ・イヤー」のツアーを宣伝したものがある。それは「ヨーロッパ探検」パックツアーと呼ばれ、25日間でヨーロッパを回り、費用は3079ドル（334517円）を少し上回るくらいである。広告から判断する限りでは、そのツアーは現代的な「ギャップ・イヤー」というよりは、最新版「グランドツアー」に近い。また「ギャップ・イヤー・ドットコム」という会社は、短期間で冒険志向のプロジェクトを多く提供している。代表的なものとして、ケニアで2週間行われる「アンボセリ象と野生生物プロジェクト」がある。このプロジェクトの参加者は「ケニア象を長期間に渡って保護するために、ケニアの環境保全団体や地域社会の人々と共に働くことになる。このアフリカにおけるプロジェクトは科学的研究であり、野生の象の群れを追いかけて観察し、人間の欲求と抑圧が増加している世界で環境保護が直面している課題について学ぶことになる。」この全てが2週間で行われるのだ！費用は892ポンド（192092円）である。この費用がツアーのどこまでをカバーしているのかに関しての指示はないが、現地にかかる費用のみしかカバーされていないのはほぼ確実だろう。他の「ギャップ・イヤー」計画業者についてはトニー・クラーク氏の概要説明で述べられている。

オプションの比較

上述のように、多くのオプションが存在する。「冒険」の要素が入ったガイド付きバスツアー、短期間の冒険休暇、12週間の職業訓練とチーム社会プロジェクト、数ヶ月間のギャップ・ア

クティビティ・プロジェクト、丸1年間で様々なボランティア活動に費やすプロジェクト・トラスト、等である。古い諺にあるように、「自分がお金を払って、自分で選択する」ということである。

ここではCSV (Community Service Volunteer : 地域社会サービスボランティア)の働きと、それが提供している英国内でのボランティアの機会についても述べておく必要があるが、筆者がトニー・クラーク氏の概要説明に付け加えることは何もない。

参加者の数

オプションが多岐に渡り、ギャップ・イヤーへの参加は基本的に個人の決断に任されているため、正確な数字を出すのは非常に困難である。その理由としてまずは、「ギャップ・イヤー」の概念をどこまで広げるのか決める必要があることが挙げられる。プロジェクト・トラスト等が提供している1年間のプロジェクトに限定するのか、それとも2週間の冒険休暇も含めるのか。そしてさらに、中等教育終了から大学入学までに1年間の休みを取っている若者の中で、「ギャップ・イヤー」に参加するために休みを取っている人の割合はどのくらいか概算しなければならない。UCAS は大学に遅れて入学する学生の数を算出しているが、その詳しい内訳は出されていない。数値は2002年(2003年入学)には全体の7.9%(29139人)であったが、2006年(2007年入学)の7.3%(28524人)に減少している。英国の高等教育コンサルタントであるトニー・クラーク氏が指摘しているように、ギャップ・イヤープロジェクトに参加している間に大学に最初の入学願書を出す学生も今後現れてくることを、我々は考慮に入れなければならない。

UCAS、大学、雇用主の姿勢

トニー・クラーク氏が秦由美子氏に説明したところによると、全体的には肯定的に受け入れられているようである。UCAS のホームページから引用すると、「多くの雇用主や大学は、ギャップ・イヤーを利用して貴重な経験を得た志願者を好意的に評価するであろう」ということである。UCAS は、上述のプリンストラスト・チームプロジェクトの参加者の事例研究も有する。個々の大学の姿勢に関しては、下記のブリストル大学のコメントがその代表的なものであると言えよう。「入学延期について。ほとんどの学部は、学生が学校教育終了後に1年間の休暇を取りたいと思った場合でも入学願書を受け付けるであろう。学生は入学願書を次年度用に提出し、願書の「個人的報告」欄に休暇中の計画を書く必要がある。関連する職業経験を得る機会があることも強調されるべきである。大学案内の各学部入学関連の項には、入学を延期する場合の所見が簡潔に書かれている。入学志願者の公平性を保つために、入学延期者の定員は通常限定されている。場合によっては、より高いものが提供されることがある」とのことである。筆者はさらに情報を探したが、それ以上は何も見つからなかった。雇用主の姿勢については、トニー・クラーク氏の概要説明を参照のこと。筆者はそれ以上に付け加えることはない。

学校の関与

懸命に探したのであるが、筆者は学校の（ギャップ・イヤーへの）関与に関する言及を見つけることができなかった。しかし筆者はこの点に関してオープンにしている。トニー・クラーク氏は上述の概要説明の中で、ギャップ・イヤーは基本的に学生個人の決断によるものであることを強調している。筆者は政府が直接的に関与しているかどうかについても証拠を得ることができなかった。トニー・クラーク氏が述べているように、「政府や雇用主からの直接的な財政援助は今まで受けていない」のが現状である。

費用は誰が負担するのか？

では誰が費用を払うのか。基本的には参加者本人と（または）両親が払う。プロジェクト・トラストはウェブサイトで資金調達のためのヒントを紹介しており、場合によっては派遣期間中に報酬を受け取ることもある。

個人的・社会的利益

一般的に、参加者が今まで以上に成熟し、個人としてさらに視野を広げることができるのがギャップ・イヤーを取ることの利益とされているが、そのことが社会的な利益にもつながっていると推測しても良いであろう。特定の職業上の利益も場合によっては得られるであろうが、その割合は限られている。また、ギャップ・イヤーの経験は参加者の人生を完全に変わらしてしまう。

危険性

現代の世界は1970年代とはかなり異なっていることは強調しておかなければならない。もちろん70年代にも危険はあっただろうが、誘拐やテロなどが起こるような現代ほど危険ではなかったと筆者は考える。参加者は多くの場所に行くことができるが、パキスタンや中東の国に行こうと考える者は勇敢であり、無謀であるといえる。スーダンではある英国人の教師が逮捕・収監され処刑されそうになったが、トップレベルの外交的介入があったおかげで解放されたという事件が最近あった。彼女のクラスでは生徒たちがテディベアに「モハメッド」と名前をつけ、そして教師はそれに合意した。この出来事により英国内では、参加者に対しては出発前に、派遣される国に関する詳細な文化的概要説明をする必要があることが強く主張されている。

日本での適用

日本ではこの制度は適用できるだろうか。個人レベルでは、このような経験は多くの高校生にとって大きな利益になることは明らかであるが、視野を広めるような経験を最も必要としている若者の参加をどのように呼びかけるのかという件に関しては、多くの場合課題になるであろう。参加することによって得られる、視野を広めるような経験が、社会に対しても西洋と同

じように供給されるであろう。日本の場合は「言語」が大きな問題となる。日本語のみで参加者が活動を行うことのできる場所は非常に限られているからだ。それを踏まえても、英語、日本語そして他の言語を組み合わせで行われるプロジェクトが NPO によって組織されており、実際に成功例はいくつもある。従って日本においては、言語教育を含めた派遣前集中訓練をすることで、多くの障害を乗り越えることができるだろう。国内におけるサポートもまた提供されなければならない。上述の2つの組織、プロジェクト・トラストとギャップ・アクティビティ・プロジェクトがサポートを提供している。考慮しなければならないもう一つ重要な要素は、ギャップ・イヤーへの参加をどのように大学（特に私立大学）入学の仕組と調和させるのかということである。

しかしすでに述べたように、これに関してはかなり融通が利くようになっているので、昔に比べると参加の機会が広がっていると言っても良いだろう。

ギャップ・イヤープロジェクト参加の利点の正確なリストに関してはトニー・クラーク氏の概要説明を参照のこと。

もし筆者がギャップ・イヤーの実現性を調査するべく旅行を計画するのなら、筆者はまず上述の二つの組織、プロジェクト・トラストとギャップ・アクティビティ・プロジェクトにコンタクトし、それぞれの本部を訪れ、どのような活動をしているかを見て、ギャップ・イヤーの参加前・参加後の人々と話をしたりするであろう。もちろん他の人は違った考えがあるだろうが。

3. ギャップ・イヤーの要約

大橋良子 (IT コンサルタント)

はじめに

本章ではトニー・クラークとモリス・ジェンキンスの文書を要約する。二氏の実際の調査や例等は、纏めるにあたり支障が生じない限り割愛した。二氏の文書にはない内容を補足した部分については注意書きとして挿入した。

1) ギャップ・イヤーの概要

• ギャップ・イヤーの定義

狭義のギャップ・イヤーは、中等教育終了後大学入学までに取得する一年間と定義し、内容は海外ボランティア活動、職業経験、資金稼ぎ(アルバイト)と様々である。

広義のギャップ・イヤーは、大学卒業後就職までもしくは転職・結婚前後の間の一年間を指し、人生の節目や生活の転機に取得するものと定義できるのではないか。(注：教育雇用省 (Department for Education and Skills: DfES) 発行文書によると、一年に限定することなく複数年のギャップ・イヤーや半年レベルの短期ギャップ・イヤーも見受けられ、取得した本人がその時間をどのように使いどのように捉えたかでギャップ・イヤーと見なすとある。)

• 歴史

17世紀の中葉から19世紀初頭にかけてのグランド・ツアーに由来するものと考えられている。グランド・ツアーは、ヨーロッパ主要都市の文化や上流社会を経験するためのもので、英国上流階級の青年男子が参加し、数ヶ月から数年と実施期間は様々で、富と自由の象徴ともなった。当時は階級社会で労働者と資本家の格差があった時代であり、悠々自適な生活を送っていた階級による旅行であった。グランド・ツアーは、若者の精神的成長を促し、世界について見聞を深めることを目的とし、帰国後に参加しなかった者のための体験報告義務があった。ツアー内容は多くが、芸術、考古学そして彫刻術を学ぶことにあった。

19世紀に大量輸送が可能になってからは旅行が容易になったが、富裕層に限られていた。同じく19世紀後半には若い女性が参加するようになった。例えば、イタリアへ教養習得の仕上げを目的としたツアーで、やはり富裕層でなければ参加できないものであった。

20世紀、世界恐慌と二つの世界大戦を経てからのグランド・ツアーは様変わりした。1960年代は大英帝国色が強く残った時代であったが、グランド・ツアーはギャップ・イヤーと変更され、知性を育み国際理解を深めるための若者の海外旅行として知られるようになった。また、イギリスでは2年間の兵役義務が1958年に廃止されたこともあって、政府は旅行と文化交流によって若者の国際的理解を促したいと検討していたので、ギャップ・イヤーは広く受け入れられるようになった。

イギリスでは、若者を海外にまとめた期間派遣して地域社会に奉仕することによってそこから学ばせることを目的とした機関「プロジェクト・トラスト」が1957年に発足した。ギャップ・イヤーは他にオーストラリア、ニュージーランド、カナダで普及している。

1973年に「ロンリー・プラネット」というアジアをめぐる旅行ガイドが出版されて、自由旅行とボランティアが若者たちに人気となった。1977年に「ギャップ・アクティビティ・プロジェクト」という企業が発足し、「プロジェクト・トラスト」と類似の活動や世界中を回る旅行を展開しはじめた。また、1986年には「トップデック・トラベル」というグランド・ツアーに近い冒険旅行を営利目的で扱う会社も発足した。1990年初頭には、ギャップ・イヤーは大学入学前に実施する活動の一つの選択肢として人気となった。しかしギャップ・イヤーに掛かる費用は家族におよぶ影響が大きいと、自由旅行・ボランティア活動のほかに「働く」こともギャップ・イヤー活動の一つとなった。

● 参加者数

ギャップ・イヤーの定義が広いと把握しにくい。中等教育から高等教育へ移行する間のギャップ・イヤー取得について限定しても、大学入試センター(UCAS)に出願してからギャップ・イヤーを取得する学生だけでなく、出願する前にギャップ・イヤーを取得する学生がいるためである。UCASは、2002年は7.9%(29,139人)、2006年は7.3%(28,524人)と減少傾向にあると報告しているが、出願する前の学生数が把握できていないので確かな報告とは言えない。

2) ギャップ・イヤー参加者と活動について

● ギャップ・イヤー参加者の目的

ギャップ・イヤーに参加する目的は以下の3点に集約される。

- 自由旅行により様々な人と出会い、視野を広げる。
- 英国内または海外で、ボランティアとして他人を助ける活動に携わる。
- 海外で働き、視野を広げると同時に幾らかの収入を得る。

● ギャップ・イヤー参加活動費用

基本的には本人か両親が支払う。ボランティア活動の内容によっては現地で謝礼を受け取ることもあるらしい。一般的にはギャップ・イヤー活動提供者が料金を提示。発展途上国では長期滞在のコストが比較的低い事実も活動の動機になっている。

● ギャップ・イヤー活動内容について

「プロジェクト・トラスト」での地域社会への奉仕とは、英語教育支援、子供のエイズ患者に対する支援、外国人向け学校経営支援、孤児や動物の世話支援等であり、ボランティア活動と現地コミュニティと共働することに重点が置かれた内容になっている。派遣先は、中国からモータニアまで世界中(ただし例を見る限り発展途上国)に及んでいる。また、派遣前に集中

のかつ徹底した研修があり、帰国後には報告の義務がある。費用は高めで、航空運賃や事前講義、帰国後報告会まですべて含んだ価格を提示し、参加者に負担を求めている。

「ギャップ・アクティビティ・プロジェクト」では、4ヶ月から6ヶ月のプロジェクトを提供している。活動は上述した「プロジェクト・トラスト」に類似しており、地域毎のボランティア活動が主体である。費用は安めだが、空運賃や保険などは含まれていない。

「プリンストラスト・チームプロジェクト」はイギリス内の青年サービスや地方政府が運営する12週間のプロジェクトを扱っている。中等教育の延長線上にあるが職業教育訓練の要素が強い。

「トップデックトラベル」は上述したように、グランド・ツアーをモデルとしたヨーロッパ探検旅行を扱っていて冒険バスツアーの要素が多い。

「ギャップ・イヤー dotted コム」は短期間の冒険旅行を多く提示している。例えば二週間で野生動物保護の課題に直面するツアーがあり価格は低めである。課題に直面するのは「見るだけ」なので難しくないが問題の解決に貢献できるわけではないので留意すべきである。

以上より、ギャップ・イヤー産業では、ボランティア活動、冒険バスツアー、短期冒険旅行、職業訓練など様々な活動を提供している。そのほかにも多くの団体が言語に特化したプログラムなど提供している(クラークのリスト参照のこと)。ただし留意すべきことは顧客志向にある点である。

● ギャップ・イヤー活動での危険性について

1970年代と比較して誘拐やテロが多く発生していて十分危ない。中東方面や紛争地域へ赴くのは無謀であると考ええる。また派遣先での常識・常識やマナーについて十分説明を受けるべきで、最低限の危険は回避するよう政府から指示が出ている。

(注：かつてないインターネットの普及により世界中のニュースが瞬時に手に入るため、現地の様子がより具体的に分かるようになったのではないと思われる。依然として危険地区でありながら、かつては危機感をあおるような報道が少なかったため無知であったのかもしれない。しかし、逆に情報がいつでも手に入ることに安住して派遣先について下準備を怠る旅行者が増えているのも事実である。いずれにしても危険予測も含めた事前研修が必要だと思われる。)

● ギャップ・イヤー活動提供企業のあり方について

ギャップ・イヤー関連企業を代表する非営利団体「イヤー・アウト・グループ」は、ギャップ・イヤー活動のサポートとして次の基準をクリアするよう提唱している。

- 提供するプログラムとサービスの内容を明確かつ正確に説明すること
- 国内だけでなく海外でも安全性について高い支援をすること
- プログラムを評価し、内容向上を図るためにシステムを整えること
- プログラムは責任を持ち、社会、環境、地域の問題に十分配慮すること

- 顧客の資金を守るため、関係する財務上の規制を遵守し安全措置を講じること

• ギャップ・イヤー活動の傾向について

特定のスキルを持つ経験豊富なボランティアが重視される傾向にあるため、目的を見据えた旅、海外での労働、英国内でのボランティア活動が増えると考えられる。

また CSV は、イギリス国内のギャップ・イヤー活動として、家を離れてフルタイムのボランティアを紹介している。例えば障害者の世話や若年犯罪者の社会復帰やホームレスや難民との労働などがある。

3) ギャップ・イヤー周辺関係者による評価について

• UCAS と大学の姿勢

ギャップ・イヤー制度については全体的に肯定的に受け止められている。それは、ギャップ・イヤー経験者は成熟度が高く自立していて確固たる目的を持っていることが多いためである。また、企業側がギャップ・イヤーで貴重な経験をした経験者を雇用する方向を打ち出しており、卒業後の就職が有望だからである。

ただし、大学側では遅延入学者の人数を定めていて、遅延希望者によるギャップ・イヤー活動計画によって遅延を許可するか判断している。そうすることでギャップ・イヤー活動計画が充実し、学生にも実りが多いものとなるからである。

また、大学での専攻と関連したギャップ・イヤー活動を検討している学生には支援を惜しまないと思われる。しかし、ギャップ・イヤー活動に対する大学の経済的支援はみられない。

• 雇用側・企業の姿勢

雇用関係者は、ギャップ・イヤー活動について評価をするが、何を活動から学んだかなぜその活動を行ったのかを明確にし、どういった学びが職場での場面に結びつくのか表現されていないと雇用に結びつかないと考える。

CSV の調査によれば、有益なギャップ・イヤーを送った学生は職場での意思決定やコミュニケーション能力、対人関係構築において優れていると雇用関係者の 88%は判断している。また、ボランティア活動などで様々なスキルを獲得した学生は職場での昇進も早いと人事関係者の 79%が認めている。

エンジニア関連企業では、「イヤー・イン・インダストリー」プログラムに参加した学生を職場経験がある点で高く評価している。また、ギャップ・イヤー学生を受け入れることは職場の経営改革につながることもあり、受け入れ側にもメリットがあると評価されている。そのプログラムは産業界で実際の仕事を体験する国家プログラムであり、参加した学生の 26%が上位 10%のトップクラスの成績を収めている。

• 社会の評価

ギャップ・イヤーを経験したからといって、包括的に参加者全員に成長があったとは断言しにくい。どういった活動をしてきたか参加者の努力に左右される。そして、ギャップ・イヤーを経験した人はその後の人生がすっかり変わると評価されている。また、個人の成長が社会的利益につながるとも考えられ、ギャップ・イヤーによる人生勉強は結果として社会のためにも必要だと思われる。

● 日本への導入について

若者が自主的にギャップ・イヤーの行動計画を立てるように促すことが必要になる。以下のようなギャップ・イヤーの目的を学生に広く説明する必要がある。

- 学問研究を一時休止する
- 世界に視線を移し、他の興味を追求する機会を持つ
- 自立心を養う
- 新たなスキルを得る機会を持つ
- 最終的なキャリアの将来性を高める
- お金を稼ぐ
- ボランティアや地域社会の仕事を通じて、他人を助ける
- 視野を広げる

地域社会の支援をする団体にギャップ・イヤーボランティアを受け入れるように求めたり、企業側にギャップ・イヤー学生を受け入れるように働きかけてもよい。(注：その際インターンシップとの差異を説明する必要があるのではないか。)最も重要なことは、企業側と大学側がギャップ・イヤーの潜在的なメリットである大学での勉強上の効果とキャリア開発への有効性を認めることである。政府が認めるよう働きかけることも可能だと考える。

ジェンキンスは、日本で導入する場合、言語が大きな問題になるが、効果的に事前準備に組み込めば克服できると考えられると共に、大学の入学システムとの調和も問題点であるが(例えば休学者の取り扱い)、融通が利くようになるだろうと考えている。

イギリスの大学

4. キングストン大学 (Kingston University)

ロンドン大学教育大学院・市川学園

登道 孝浩

- 1) 同行者 なし
- 2) 出張期間 平成20年2月29日(金)
- 3) 出張先 Kingston University (キングストン大学)
Penrhyn Road
Kingston upon Thames
Surrey KT1 2EE
United Kingdom
URL: <http://www.kingston.ac.uk/>
- 4) 面談者 3名
Dr Andrew KING: Lecturer in Sociology, Kingston University
John MARRETT: Student
Rachel KING: Student
- 5) 出張目的 ギャップイヤー研究者ならびにギャップイヤーを取った学生に対するインタビュー聴取
- 6) 出張結果 1) インタビュー聴取
2) 資料提供

① キングストン大学の概説

キングストン大学はかつてポリテクニク(実用的なコースも存在する英国の総合制高等教育機関)であったが、1992年に大学に昇格した。キングストン大学には様々な経歴・階級・背景を持つ学生が入学して来ており、ヨークやオックスフォード、ケンブリッジといった長い歴史を有する大学が上流・中流階級出身の学生を一貫して受け入れているのとは一線を画している。伝統的に、ギャップイヤーを取る学生は上述のような古い大学に入学する傾向があったのだが、最近ではそれも変わりつつある。学生数は学部生と大学院生を合わせて20000人程である。

② インタビュー調査概要(回答者: Dr. King)

(質問1)

(a) ギャップイヤーの制度はいつ頃から始まったのか。

King: 一般的なギャップイヤーの起源に関して、英国では数百年も前から類似した制度は存在

したのだが、実際に「ギャップイヤー」と呼ばれるようになったのは1990年代からである。キングストン大学においては、入学時期を延期し約1年間のギャップイヤーを取る学生が最近が増えてきた。ここ5年で確実にギャップイヤーを取る学生は増加している。

(b) ギャップイヤーを導入した理由とそのプロセスはどのようなものか。

King: ギャップイヤーの始まりについては正式な記録はないが、ケンブリッジ大学やオックスフォード大学の入試にからんでギャップイヤーが見られるようになったという意見がある。つまり、学生が入学試験の結果を待つ間がギャップイヤーということである。

(質問2)

(a) ギャップイヤーの広がりについて私的な見解を聞かせてほしい。

King: この質問に対しては端的に答えるのは難しい。何故なら、ギャップイヤーに関する定義が定着していないために、自分の経験をギャップイヤーと呼ばない学生もいるからである。Birkbeck College, University of London の Andrew Jones 教授によると、年間25万人の若者がギャップイヤーを経験しているそうである。また、別の社会学者である Sue Heath 教授によると、年間で約4万5千人の学生が大学入学前にギャップイヤーを取っていると推測している。これとは別に大学卒業後にギャップイヤーを取り、その後就職する学生もいる。

(b) 男女の比率はどうか。

King: 上述の Andrew Jones 教授によると、7対3の割合で女性の方が多いようである。特にイングランド南部の中流階級出身の白人が多いとのことである。女性が多い理由として、ギャップイヤーが伝統的にボランティア的要素を持つことが挙げられる。若い女性は男性と比べて社会的規範に従わない傾向にあったので、女性はギャップイヤーを選択することで若干の自由を満喫できた、ということもあったであろう。これらは私の推測に過ぎないが。

(c) ギャップイヤーを取る学生が在籍する学部バラつきはあるのか。

King: 自然科学系の学部はギャップイヤー取得学生の入学に積極的ではないのだが、芸術・ビジネス・人文科学の各学部では積極的に受け入れているようである。キングストン大学においては、ギャップイヤーを取得した学生は特に問題なくどの学部にも応募できる。

(質問3)

(a) ギャップイヤーの期間は平均してどのくらいか。

King: 1年間ぐらいであろう。ただ、2年間取る学生もいる。1年間のギャップイヤーが楽しかったために、さらに1年延長した女学生もいた。その他の形として、学生は大学で何を勉強したいのかという目的が見据えられないためにギャップイヤーを取るという選択にたどり着くようである。1年の期間を費やして自分探しをし、ギャップイヤー中に

大学入学を申請するということである。この場合は入学を延期するのではなく、入学するまで一定の時間を設けるということである。

言い換えれば、自分が本当にやりたいことを探す期間とも言える。入学する際に心の葛藤を感じる学生もいるので、今入学してしまうよりも、1年間寄り道をして間をおいたほうがより有利ではないかと考えるようである。大学で勉強するにはお金もかかるから慎重にならざるを得ないのであろう。また、授業料が高いので、ローンを組んで入学する学生もいる。

(b) ギャップイヤーの内容はどのようなものか。学生は期間中どのように過ごすかについて、具体例を挙げて頂けるか。

King: 「ギャップイヤーとは？」と聞くと、大概の人は海外旅行と関連付けると思う。私自身が調査した結果では、インタビューした半数の人が旅行をしていたし、残り半数は1年間ずっと国内で働いていた。ギャップイヤーというと、特にボランティア関連の旅行を連想される人が多い中で、実は他の事をしている人も大勢いたり、その内容は多岐に渡る。上述の Sue Heath 教授は経験のヒエラルキー化（階層化）をして、海外でボランティア活動に携わることはヒエラルキーの上位で、家にいて何もせずただだと過ごすことはヒエラルキーの下位に属しているという分析をしている。

(c) ギャップイヤーの平均的なコスト（費用）はどのくらいか。

King: 英国では多くの民間の機関がある。例えば、Gapyear.com などのウェブサイトをはじめ有給のボランティアプロジェクトを主催している機関もある。費用としては、4000～5000 ポンドというところだろうか。他に慈善事業を行う機関もあり、そちらの費用はこれより低いかも知れない。また、単にお金を払って行くというのもあり、多岐に渡っている。仮にギャップイヤーを利用して世界中を旅行しようと思ったら、かなりの費用がかかると言える。

(質問4)

(a) キングストン大学では、ギャップイヤーに関して支援制度などはあるか。

King: 本学の Student Life Office という事務局に尋ねてみたが、入学に関しては、ギャップイヤーの有無は特に考慮しないとのことである。UCAS の入学願書にギャップイヤーの経験などが記されていれば、好意的に受け止められる可能性もある。しかし一般的に、ギャップイヤー経験の有無は入学審査には影響していないといえる。ギャップイヤーを経験した学生を積極的に取り入れているわけでもないが、消極的でもない。ただ、大学入学に関しては、各学部の各学科が決定権を有している。例えば、John や Rachel のいる Art and Social Science 学部では、ギャップイヤーの有無は全く考慮しないであろう。逆に、自然科学系の学部はギャップイヤーの経験を否定的に考慮するであろう。それは、理工系の学部では優秀な学生には直ちに大学に入学してほしいという事情があるからである。ビジネス学部ではギャップイヤー経験を好意的に評価するかもしれない。以上のように、各学部によって姿勢は異なる。

(b) ギャップイヤーをとるための手続きや準備について教えてほしい（具体例も含めて）。

King : 大学側で行う手続きは特にはない。逆に多くのギャップイヤーの提供機関が学校を訪れる。大学側としては、大学卒業後にギャップイヤーをとる学生のために就職情報や書籍などライブラリーを公開する。ギャップイヤーの提供機関が大学に来るので、学生はギャップイヤーの提供機関に関する情報を得ることができる。

(c) 大学入学前のギャップイヤーに関してはどうだろうか。キングストン大学ではそのような学生向けのプログラムはあるか。

King : そのようなプログラムは特段ないと思う。本学では大学入学を促進する活動は積極的に行っている。特に、地方の学生にキングストン大学に関する情報が行き渡るように努めている。しかし、ギャップイヤーを勧めるような活動は行っていない。また、大学卒業後にギャップイヤーを取る場合については、アドバイスレベルだけで、特にプログラムなどはない。キングストン大学も含め、各大学には Placement（職業紹介）コースという1年間労働を体験できるコースがあるが、これはギャップイヤーと呼ばず Placement（職業紹介）と呼んでいる。

(質問 5)

(a) ギャップイヤーについて、大学や民間の組織からの基金はあるか。

King : 大学からの基金というのではない。本学は ERASMUS を提供している。これは他国の大学で1年間勉強し帰ってくるというもので、ギャップイヤーとは呼ばれない。大学からの基金はないが、民間の機関からはあるかもしれない。また、もしかすると大学入学の後先に民間企業を利用してギャップイヤーをとる学生もいるかもしれない。しかし、この場合はギャップイヤーとは呼ばれない。これはギャップイヤーの定義に関係するのだが、英国では、大学在学中に同様の活動を行う場合は、Placement（職業紹介）やインターンシップと呼ばれる。英国では、Placement やインターンシップは、学生の学習の上でも重要な要素と捉えられている。

(b) 政府からの基金はあるか。

King : 何とタイミングの良い日にインタビューにいらっしやっただろうと思っていたところであるが、それは、本日（2008年2月29日）、政府が新たな Platform2 と呼ばれるイニシャティブ（提案）を発表したということである。1000万ポンドもの資金が、恵まれない若者のサポートに活用されるそうである。若者は、海外でのボランティア活動も含む1年間のボランティア活動を行う。Christian Aid や Islamic Relief も関係している、BUNAC というギャップイヤーの提供組織があるが、これに政府基金が投入されることになった。また1月初旬に、ブラウン首相は Global Fellowship と呼ばれる140万ポンドの基金を発表した。これも海外を含めた場所での若者のボランティア活動を支援するものである。政府からの基金は、以上2つである。その他には、私の知る限りではないと思う。それから、最近では、大学に授業料を導入した英国政府に対して批判が高まっている。これは一般の学生は言うに及ばず、とりわけ労働者階

級の若者は多大な影響を被るであろう。別の見方をすると、大学への通学に非常にお金がかかるためにギャップイヤーを選択し、働いてお金を貯めてから入学する学生が増えるかもしれない。

(質問6)

ギャップイヤーについて、大学側そして学生側双方からのメリット（長所）とデメリット（短所）を教えてください。

King : 大学側のメリットとしては、様々な経験を有する学生が多くなることであろう。キングストン大学はこれまでも様々な背景を持つ学生を受け入れているので、それほど影響を受けないと思うが、伝統校などは確実に好ましいインパクトを受けるであろう。デメリットとしては、ギャップイヤーを好意的に受け止めていない理学部や工学部では規律的な問題があるかもしれない。しかし、これも変わる傾向にあるし、私は総じて良いことだと捉えている。ギャップイヤーをとる学生はその経験を通じて成熟していると思われるため、大学側は学生にギャップイヤーを経験してほしいとは思っていないはずである。一般的にはギャップイヤーは望ましいことだと私は思う。

(質問7)

ギャップイヤーを経験した学生とそうでない学生とでは、大学入学後の評価は違うか。

King : ギャップイヤー学生はゼミ内でも尊敬して見られると思う。これは、教員がギャップイヤーの経験の有無で差別するというのではなく、ギャップイヤーをとった学生は自分たちの経験をクラス（授業）に持ち込んでくれるということである。クラスの中で議論をする際に、「私は半年前、或いは数年前に、ギャップイヤーでこのような経験をした」などと言って、自らの経験を議論内で紹介することは良いことだと思う。議論の幅が広がるという意味では、素晴らしいと思う。いずれにせよ、ギャップイヤー経験が有るとか無いとかで差別することはない。

(質問8)

最後の質問だが、ギャップイヤーに関する Dr King の個人的なご意見を伺いたい。

King : 日本へのギャップイヤー導入を考えた際に、問題となるのは制度化することかもしれない。つまり、制度として与えてしまうと、学生のやる気を削いでしまう可能性がある。制度化によってやる気を削ぐ、また制度が整備されることで、個人の創造力を殺してしまう。また、ギャップイヤーでは様々な経験ができる。ところが、制度化して選択肢を限定すると、偏りが出る可能性がある。学生にはあらゆる選択肢を与えるべきであろう。働くよりも旅をしようなどと推奨するのは良くない。事実、英国ではこのような現象が見られつつある。とにかく、学生には多くの選択肢を与えることが重要であると思う。

③ギャップイヤーを取得した学生に対するインタビュー（回答者：Rachel, John）

(a) まず、ギャップイヤーを選択した理由を聞かせてほしい。

Rachel : 一番の理由は A-levels でグレード1（好成績）を取ったことである。その他の理

由としては、勉強に少し飽きていて、教育自体に感謝する気持ちがなかったし、本当のところは、少し休みたいというのがあった。もし直ちに大学に進学しなければならなかったら、きっと就職を選択していたと思う。

John : 私も同じような理由である。そして、長期間海外に旅行したこともなかったので良い経験になると思った。

(b) ギャップイヤーはどのような内容だったか。

Rachel : 高校卒業後に行った。当初は6ヶ月間の予定でブラジルに行ったが、仕事が楽しくなり結局1年間働くことになった。そこでは、幸運にもマネジメントの職に就き、2006年～2007年までの1年間、ショップでマネージャーとして働いたことで、貴重な経験をした。大学生活を送るうえでも、仕事をする上でも貴重な経験を得た。また、仕事は自分で見つけた。最初は旅行のみをする予定だったが、海外で多くの慈善事業に関わる「GAP」という会社を知るようになり、考え方を変えた。目的としては、キャリアを構築して成功したいと思っていたので、また、旅行もできたし様々な経験ができた。

John : 学期中の11月まで大学で学び、その後ジンバブエで3ヶ月過ごした。次の年の1月末に帰国して4ヶ月を過ごし6月に再び欧州へ行き、その後大学へ戻った。仕事はある団体を通して見つけた。また、ギャップイヤー参加の目的としては、旅をして世界を見たかったからである。特に私はジンバブエの国や政治に大変興味があった。友人もいたし、もう一度機会があればジンバブエに戻りたいと思っている。

(c) 次に、ギャップイヤーの成果について聞かせてほしい。ギャップイヤーで学んだこと、振り返ってみて思うことなどは何か。

Rachel : 生活していく上でのスキルを得たし、自分自身成長したと思う。今回学んだことを大学生活にも生かせると思う。また、お金の価値もわかった。教育を得られることにも、英国内で私たちが得られるものにも感謝できるようになった。もう少し旅行したかったというのが本音である。また、就職してしまったら大学に戻ろうと思わなかったかもしれない。しかし経験した仕事がとても楽しかったし、そのためには大学に行かなくてはと思うようになった。選択肢が広がったという意味では、最善の選択だったと思っている。

(d) 大学に入ってから何かギャップイヤーの影響を感じたか。

Rachel : お金の価値を実感したことで今まで以上に注意してお金を使うようになったし、貯金も少しできた。さらに、1年前よりも大人になって社会的スキルも身につけることができた。また、大学のゼミやエッセイを書く上では、以前より自信を持って自分の意見を言えるようになったと思う。グループで議論する際のスキルも上がったと感じる。

(e) ギャップイヤーのメリット（長所）とデメリット（短所）は？

Rachel : メリットは、自分が成長したことそして仕事の楽しさがわかったこと。デメリット

は、若くしてお金を持ってしまったことで、大学に行く動機付けを少し失ったことだと思う。

(f) ギャップイヤーをこれから入学する学生に勧めるか？

Rachel : もちろん勧める。ただしその人に依るが。私も最初は大学に行くか行かないか悩んだが、最終的には進学してよかったと思う。もしかしたら最終的に大学に行かない選択をし、後で後悔する人もいるかも知れないが。一般論として、ギャップイヤーを勧めたい。

(g) 最後の質問は資金について。資金は自分で貯めたか、それともサポートを受けたのか？

Rachel : 自分で貯めた。食費など一部は（親からの）サポートを得たが、基本的には自分で資金を捻出した。

(h) では John、ギャップイヤーで学んだことは？

John : パーソナルスキルを身につけたこと、そして文化的な魅力を発見したことである。また、学業やパーソナルスキルに自信がついたことである。

(i) 大学入学後にギャップイヤーの影響を感じたか？

John : 感じた。学業を修める上でも自信が出た。

(j) ギャップイヤーのメリット（長所）とデメリット（短所）は？

John : 私自身はデメリットを感じていない。もし仕事をしてそれがうまくいっていたら色々別の考えもあるのだろうが、私の場合はすでに入学延長をされていて帰る場所も決まっていたので。

(k) ギャップイヤーをこれから大学に入学する学生にも勧めるか？

John : 勧める。数学系や理工学系の学生には適当ではないかもしれないが、私のような人間には得るものが多いと思う。

(l) 資金はどうしたか？

John : 旅行と旅行の間は働いた。つまり自分で稼いだ。

※上記の Rachel と John へのインタビューを踏まえての Dr King の感想

Dr. King : 今日は楽しかった。私の調査結果から Rachel と John を代表として選んだ。旅行した人と、英国で仕事した人との代表として。あと Rachel も言っていたように、私の調査の結果でもテスト続きの後で休息がほしいというのが大多数の意見だった。

Rachel : A-level 試験では当初うまく点が取れなかったのだが、やっとな良い成績が取れたので。精神的にも開放され、積極的になれた。

登 道 : それがギャップイヤーを取った理由なのか。

Rachel : ええ。少し休憩が必要だった。また、良い効果もあった。

Dr. King : 二人からもスキルという話が出ていたが、勉強以外にも大学内で人間関係を構築する上でパーソナルスキルなどが大切なのであろう。大学入学は大きなステップには思えないかもしれないが、それ自体に圧倒される人もいるので、ある種の準備が必要なのであろう。

③ キングストン大学でのインタビューを終えて

本報告は、文部科学省研究プロジェクトである平成20年度「先導的・大学改革推進委託事業：英国におけるギャップイヤーなど、学生または入学予定者に対する長期に渡る社会経験を可能とする取組に関する調査研究」（研究代表：秦由美子准教授）による調査研究の一環である。

キングストン大学のインタビュー調査を通じて、当大学及び英国におけるギャップイヤープログラム導入の取組みとその現状を包括・報告し、今後の日本の高等教育におけるギャップイヤー導入の可能性を探り、その制度化の検討のための基礎資料となることを目的としている。

実際に渡英し、ロンドン郊外にあるキングストン大学を訪問して多くのことを知り得たわけであるが、とりわけギャップイヤーを研究対象としている研究者に出会い、インタビュー調査をできたことが大きかった。それはつまり、キングストン大学のみならず英国全体のギャップイヤーを取り巻く現状を把握する良いきっかけになったからである。

Dr King に対する質問内容、回答は上記の報告の通りであるが、その中でも特にインタビュー当日に、ギャップイヤーに関して政府が新たに Platform2 というイニシアティブ（提案）を発表したという事実は私を多少なりとも感動させた。ギャップイヤーに対してブラウン現労働党政府が非常に興味を示していることが理解できたからである。

また、インタビューを通して伺った2人の学生の経験談はそれぞれ個性的なものであったが、特に興味深かったのは、ギャップイヤーを取ることに決めた理由として一人の学生が「勉強に飽きて、少し休みたいと思った」と言ったことである。その後に Dr King も補足しているように、意外にもこのような理由によりギャップイヤーを選択した学生が多いという事実に驚かされた。そして二人の学生ともギャップイヤーを前向きに捉えていることに興味を抱いた。

中流階級以上の学生が取る傾向があるギャップイヤーではあるが、元はポリテクニクであり出身階級を問わず学生を受け入れてきたキングストン大学の経験を窺い知ることは、今後の日本におけるギャップイヤーのあり方、推進に大いに示唆を与えるものとなるであろう。

末筆ながら、インタビューに快く協力下さったキングストン大学の Dr Andrew King、学生の John Marrett さん、Rachel King さんに心より御礼を申し上げます。

5. バーミンガム大学 (Birmingham University)

登道 孝浩

- 1) 同行者 なし
- 2) 出張期間 平成20年2月28日 (木)
- 3) 出張先 University of Birmingham (バーミンガム大学)
Edgbaston
Birmingham
B15 2TT
United Kingdom
URL: <http://www.bham.ac.uk/>
- 4) 面談者 1名
Dr Chris WILLIAMS: Lecturer in International Education at Birmingham University
- 5) 出張目的 教育学研究者に対するインタビュー聴取
- 6) 出張結果 インタビュー聴取

①バーミンガム大学の概説

バーミンガム大学は1900年にバーミンガム市民によって建てられた歴史のある大学である。毎年世界の100カ国以上から学生が入学している国際的な大学らしく、ヨーロッパや中東、アフリカなどの地域研究に秀でた大学である。学部生、大学院生を合わせて毎年5000人の新入学生を受け入れている。

②インタビュー調査概要 (回答者: Dr Williams)

※教育学研究者によるギャップイヤーに対する私見

(質問1) ギャップイヤーの制度はいつ頃から始まったのか。

また、それに関する私見を聞かせてほしい。

Williams: 多くの女性が資格を満たしていれば40歳になればギャップイヤーを取りたいと考えている。そして、私は「ギャップイヤー」という名称はアメリカから来たと考えている。その名称ができるまでの期間もそのようなことは行われていたのであるが、「ギャップイヤー」という名前では呼ばれていなかったと思われる。もしあなたがオックスフォード大学やケンブリッジ大学に申し込みをした場合——9月スタートのための出願プロセスは7月や8月ではないはずである。翌年スタートする場合の面接時期は9月頃である。従ってオックスフォードやケンブリッジに行く場合、自動的にギャップイヤーの期間が生まれると言える。大学側はそれを歓迎するのだが、それは学生をより成長させるからという理由からである。これは面白い考え方であ

って、大学の入学は1～2ヶ月後になるので自動的にギャップイヤー期間が生まれるという良い例だ。他の大学もこのアイデアに倣うと思われる。

(質問2) ギャップイヤーの広がりについて私的な見解を聞かせてほしい。

Williams : どのくらいギャップイヤーが普及しているかであるが、英国では約12人に1人の割合だと思う。私達(バーミンガム大学)に関しては、ギャップイヤーに関するホームページを独自で持っているのを確認して頂ければ良いだろう。大学がギャップイヤーについて語っているし、そこであなた(登道)の疑問に対する答えが多く見つかると思う。

(質問3) 大学がギャップイヤーを奨励する理由、男女の比率、ギャップイヤー取得者の在籍学部のバラつき等についてどう思うか。

Williams : 大学がギャップイヤーを奨励する理由は二つあると思う。第一に、学生にさらに成長・成熟して欲しいからで、そして二つ目は、大学側はギャップイヤーの機会を与えないことで学生が減るのを恐れているからである。つまり、「ギャップイヤーはだめだ」と言ったら学生が来ない。優秀な学生や面白い学生が他の大学に行ってしまうかもしれない。だからどの大学も、「ギャップイヤーは良いシステムだ」と言うことに積極的なのだと思う。男女比については、おそらく同数くらいではないかと思う。また在籍学部の違いについてであるが、ギャップイヤーをとるのは社会科学系の学生が多いと思う。

(質問4) ギャップイヤーについて、大学や民間組織からの基金はあるか。

Williams : 資金援助はないと思う。例外として医学生はコースの途中で発展途上国に行くことを奨励されており、1年間アフリカやインドなどに行く。大学はその際に経済的に援助するか、最低限そのための手配はすると思われる。国際関係に関わる地理学の学生なども援助を受けられるかも知れないと思われる。

(質問5) 政府からの基金はあるか。

Williams : 直接的にはないと思われる。

(質問6) ギャップイヤーの長所と短所について教えてほしい。

Williams : 多くの人がギャップイヤーは良いことだと思っていると私は確信している。しかし一方でほとんどの大学スタッフ(教職員)は、学生の振る舞いはギャップイヤーを取得する前と後で変わらないと感じていると思う。

(質問7) ギャップイヤーに対する私見を聞かせてほしい。

Williams : 私が興味深いと思うのは、ギャップイヤーは学部学生によるギャップイヤーだけではないということである。伝統的な日本の教育システムとしては、高校卒業後、学士→修士→博士課程と進んで行くと思う。この流れのままでは、日本では修士課程の学生の多くが社会(労働)経験をしていないという問題が生じる。一方英国の

学生にとって、学士の後すぐに修士コースに進むというケースは大変珍しい。金銭的余裕がないために学部卒業後は一旦働くというのが通例である。もしある女性が若いうちに子供や家族を持ちたいと思えば18歳の時にその選択をし、30、35歳で高等教育に戻ることができるであろう。英国の教育システムは流動的で、年齢にとらわれないのである。従って我々英国人は「ギャップイヤーとはこういうものだ」と即座に認識できないのだ。人によって様々なギャップイヤーの取得方法があるからである。

他に、日本において重要なのはギャップイヤーを取得するのは当然で良いことだという認識を宣伝、推進することだと思う。何故なら、たとえ政府や大学がギャップイヤーを認めるシステムを作ったとしても、家庭でそれをさせまいとするプレッシャーがあると思われるからだ。日本では特に女性に対してそのプレッシャーがあると思う。親や家族からの「女性は30歳になる前に結婚するべきだ」等というプレッシャーである。英国ではそのような考え方はあまりないと思われる。学士課程を出てから結婚して、結婚後に再び修士課程に戻ってくる人も多く存在する。つまり本件に関しても英国では日本に比べて流動性とフレキシビリティがあると言える。

③バーミンガム大学でのインタビューを終えて

本報告は、文部科学省研究プロジェクトである平成20年度「先導的・大学改革推進委託事業：英国におけるギャップイヤーなど、学生または入学予定者に対する長期に渡る社会経験を可能とする取組に関する調査研究」（研究代表：秦由美子准教授）による調査研究の一環である。

バーミンガム大学のインタビュー調査を通じて、当大学及び英国におけるギャップイヤープログラム導入の取組みとその現状を包括・報告し、今後の日本の高等教育におけるギャップイヤー導入の可能性を探り、その制度化の検討のための基礎資料となることを目的としている。

キングストン大学やヨークセントジョン大学でのインタビューと違い、バーミンガム大学そして

Dr. Williamsのギャップイヤーに関する独自の見解を聞き出せた貴重なインタビューだったように感じる。「ギャップイヤー」という名称がアメリカから来たものであること、オックスフォードやケンブリッジに行く学生は自動的にギャップイヤーの期間が生まれると言えること、等である。

またDr. Williamsは日本の教育事情にも精通しており、英国と比べて日本の教育システムにおけるフレキシビリティのなさに言及し、さらに「ギャップイヤーの良さ」をさらに宣伝するべきだという持論を展開している。今後日本にどのようにギャップイヤーを導入していくかを考える上で、興味深い示唆と言えるであろう。

未筆ながら、インタビューに快く協力下さったバーミンガム大学の Dr Chris Williams に心より御礼申し上げたい。

1. 回答者 : Ms. Bunny and Ms. Gault

(質問1) ギャップイヤーの制度はいつ頃から始まったか。また、始まった理由は何か。

Gault : 30年前くらいからだと思う。

Bunney : GCSE 試験で大きなプレッシャーを課せられていたので、ちょっと勉強を休みたいというのが実情だと思う。または、自分自身についてよく知りたいとかであろう。

Gault : そして、多くの学生にとっては旅行をして様々な新しい経験をする好機なのだと思う。

(質問2) ギャップイヤーの広がり、男女の比率、ギャップイヤー取得者の在籍学部のバラつきについてどう思うか。

Gault : 男女比については、同じ割合だと思う。また推測ではあるが、ギャップイヤーをとる学生の割合はかなり低いと思う。やはりお金がかかるので。

Gault : 特にブラッドフォード大学では、学生の大多数は経済的に恵まれた家庭出身ではないので他の裕福な学生を抱える大学と比較すると、ギャップイヤーを取得する割合は低いと思う。学部差については、私の直感では社会学系の学生のほうが自然科学系の学生より多いと思う。というのも自然科学系では旅に出たら遅れをとってしまう、身につけた知識を忘れてしまうと危惧する学生が多いからであろう。

Bunney : 同感である。逆の傾向の話になるのだが、この調査に関連してインタビューを行ったギャップイヤーの学生は薬学部所属で、それには私も驚いた。

(質問3)

ギャップイヤーの内容について、また期間や費用についての例を挙げてほしい。

Gault : 期間は1年以内であろう。目的地に旅行に行って、大学の授業が始まるまでには戻ってこなければならないので。

Bunney : もちろん参加するプロジェクトによるが、平均で6ヶ月であろう。

Gault : ギャップイヤーを企画する団体がたくさんあって、開発援助プロジェクトを提供するところが増えているようである。

登 道 : 開発援助とは。

Gault : 植林したり、環境活動を行ったり、貧困地域の子供たちを助けたりといったことである。

Bunney : 孤児院を手伝ったりということも。

Gault : 時には教師をするときもあるようだ。ただ、教師に関して言えばギャップイヤーの学生が結局そこで雇用されてしまうケースもある。私の娘の場合は3年間ギャップイヤーを取得したが、すぐに大学に行く資金がなかったので、雇用されることを選んで働いた。

登 道 : 興味深い例だと思う。

Gault : 費用は実に様々であるが、お金がかかることは確かだ。

(質問4)

ブラッドフォード大学では、ギャップイヤーに関して支援制度などはあるか。また、ギャップイヤーを取得するための手続きや準備について教えてほしい。

Gault : 他の先生方に聞くと「ギャップイヤーは有用だ」と言うと思う。人生経験の豊かな学生が入学してくれば、先生たちとの会話もより活発になると思う。そのような意味でのサポートはしている。

また本学では、「平和学」などのボランティア経験を活かすことのできるコースがある。そこでは、一種の支援措置と言っていると思うのだが、例えば学生が、学外で慈善団体や政治活動などを通じて「平和と紛争解決」というコースの目的に即した幅広い経験を有している場合、試験の成績が多少悪くてもそのような経験を考慮して入学を認めることがある。国際開発（International Development）学部では、このようなボランティアの経験のある学生は間違いなく歓迎される。

Gault : 留学についても推奨している。留学もギャップイヤーと似たようなので。

Bunney : 本学の International Office においては、海外留学を推奨していることが最もギャップイヤーに近いと思う。これはコースによっては必須ではないが、サンドイッチ・イヤーに行くことが多い。大学の上層部も学生の海外留学推進には積極的である。

登 道 : 基本的に、私共のギャップイヤーの定義は入学前という意味だが、卒業後就職する前にギャップイヤーを取得する学生もいるのか。

Gault : そういう学生もいる。卒業後1年間ボランティアや慈善活動に参加して、国際開発や国際関係論の学部に戻ってくる学生もいる。

（質問5）

ギャップイヤーについて、大学や民間の組織からの基金はあるか。

Gault : 大学からの資金提供はない。

登 道 : 民間企業からは。

Gault : よくわからないが、資金提供するところもあると思う。ギャップイヤーに学生たちを海外へ送り出す手配をする団体は多くあるようだが、資金を提供するのはどちらかと言うと節税目的の大企業のほうが多いと思う。それについては、企業に直接聞いてもらうほうが手っ取り早いと思う。

Gault : そして、英国政府からも基金はあるようである。詳細については、Guardian 紙のウェブサイトから記事を読む方が良いでしょう。ゴードン・ブラウン首相が、ギャップイヤーに海外へ行くお金のない学生に対する資金援助を発表していた。

（質問6）

ギャップイヤーについて、大学側そして学生側双方からのメリット（長所）とデメリット（短所）を教えてほしい。

Gault : 私自身の例になるが、私がケニアに行った時薬学部志望の優秀な学生に出会った。彼は求められる成績も満たしていたので、是非本学に来てくれるように誘ったのだ

が彼は結局ギャップイヤーを選択した。これがギャップイヤーのデメリットと思う。つまり、彼はすでに大学に受け入れられていつでも入学できる状態だったのだが、外向的で優秀な人ゆえにギャップイヤーを取得したらうちの大学に来なくなるかもしれない、それどころかこの大学にも行かないかもしれないという懸念があった。彼の名はパディーと言うが、私はパディーに「パディー、ギャップイヤー中も連絡をちょうだい、連絡を取り合いましょう」と頼んだ。そうすることで当初の計画から逸脱しないようにと願っていたのである。ところがある日、Eメールに添付されていた写真を見ると、パディーはTVコマーシャルの有名人になっていたのだ。

登 道： 大学に入学せずに。

Gault： いえ、ギャップイヤーの最中の話なのだが。彼は家族の希望どおり薬剤師になる予定だったのだが、社会的かつ外向的な性格なのでケニアのTV番組の司会者をするまでになり、街の歯磨き粉の広告看板に写真が載ったりもした。彼はギャップイヤーの1年間で有名人になったのである。しかしその後はちゃんと本学に入学してくれた。彼は私たちにとって非常にありがたい存在で、思いがけない贈り物であった。私はその後再びケニアに行った時、現地の学生たちに「歯磨き粉の『フレッシュレディ』の彼は、ブラッドフォード大学で薬学を勉強しているのよ」と宣伝できた。またこれは彼にとっても大きな収穫があった。非常に有名人になった訳だから。大学にとっては彼のような人材を確保できることは素晴らしいことであるし、学生にとっても入学前に色々な面白い経験ができるのだと知るのには良いことである。

Gault： 学生にとってのギャップイヤーのメリットは、入学前に様々な経験ができること、そして大学で受けられる教育のありがたさがわかることであろう。海外で起こっている問題を目の当たりにすることで、高等教育を受けられることの大切さを実感できると思う。高校卒業後すぐに大学に入学する学生は、それを義務的なものであるとか当たり前のことと受け止めて、あまり高等教育の有難さがわからないのではないだろうかと思う。

Bunney： Ms. Gault が良い例を挙げたが、やはり海外で勉強し見聞を深めたり、高等教育を受けられない地域を見てきたりもして、身をもって高等教育の有難さがわかるということがあると思う。また、大学内では得られない経験を経てきた人が、とりわけ授業でグループワークなどに加わることは有用だと思う。経験を大学に持ち込んでくれるので、とても良いと思う。プロジェクトをリードする上でも頼りになるであろう。

Gault： 彼らは成熟しているのでね。

(質問7)

ギャップイヤーを経験した学生とそうでない学生とでは、大学入学後の評価は違うか。

Gault： ギャップイヤーの経験があることを周りが知っているかどうかは鍵ではあるが、グループワークで何かを説明するときに、ギャップイヤーの経験を引き合いに出せたりするかも知れない。しかし、それはケース・バイ・ケースといったところであろう。

- Bunney : レクチャー（講義）のようにじっと座って先生を見ている形式の授業では、経験を共有できるのは親友くらいであろう。その意味ではグループワークが良いと思う。
- Gault : ギャップイヤー経験者は当然それ以外の学生よりも1つ年上であるが故に成熟しており、視野も広い。
- Gault : その通り。実年齢が1つ年上というだけではなくて、精神的に成熟していて自立心があると思う。
- Bunney : 私の娘はリーズ大学の学生だが、娘の友人グループの一人は見た目は若いのだが、中身はとても成熟している。彼女は高校卒業後子供を持ち、パートタイムの仕事をしながら子育てをした。その後人生の目標を持って大学に戻ったのであるが、子育てと学業を両立していることで、学生からはとても尊敬されて賞賛の的であった。今はもう卒業して就職したが、友人たちに一目置かれていた。彼女はグループ内の他の子よりも6歳年上なのだが、しっかりした意志を持って順調にやっているようである。大学の成績も良かったし。
- Gault : 高い評価というのは、先生からの評価という意味か。それとも学生仲間からの評価か。
- 登 道 : 先生からの、という意味である。
- Gault : それは、学生がどのような貢献をできるかによると思う。ただ単にギャップイヤーを取ったという事実だけでは不十分で、グループ全体にどのような良い影響をもたらすかによると思う。
- Bunney : 確かに、ギャップイヤーの経験がどのような貢献をもたらすかによると私も思う。成熟していると、他のメンバーからも一目置かれる存在になると思う。

（質問8）

最後の質問だが、ギャップイヤーに関するあなたの個人的なご意見を伺いたい。

- Gault : 個人的には、素晴らしいことだと思う。人それぞれではあるが、娘の友人はアフリカに行って慈善活動ではなくプロジェクトを経験し、農場で働くなど様々な刺激的な経験をした。彼女の場合は、新しいことをするには家を出て両親から離れる必要があったわけだが、私の娘の場合はそういう必要はなかったけれど、大学を出ていないとどんな人生になるかを一度経験する必要があったようで、大学に行かずに3年間働いた。その後で、さらに良い仕事に就けるようになりたいと言って大学へ入学したのである。このように、ギャップイヤーの形は人それぞれであると思う。
- Bunney : 私も個人的には、とても良いことだと思う。機会が与えられれば行くべきと思う。人格形成にも役立つと感じる。両親と離れて外国に行き、自分のことはすべて自分でするばかりか自分の身も自分で守らなければならないし、自分で善悪の判断をして地に足をつけて生活しなければならないので。
- Gault : 私自身もプロジェクトに参加したことを思い出した。私は就職して子育てをし、年をとってから大学に行ったのだが、入学前にフランス語を勉強しようと決めてフランス行きを計画したことがあった。その際にギャップイヤーの本を見たのである。そこで、宿泊と1日1食付きのフランスでの遺跡発掘プロジェクトを見つけた。私

は大学入学直前の学生たちの中で年長者であったが、若い人たちと一緒に発掘作業を行った。グループのメンバーと一緒に食事の準備をしたり、人との付き合い方を学んだり楽しい経験であった。

登道： どのくらいの期間だったか。

Gault： 周期的なプログラムだったので、他の人たちはもっと長く滞在していたが、私の場合は娘がいたので期間は2ヶ月だけであった。多くの人がプロジェクトに加わっていて、この時はフランス語だけが共通語だったのでそれも良かったと思う。英国人ともフランス語で話さなくてはならなくて、言葉を学ぶという意味では良かった。私にとっては言葉の習得が目的で、他の多くの人も考古学を専攻するわけではなく、言葉の習得のために来ていた。場所がフランスだったので、言葉を習得するという面では有意義であったと思う。

登道： 二人ともギャップイヤーに関しては肯定的であると考えてよいか。

Gault & Bunney： ええ、とても。

Gault： ただ、ギャップイヤーをとると大学の勉強から遠ざかってしまって、関心が他に移ってしまうという危険性は常につきまとう。それについては、必ず大学に戻ってくるように継続的なサポートをしたり、当初の計画を忘れないよう連絡を取り合ったりする必要があると思う。

Bunney： International Office でインタビューをしたある学生が言っていた。彼は英国の大学へ入って数ヶ月してから大学が合わないと感じ、それでメキシコに行けばしばらくの間英語を教え、次にロシアで英語を教えて3年後に戻ってきた。やはり大学を卒業したほうが良いと悟って、戻ってきて学位を取得したのである。

Gault： 彼はなぜ戻ってきたかについて何か言っていたのか。

Bunney： その当時は取りたいコースや学位は決まっていたものの、まだ心の準備ができていなかったとのことであった。この年齢でやることを決めてしまっているのか、さらに人生経験を積みたいと思って、旅をしたそうである。その3、4年後に戻ってきて、ハル大学のアメリカ研究 (American Studies) で第一級優等学位 (first-class honours degree) を取ったのである。

2. 回答者：Ms. Christian

※ ブラッドフォード大学のインターンシッププログラム (Industrial Placement) についてのインタビュー

Christian： 私が面談するのは Industrial Placement をする学生である。Industrial placement というのは、4年コースをとる学生のサンドイッチコースの中で行われるもので、最初の2年間は大学で勉学して、その後民間企業で1年間働いて実務経験を積むものである。いわゆるインターンシップである。そして4年目は学位コースを修了するために大学に戻ってくる。Industrial placement の受け入れ先を求めて、多くの学生が私のところに相談に来る。

登道： Industrial placement についてももう少し詳しく説明して欲しい。

Christian : いわゆるサンドイッチコースで、大学側は強制をしておらず選択制なのである。Industrial placement に参加したい学生は 2 年生の時に申請をする。私は工学部の Engineering Designing & Technology (EDT) 学科の学生らを対象に相談を受けているのだが、ワークショップを開催して受け入れ企業を探す支援をしたりもしている。その意味では去年は非常にうまくいき、100 人弱のうち 30 名が受け入れ先を見つけることができた。中には大企業に受け入れてもらえた学生もいる。Industrial placement を受けた学生は、卒業後就職できる確率が高くなると言える。

Christian : 私は工学部の学生を中心に支援をしているが、他の学部では競争が厳しい。例えば一昨年に Microsoft で仕事を体験し、その後 Microsoft から面接に来るように誘われた学生もいる。その学生は Microsoft USA とも面接の機会を得た。

登道 : その学生は今アメリカにいるのか。

Christian : いいえ。彼は今 4 年生で、卒業の準備をしている。Industrial placement で優れた成績を残すと、卒業後は 60%~80% の確率で職に就くことができる。それは同じ会社であったり、別の会社であったりする。どの業界で働きたいかを探る良い機会である。その学生は Computer Science を専攻している。

Christian : 私個人は EDT の学生とよくやり取りするのであるが、Civil & Structural Engineering や Mechanical Engineering の学生の受け入れも多く、会社側も多くの募集広告を出してきている。

登道 : 文系よりも理系の学部の方が多いということか。

Christian : いいえ、たまたま私が EDT の学生の世話をすることが多いので彼らの話ばかりしているが、Accounting & Finance の学生もいる。Computer Science は同僚が担当しているが、学生は基本的にどのキャリアアドバイザーとも話することができるのである。

Christian : Accounting & Finance の学生とも話することがある。例えば、今 Exon Mobile でビジネスアナリストとして 1 年の職務経験をしている学生がいる。そのような学生は、卒業後も良い職に就く可能性が高い。その他にも優良企業が 3 ヶ月のインターンシップの募集に来る。Industrial placement に関しては、学生が海外に行くこともある。ドイツに 1 年滞在した工学部の学生もいた。滞在先はヨーロッパが主である。Industrial placement に関しては、学部の承認も必要であるし、講師も 1、2 回は現場に出かけ、学生の様子や働きぶりについてチェックをしなければならない。さらに、外国人（英国人以外）の学生も多くいる。というのも、インターンシップ中の就業許可は不要だから、この機会を利用して働く留学生がかなりいるのである。

登道 : 日本人で Industrial placement を通じて英国で就職をする人はいるのか。

Christian : いいえ。あと、英国で働けるかどうかは英国国内で働く資格の有無による。

登道 : つまり、VISA や就業許可の問題であろう。

Christian : 例えば、Civil & Structural Engineering の需要は高まっている。2012 年にオリンピックを開催するロンドンでは建設ラッシュであるので、この分野で働ける人を募集しており、会社が申請にあたってのスポンサーになるというケースもある。

私はマレーシア出身なのだが、5～6人のマレーシア人学生に履歴書の書き方や面接の仕方などを指導した。

登道： 彼らは現在英国で働いているのか。

Christian： はい。就業許可は5年間までである。また、International Graduate Scheme (IGS)のもと、留学生は1年間仕事ができる。この制度は何度も変更がなされているが、現在はすべての学生が対象である。本学にも日本人の学生を多く見かけるが、ほとんどが平和学 (Peace Study) をとっているようである。

Christian： Industrial placement のメリットとしては、先ず、学生は自立心を養えるし、様々な実務経験を大学の勉強に活かすことができる。Industrial placement での経験をもとに就職活動をスタートすることも可能である。現在、Industrial placement をしている学生のひとは、受け入れ先の企業からすでに就職の誘いを受けている。

登道： いつ頃から Industrial placement が始まったのか。

Christian： 会社によるが、7月、8月または9月から始まって、期間は1年間である。

登道： この制度はいつから始まったのか。

Christian： 比較的最近のことだと思うが、正確にはわからない。数年前から Industrial placement はいくつかのコースでセールスポイントになっているのは確かである。

登道： 男女の割合はどうか。

Christian： 私の扱う工学部では男子が多い。

登道： 期間は基本的には1年か。

Christian： 時には13ヶ月間、約1年である。

登道： ブラッドフォード大学としてはサポートしているのか。

Christian： キャリアアドバイザーとしては、Industrial placement を勧めている。私は以前人事関係の仕事をしていたので、過去の経験から、業界で1年間の実務経験があると仕事の能力が高まることがわかっている。

登道： 企業からの基金はあるのか。

Christian： 給料は僅少だがもらえる。企業によるが、例えばExon Mobile でビジネスアナリストをしている学生は年間18000ポンドもらっている。

登道： 18000ポンドはレベル的にはどうか。

Christian： 高いレベルだと思う。工学部の学生の場合は大体14000～16000ポンドだが、企業の業種と規模によると言える。お金をもらいながら経験を積めるわけだから良い話だと思う。また、経験をした後は、履歴書にもそれ相当のことを書けるし良いと思う。

登道： Industrial placement はブラッドフォード大学特有の制度か。

Christian： いいえ。これはブラッドフォード大学特有の制度ではなく、他の大学も行っていることである。

登道： Industrial placement に関して、他の大学と比べた時にブラッドフォード大学の特徴などはあるか。

Christian： あまり違いはないと思う。ただ、やはりオックスフォードなどの有名大学と比較すると、本学の学生は多少難しいのかなとは思う。企業は有名大学の学生を取る傾向

にあるので。我々の学部としても、エンジニアリング分野の雇用主を大学に招待したり、と様々な活動をしている。一旦企業に送り込んだ学生が良い仕事をしてくると、同じ企業から再び引き合いをいただける。その意味では学生の働きぶりに左右されるといえる。

登道： Industrial placement に関しての私見と、将来の展望について意見を聞かせてほしい。

Christian： 私は Industrial Placement はとても重要なものだと思うので、必ず学生たちに勧めるようにしている。会社も資格だけでなく、実務経験を重視するようになってるので。

個人的な意見ではあるが、Industrial placement を経験した学生はやる気と自信を持って積極的に就職活動を行っているように感じる。その意味で、私個人の意見では非常に Industrial placement に肯定的である。履歴書に記す内容も充実するし、学生は自信に満ちて大学に帰ってきて自分が学んだことを積極的に活用しようとしている。

3. 回答者：Ms. Roberts

※ブラッドフォード大学の交換留学制度（平和学部）についてのインタビュー

登道： 平和学部ではいつから交換留学制度を始めたのか。

Roberts： 平和学部における交換留学制度は、数年前に始まった。最初は数名のみが海外に行っていたのだが、2年前に EU 諸国から 4 名の学生を受け入れた。今年は過去最高の 10 名の学生を受け入れている。政府も海外留学を奨励するようになった。今年は海外に行く学生も多く、留学を希望する学生が増えているので来年は 10 名が海外への留学を予定している。プログラムパートナーは、ブリストル（英国）、ミュンヘン（ドイツ）、フィレンツェ（イタリア）、コインブラ（ポルトガル）、スペイン、フランスなど、地域も学生数も増えている。私の理解では、1 年留学するには費用がかからないので 1 年間留学する道を選ぶ学生は多くなっている。学生は大抵 1 年生を終えた後の 2 年生の時に留学して、3 年目に帰国する。

登道： これは強制か、選択か。

Roberts： 選択制である。しかしこの制度の存在がより知られるようになったここ数年では、学生数も顕著に増加している。

登道： およそどのくらいの割合の学生が交換留学するのか。

Roberts： 70 名中の 10 名くらいである。また、サンディエゴ（アメリカ）との交換留学プログラムもあるが、ここには 2、3 名しか行くことができない。

登道： 留学するのは男女のどちらの方が多いか。

Roberts： 来年の留学組は男女同率くらいだが、今年は 5 名の男性が海外に出ているので男性の方が多かった。

登道： 留学の内容について教えてほしい。

Roberts： 本学とパートナー校の間で学習計画確認書（Learning Agreement）を作成すること

になっていて、Undergraduate Director の Dr. Rhys Kelly がその承認・署名をするのだが、この確認書には留学中の学習内容や単位数などが明記され、帰国した際に海外で取得した単位を変換できることになっている。学生が現地で取得した得点を持ち帰り、変換表に基づいて相当する単位数を与え予定通り卒業できるようになっている。

登 道： 資金的にはどうなっているか。学生は本学に支払うだけで、パートナー校には特に何も支払わないのか。

Roberts： 私の理解では、留学中の1年間は本学でもパートナー校でも何も払う必要はないと思う。従って、2年分の授業料で3年間の学位取得コースを取ることもあり得る。

登 道： こちらの学部は肯定的に支援を行っているという理解で良いか。

Roberts： はい。学習計画確認書を作成するだけではあるが。

登 道： この制度のメリットとデメリットについてはどう思うか。

Roberts： 言語能力は絶対に求められる。フランスに留学するのにフランス語が話せなければ話にならないように。海外留学したい学生がいても、言語能力が不足して留学できないこともあるのが実情である。また、海外で異なる制度や異文化経験をして、本学に持ち帰ってくれるのはメリットと言えるだろう。

登 道： この制度や留学に関して私的な意見はあるか。

Roberts： 本学部に関してはここ数年留学生の数は増えている。私たちにとっても新しい経験なので、まだ学習段階ではあるが今のところはうまく機能しているように感じる。

4. ギャップイヤーを取得した学生（または交換留学生）に対するインタビュー

回答者：Stephanie（ギャップイヤー取得者）

Ilenia（交換留学生）

Sachiko（私費留学生）

Yuya（交換留学生）

(a) ギャップイヤーに行った（または留学をしようと思った）理由を聞かせてほしい。

Stephanie： 勉強を休みたかったからである。

Ileni： 旅行が好きだし、大学を卒業する前にいろいろな経験をしたかったのと英語が上達したかったからである。

登 道： 他の大学ではなくブラッドフォードに来た理由は。

Ilenia： 選択肢はあまりなくて、リーズとブラッドフォードの2校から選択した。

Sachiko： 一番の理由は英語をもっと上達させたかったからで、あとは異文化体験とかが好きなので長い間海外に住んでみたいと思ったからである。

登 道： 他の大学ではなくブラッドフォードに来た理由は。

Sachiko： 何を勉強しようかと考えた時に、平和学やりたいなと思って。

Yuya： 僕の場合は、平和学を勉強したかったというので。交換留学は1年間なのだが、卒業前に興味のあることを1年間学んで平和学が学問としてどれだけの可能性があるのか、また自分がアカデミックなものを学んでいけるかどうかを知りたくて、ブラ

ッドフォード大学に来た。

(b) ギャップイヤー（または留学）はどのような内容だった（内容である）のか。また、ギャップイヤーに行った（留学の）動機、目的、或いは期待していたことは何だったのか。

Stephanie： A レベル試験の後、小学校の先生のアシスタントに応募して1年間働いた。将来は先生になりたかったからである。1年間働いた後に大学に再入学申請をし、希望のコースに入ることができた。また、ギャップイヤーは自分で計画した。私は何か社会に貢献したかったのと、自分のキャリア構築に役立つ経験を積みたかったから参加した。

Ilenia： イタリアでは Business Communication を専攻しているが、こちらでは Management を勉強している。私はキャリアで成功するために留学した。

Sachiko： 前期は全て1年生の授業を取った。平和学を勉強することにしたのでこちらに来た。元々平和学の知識がなかったので、本当に基本的なことばかり勉強している。

Sachiko： 前期は英語に慣れることにすごく集中していた。後期には1つ2・3年生の授業もとった。私は人の生き方に興味があるので、平和学を勉強することでどうしたら人間がうまく生活できるのかを個人的に追求していきたいと思う。

Yuya： 私は特に平和学の知識があったわけではないので、前期は Sachiko さんと同じく入門の授業をとって、英語の問題があったから英語の勉強もした。後期は、2つ大学院の授業を取って、2つ学部の授業を取っている。私は自分の可能性、アカデミックに探求できるかどうかの可能性を試してみたいと思って留学した。

(c) ギャップイヤーをした結果、得たものは何か。また、感想や反省点などについて教えてほしい。

(回答者：Stephanie のみ)

Stephanie： 新しいスキル、実地の仕事現場での経験など、大学卒業後に活かせるものを得た。また、社会に対する視野も広げることができた。特に大学入学前に良い心準備ができたと思う。中等教育終了後直接大学に入学していたら、うまく対処できていなかったかもしれない。大学入学後は、問題や課題への取り組み方などにギャップイヤーはプラスの影響を与えている。今まで試したことのないやり方も色々試せるようになった。

(d) ギャップイヤー（留学）のメリットとデメリットは何か。また、資金は自分で調達したのか。そしてギャップイヤー（留学）をこれから大学に入学する学生に勧めるか。

Stephanie： メリットは世界で自分の経験の幅や見識を広げられたことである。その結果、以前は楽観的だったのが多少悲観的になったのだが、それはデメリットだとは考えていない。機会があればもう一度ギャップイヤーを取得したいと思う。また、これから大学に入学する学生にもギャップイヤーを絶対に勧めたい。資金は自分で調達した。

Ilenia： 資金は European Fund を得た。また、家族からのサポートも得ている。デメリットは、来た当初の数日間はとても怖かったことであろう。この町は想像していた英国の町の雰囲気とは異なっていたので。ただ、周りを見てみると外国からの学生が

多いので皆同じ境遇なのだと思いを共有できた。そして他のイタリアの大学の皆にも留学を勧めたいと思う。

Sachiko： 私はここに来て良かったと思っている。来たことで視野が広がった。他の国の人と触れ合えることもあるし、ここにきている日本人も今まで大学で肩を並べて学んでいた人とは異なる人たちであるから。様々な経験を踏んできた人とか、性格的にもいろいろな人がいる。海外は初めてというわけではないが、1年間もの長い海外滞在は初めてである。その意味では良かったなと思う。後輩には留学を勧めるが、かなりお金がかかるというのがきついと思う。

Yuya： 私は、反省点としてはブラッドフォードに来る前にもっと勉強しておけば良かったというのがある。それを後悔しても仕方がないので、これからはさらに勉強していきたいと思う。また、後輩で平和学が勉強したい人には、この大学はそれができる数少ない大学のひとつなので平和学という意味では勧めたいと思う。

③ブラッドフォード大学でのインタビューを終えて

本報告は、文部科学省研究プロジェクトである平成20年度「先導的・大学改革推進委託事業：英国におけるギャップイヤーなど、学生または入学予定者に対する長期に渡る社会経験を可能とする取組に関する調査研究」（研究代表：秦由美子准教授）による調査研究の一環である。

ブラッドフォード大学のインタビュー調査を通じて、当大学及び英国におけるギャップイヤープログラム導入の取組みとその現状を包括・報告し、今後の日本の高等教育におけるギャップイヤー導入の可能性を探り、その制度化の検討のための基礎資料となることを目的としている。

まず Ms Bunney と Ms Gault に英国全体そしてブラッドフォード大学におけるギャップイヤーについて総括して頂いた訳だが、ご自分自身またはご息女がギャップイヤーに参加した際のお話も聞くことができ、薬学部の学生のお話も含めて具体例に富んだ非常に充実した内容となった。また、他大学と違いブラッドフォード大学では、Ms Christian や Ms Roberts から大学独自のインターンシッププログラムや交換留学制度についても知ることができたことは有意義であった。

末筆ながら、インタビューに快く協力下さったブラッドフォード大学の Ms Bunney, Ms Gault, Ms Christian, Ms Roberts そして学生の Stephanie, Illenis, Sachiko, Yuya に心より御礼申し上げます。



ため息の橋
(提供： 飯塚和明)

7. ヨーク・セント・ジョン大学 (York St. John University)

登道 孝浩

- 1) 同行者 なし

- 2) 出張期間 平成20年2月26日(火)

- 3) 出張先 York St John University (ヨークセントジョン大学)
 Lord Mayor's Walk
 York
 YO31 7EX
 United Kingdom
 URL: http://www2.yorks.j.ac.uk/default.asp?Page_ID=77

- 4) 面談者 4名
 Ms Rachel WICAKSONO: Head of Programme International Foundation
 Certificate, Head of Programme MA English Language Teaching
 Ms Stacy LLOYD: Admissions Manager
 Charlotte: Student
 Louise: Student

- 5) 出張目的 ギャップイヤープログラム担当者及びギャップイヤーを取った学生に対するインタビュー聴取

- 6) 出張結果 1) インタビュー聴取
 2) 資料提供

①ヨークセントジョン大学の概説

ヨークセントジョン大学は1841年に教員養成系の訓練学校(トレーニングスクール)として設立された。設立当初はYork Diocesan Training Schoolと呼ばれていた。そして1920年代からリーズ大学(University of Leeds)との連携を進め、1974年には学校名をThe College of Ripon & York St Johnとした。

1990年に完全にリーズ大学の一部(1カレッジ)としての地位を確立した後、2001年にキャンパスをヨークシャー州内のリポンからヨーク市内に移転させ、2006年10月にリーズ大学から完全に独立し、大学に昇格した。学生数は、フルタイムとパートタイムを合わせて学部生は5000人弱、大学院生は1000人弱、全体で5600人ほどである。学生の男女比は3対7であり、女子学生が多い。全学生の5%が留学生であり、6%は民族マイノリティ層の出身である。そして全体の8%が身体障害者である。

Education & Theology(教育・神学)専攻の学生が最も多く、次いでArts(人文科学)専攻、Health & Life Sciences(健康・生活科学)専攻と続く。元は教員養成系の学校としてスタート

した関係で、現在でも教育（学）専攻の学生が多い。

教職員は全体で560人ほどである。

②インタビュー調査概要

1. 回答者：Ms. Wicaksono

a) ギャップイヤーの導入時期と始まった理由は何か。

Wicaksono: 15年から20年くらい前に始まったと思われる。理由というのは特になく、学生たちが自分の意思で始めたことだと思われる。

b) ギャップイヤーの普及状況について教えてほしい。

Wicaksono: 大学に入学してくる学生の5割（半分）くらいは経験していると思われる。

c) ギャップイヤーの内容について教えてほしい。

Wicaksono: 内容は大きく分けて3つあると思われる。店で働くといった単純労働、バックパッキングのような低費用の旅行、そしてボランティアの3つである。期間については少なくとも1年（以上）であると思われる。

d) 大学によるギャップイヤーへの関心、そして大学によるギャップイヤー奨励プログラムの有無はどうか。

Wicaksono: 特に積極的な支援はしていないと考えられる。ただ、ギャップイヤー経験のある学生は精神的に成熟しているとのことで大学側から肯定的に受け入れられるということはあると思われる。

e) 資金援助について教えてほしい。

Wicaksono: 大学や民間団体にはないと思われる。

f) ギャップイヤーの長所と短所について教えてほしい。

Wicaksono: 長所: 学生が親から自立し、自己管理・時間管理能力を身につけることができる点。

短所: ギャップイヤーを経験することにより、大学で教育を受けることを断念する学生が出る可能性があるという点。

g) ギャップイヤーを取った学生に対する大学からの評価はどのようなものか。

Wicaksono: ギャップイヤーでの経験が大学入学後に勉強する学問分野と関連のあることであれば、その学生が大学の所属学部内で評価されるということはあるだろう。

h) ギャップイヤーに対する私見を聞かせてほしい。

Wicaksono: 私は中立的と言える。ギャップイヤーはそれ自体が楽しすぎて、大学に戻ってこないという危険性をはらんでいる。また、結構良い仕事に就いた人にとっても、

給与を得るというライフスタイルに親しんだ後で学生生活に戻るといのは大変なことであるから、仕事を辞めたくないと願うかもしれない。しかしその一方で、ギャップイヤーの経験は有意義なものだとも思うので、総じて私としては中立的な立場を取りたい。私自身も自分の子供たちが、私にギャップイヤーの費用を負担してもらうことを期待しているようなので気にかかっている。大学の学費の上にギャップイヤーの費用というのは、私には出す用意がない。ギャップイヤーで旅行をするなら仕事を兼ねたものであること、もしくは直接大学に進むかにしてもらわないと、私には学費とギャップイヤーの両方を負担するつもりはない。私は、ギャップイヤーに関して、費用は大きな問題の一つであると言える。ヨークセントジョン大学の傾向としては、中流かそれより下の階級層出身の学生が多いので、私の推測では、ギャップイヤーを、働いて学費を貯める期間と捉えている人が多いのではないかと考える。上流階級出身の学生に聞けば、ギャップイヤーとは、親に費用を出して貰い旅行する期間と考えており、階級によってそれぞれ解釈が異なっているようである。結論として総体的には、長所、短所の両方があると認められるので私は中立的な立場を取ることである。

2. 回答者 : Ms. Lloyd

① ヨークセントジョン大学について教えてほしい。

Lloyd: かつてはリーズ大学の一部であったが、現在は独立している。ただ現在でもリーズ大学との繋がりは保っており、博士の学位は未だにリーズ大学から授与されている。

② ギャップイヤーについて教えてほしい。

a) ギャップイヤーの導入時期と始まった理由は何か。

Lloyd: ギャップイヤーの始まりについては正式な記録はないが、かなり昔から導入されている。学生がギャップイヤーを取る理由としては、入学審査の点数を向上させたい、または、大学入学前に何かしらの経験を積んでおきたいというものが多い。

b) ギャップイヤーの普及状況について教えてほしい。

Lloyd: 添付資料(資料1)を参照されたい。

c) ギャップイヤーの内容について教えてほしい。

Lloyd: ギャップイヤーの期間の平均は1年である。内容については、世界旅行、ツアーガイド、キャリアトレーニングコースの受講、海外での英語教育などが主なものである。

d) 大学によるギャップイヤーへの関心、そして大学によるギャップイヤー奨励プログラムの有無はどうか。

Lloyd: 大学側は肯定的な関心を寄せていると思われる。ギャップイヤーを経験することで学生は成長し、講義やゼミの受講者に多様性が生まれる。そのような多様性を大学では奨励している。ギャップイヤー奨励プログラムについてはないと思われる。また、ギ

ギャップイヤーを経験したからと言ってその学生が他の学生より評価が高くなるということはないと言える。

e) 資金援助について教えてほしい。

Lloyd: 大学や民間団体にはないと思われる。英国政府提供のものはもしかするとあるかも知れない。

f) ギャップイヤーの長所と短所について教えてほしい。

Lloyd: 長所: 学生の多様性が増すこと。

短所: ギャップイヤーを経験することで高等教育を受けない人が出ること。

g) ギャップイヤーに対する私見を聞かせてほしい。

Lloyd: 高等教育進学に際して、ギャップイヤーをすることは大いにプラスになると思う。教育課程において、特にAレベルというのはストレスのかかるものである。そのような時に、ギャップイヤーで半年または1年の間旅行などをして過ごしながら、果たして本当に高等教育に進みたいかどうかと自らに問いかけてみるのも、自分をより良く知るという意味では良いことだと思う。故に大学側としては、勉強を続行したいかどうか不確かな気持ちで来られるよりも、そういう経験を経て来てもらう方が歓迎できると言えるだろう。私自身もギャップイヤーを2年間経験した。その期間はフルタイムで働きながら勉強をしていた。相当若い年齢で高等教育において何を勉強したいかを定めることになるのだが、私の場合は高校3年生の時に勉強したい分野を変えた。なので、新しい分野の勉強をして高等教育に備えたかったのと、家族に負担をかけないためにも働いて学費も貯めておきたかったのである。私にとっては、その方向転換はとても重要なものだった。

③ギャップイヤーを取得した学生に対するインタビュー (回答者: Charlotte, Louise)

a) ギャップイヤーの内容と参加理由を聞かせてほしい。

Charlotte: 正式にはギャップイヤーではない。2年次と3年次の間でイタリアとタンザニアに計10週間英語を教えに行った。仕事の情報は大学(ヨークセントジョン)から得た。参加理由としては、異国に行ってみたかったからである。

Louise: ドミニカ共和国の小学校に1年間英語を教えに行った。仕事の情報は斡旋業者から得た。参加理由は、参加前から慈善活動に興味を持っていたこともあったが、Charlotteと同じく旅に出て世界を見たいと言う思いが強かったからである。

b) ギャップイヤーに参加した感想、参加の効果を聞かせてほしい。

Charlotte: イタリアもアフリカも本当に素晴らしかったし、心から行って良かったと思っている。タンザニアでは、英国では到底見られないものも見る事ができて、大いに感動した。もし短所を挙げるとすれば、一つだけである。Louiseは1年間行っていたけれど、私は両国合わせて2ヶ月間だけだったにもかかわらず、費用が非常に高

くついてしまったことである。特にアフリカに行くのは高く、イタリアから帰った後すぐに夏の間中働いて費用を捻出しなければならなかった。しかし、それでも一生に一度の素晴らしい経験ができたわけだが、2回目からは感動が薄れるだろうから、一度きりの良い経験で留めておくほうが良いのかも知れない。

また、参加の効果としては、特にタンザニアから帰ってきた時には物事の見方が全て一変したと言うか、気持ちも新たにになって、モチベーションも学習意欲も高まり非常にリフレッシュしていた。様々な思いが際限なく湧いてきて、目標が次々に出てきた。タンザニアのような、食べ物も乏しく水道も無く貧しい国からイギリスに帰って来た後に、自分がいかに恵まれているか気付かされたのである。全く新しい自分になっており、非常に前向きな気持ちでモチベーションも高まっていた。このような気持ちにもう一度なることができるなら、またタンザニアに1週間程なら行っても良いと思えるくらいである。

Louise: 私は自分自身のことを多く学んだ。特に自分の長所そして短所についてである。1年間家を離れて、親に頼らないと何もできない自分にも気づいた。インターネットを使用できたのは1週間に1度、それも中心街に出た時だけだったので、頻繁に家に電話していた。そして、電話のない生活が5ヶ月間という時期もあり、そのような時こそ多くを学ぶわけで、良い経験だと思った。素晴らしい人々に出会い、素晴らしい経験をしたことを懐かしく思い出す。再度やり直すとすれば、1年間とまではいなくてももう一度似たような体験をしたいと思う。行き先はドミニカ共和国でなくとも、別の国で同じようにまた人の役に立つことをしたいと思う。

c) ギャップイヤー参加の長所と短所(他人に勧めるかどうかも含めて)についてどう考えるか。

Charlotte: 長所としては英国から出て世界を見ることが出来た、ということである。短所は、タンザニアでの滞在は経済的な負担になったということである。金銭面で苦労したのは大変であったが、その苦労を上回る経験ができたので、他人に大いに勧めることができると思う。

Louise: ギャップイヤー参加資金を稼ぐのに苦労したのだが、その経験のおかげで自信がつき精神的に成長したことは長所と言えるであろう。長所が短所を上回ると言えるので他人にも勧めたいと思う。

d) ギャップイヤー参加の資金調達はどのようにしたのか。

Charlotte: タンザニアに行くためにフルタイムで働き、家族からの支援も得た。

Louise: アルバイトをしてお金を貯めた。

④ヨークセントジョン大学でのインタビューを終えて

本報告は、文部科学省研究プロジェクトである平成20年度「先導的の大学改革推進委託事業：英国におけるギャップイヤーなど、学生または入学予定者に対する長期に渡る社会経験を可能とする取組に関する調査研究」(研究代表：秦由美子准教授)による調査研究の一環である。

ヨークセントジョン大学のインタビュー調査を通じて、当大学及び英国におけるギャップイヤープログラム導入の取組みとその現状を包括・報告し、今後の日本の高等教育におけるギャップイヤー導入の可能性を探り、その制度化の検討のための基礎資料となることを目的としている。

概説で述べた通り、ヨークセントジョン大学は教員養成系の訓練学校としてスタートしており教育系専攻が強いにもかかわらず、様々な専攻の学生がバランスよく存在し、また、留学生や民族マイノリティ層出身者も一定数存在している。その意味において、ギャップイヤー実地調査対象としては示唆に富む教育機関と言えるであろう。

ギャップイヤーの捉え方について、ヨークセントジョン大学の事務職員である Ms Lloyd は、肯定的な立場を取っている。しかし、講師である Ms Wicaksono は中立的な立場を取っており、また2人の学生は総じて肯定的な意見を述べているとは言え、特に Charlotte は短所も強調していた。Ms Wicaksono そして学生達に共通していた否定意見は「ギャップイヤーの参加には費用がかかる」というものであった。このことから、ヨークセントジョン大学全体としてはギャップイヤーを肯定的に考えていると判断して良いが、個人としてはその評価が分かるといえるだろう。

ヨークセントジョン大学のケースを踏まえた私見であるが、私自身は日本の高等教育にギャップイヤーを導入という考えに賛成である。特に日本の高校生は受験勉強に追い込まれ、大学入学前に視野を広げ自分自身を見つめなおす経験は必要であると考えからである。しかし、中等・高等教育の制度が日英で異なる以上、英国での試みをそのままの形で日本に輸入するのは不可能であろうし、個々の事例を検討していかなければならないのは論を待たないであろう。

末筆ながら、インタビューに快く協力下さったヨークセントジョン大学の Ms Wicaksono、Ms Lloyd、そして学生の Charlotte、Louise に心より御礼申し上げたい。

資料1

表1 ヨークセントジョン大学 (York St.John) 年度別入学者男女比および専攻学部内訳 (%)

年度	入学者男女比		入学者の専攻学部内訳					
	男性	女性	芸術	スポーツ科学 ／心理学	経営 ／コミュニティ ／コミュニケーション	教育 ／神学	専門的 ヘルス 研究	複数専 攻**
2007*	40%	60%	35%	15%	5%	20%	9%	16%
2006	35%	65%	32%	14%	5%	19%	13%	18%
2005	30%	70%	26%	18%	11%	19%	10%	16%
2004	27%	73%	24%	22%	11%	20%	16%	7%

2003	32%	68%	29%	24%	13%	16%	17%	0%
------	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----

*2007 年度に学部から学科まで一貫して組織変革を行いました、以前の項目分類に従って数値をいれた。

**複数専攻プログラムは 2004 年以降にできたので、それより前に複数のコースを専攻していた者についてはそれぞれのコースで別々に数えられていたと思われる

表2 ヨーク セントジョン大学 (York St.John) 年度別入学延期者比率およびその実数

年度	入学延期者比率	性別		学部					
		男性	女性	芸術	スポーツ科学 ／心理学	経営／ コミュニ ティ ／コミ ュニケ ーショ ン	教育／ 神学	専門的 ヘルス 研究	複数専 攻**
2007*	6%	204	110	99	44	15	60	40	56
2006	7%	234	98	87	59	38	62	34	52
2005	7%	206	76	69	62	31	55	46	19
2004	7%	175	83	77	63	33	41	44	n/a
2003	6%	45	15	14	14	12	14	6	n/a

*2007 年度に学部から学科まで一貫して組織変革を行いました、以前の項目分類に従って数値をいれた。

**複数専攻プログラムは 2004 年以降にできたので、それより前に複数のコースを専攻していた者についてはそれぞれのコースで別々に数えられていたと思われる

8. リーズ大学 (Leeds University)

登道 孝浩

1) 同行者 なし

2) 出張期間 平成20年3月3日(月)

3) 出張先 University of Leeds (リーズ大学)
Leeds
LS2 9JT
United Kingdom
URL: <http://www.leeds.ac.uk/>

4) 面談者 8名

Ms Jacqui BROWN: Head of International Office

Ms Milly NETTLETON: Administrator of Joint Honours in Modern Languages

Ms Helen CLAPHAM: Head of Student Recruitment and Marketing
Mr Steve NORTH: Undergraduate Admissions Officer, Business School
Ms Maria McCABE: Undergraduate Programmes Manager, Business School
Terry: Student
Kate LONG: Student
David MCFARLANE: Student

5) 出張目的 ギャップイヤープログラム担当者及びギャップイヤーを取った学生に対するインタビュー聴取

6) 出張結果 1) インタビュー聴取
2) 資料提供

①リーズ大学の概説

リーズ大学は1904年に設立され、校舎に「赤いレンガ」が使用されたことから、マンチェスター大学やシェフィールド大学と共に Red Bricks（赤レンガの新設大学）の愛称で知られている。リーズ大学は留学生を温かく歓迎し、留学生のために様々な施設や設備を提供している。そのため、世界各国の学生がリーズ大学を留学先として選び、現在100カ国以上から約4000人の留学生がリーズ大学で学んでいる。学部、大学院生を合わせて30000人強の学生が在籍している大規模校である。

②インタビュー調査概要

1. 回答者: Ms. Brown

(質問1)

(a) ギャップイヤーの制度はいつ頃から始まったのか。

Brown: いつから始めたという公式な記録はないのだが、私どもの認識では、学生には昔からずっと高校を卒業したら自由に好きなことをしてから大学に入学するという選択肢があった。従って少なくともここ50年間は、学生は高校を卒業後何年か経ってから大学に入学するか、高校最終学年で大学に出願し実際の入学を延長するという手段を取ることができた。

(b) ギャップイヤーを導入した理由は何か。

Brown: 大学進学競争が厳しくなってきた以来、学生はAレベル試験を終えるのにかなりのストレスを抱え、学校での勉強や徹夜の勉強から解放されて、フレッシュな状態の新たな気持ちで大学生活を始めたいと願うようになったのではないだろうか。昔の学生はギャップイヤーに全然違うことをしていたのだが、今では学費が高いため、ギャップイヤーを働いて学費を貯める期間として捉えている人が増え、ギャップイヤーの意味合いが少し変わってきているように感じる。

(質問2)

ギャップイヤーの広がり、男女の比率、ギャップイヤー取得者の在籍学部のパラつきについてどう思うか。

Brown : こちらにギャップイヤーをする学生の割合の統計データがあるのでそちらを参照してほしい(添付資料[資料1]参照)。大学全体の約10%である。学部によって異なるが。

(質問3)

ギャップイヤーの内容について、また期間や費用についての例を挙げてほしい。

Brown : 元々ギャップイヤーとは海外旅行を兼ねているものであった。そこには新しい経験をするという趣旨があった。期間は大体9ヶ月くらいだと思う。学生はAレベル試験を終えると数ヶ月働き、ギャップイヤーの旅行のためにお金を貯めて、それから6ヶ月から9ヶ月の間アジアやインド、南アメリカ、北アメリカのようなところに行く。そこには必ず旅という要素が含まれ、中には業者が用意したプログラムに参加してボランティア活動をしたり、海外のプロジェクトに加わったりする人もいる。旅行と異文化体験と世の中への貢献という要素を組み合わせているのであろう。報酬も少しではあるが出る。しかし中には、逆にプロジェクトへの参加費を払わなければならないものもある。そして、様々なギャップイヤー活動を扱う業者が存在する。若者に向けて宣伝をしているが、ギャップイヤー活動の手配にはかなりの手数料がかかる。業者に関しては賛否両論で、こういう業者のことを良く言う人もいれば、ギャップイヤーを利用して学生からお金を巻き上げているというネガティブな意見もある。あと、慈善団体がギャップイヤー活動を提供しているところもある。

登 道 : ジー・エイ・ピー (GAP) とか。

Brown : ジー・エイ・ピー (GAP) は非常に良心的な団体だと思う。この団体は、ギャップイヤーを商品化して宣伝し、学生に高く売りつけている業者について懸念していると発表していた。また、期間は一般的には6ヶ月から9ヶ月であると思う。費用については、同じ海外ボランティアにしても、GAPを通してするのと業者を通してするのはずいぶん違う。9ヶ月間海外旅行するのにかかるのは大体5000ポンドと言えるだろう。

(質問4)

リーズ大学では、ギャップイヤーに関して支援制度などはあるか。また、ギャップイヤーを取得するための手続きや準備について教えてほしい。

Brown : 取り立ててギャップイヤーを奨励するつもりはない。ただ、ギャップイヤーの経験が多少影響する場面としては、高校在学中に本学に出席してきてこれからギャップイヤーをしたいと言っても、それは入学許可の判断に何ら影響は及ぼさないが、ギャップイヤーを終えてから出席する人は、そこで学んだ経験を願書に書くことができ、それが審査において有利に働く可能性がある。先ほど示した統計データ(添付資料[資料1])は、願書提出後にギャップイヤーをするとした人の数である。ギャップイ

ヤーから帰ってきてから出願した人の数は統計データに入っていないが、彼らの願書を見たらかなりプラスの印象を受けることになるであろう。精神的に成長しているし、願書にギャップイヤーでの興味深い経験が書き綴られている訳なので。そのようなわけで、大学の方針としてギャップイヤーを奨励したり反対したりすることはないが、ギャップイヤーをした後に出願してくる学生は、必然的にその経験が入学審査に有利に働くことになる。

(質問5)

ギャップイヤーについて、大学や民間の組織からの基金はあるか。

Brown: ないと思う。リーズ大学にはギャップイヤーをとる学生への資金提供は存在しない。慈善団体が行き先の国や活動内容によっては資金援助をしてくれるかもしれないが、大抵ギャップイヤーの資金は学生とその家族によって賄われる。また、民間企業からの資金提供もないと思う。民間企業がギャップイヤーに関わるとすれば、ギャップイヤーに働く人をそのままその企業に雇い入れるくらいだと思う。多くの学生がギャップイヤーを利用して学費を貯めるためや実務経験を積むために働いている。従って、民間企業は雇用を提供することはあってもギャップイヤーに海外旅行や慈善活動をしようとする人のための資金援助というのは行っていない。

(質問6)

ギャップイヤーについて、大学側そして学生側双方からのメリット（長所）とデメリット（短所）を教えてください。

Brown: 大学の立場から言えば、実務面のことだが、毎年ギャップイヤーに出る人が何人かいるので、その人たちの入学の延期を見越して受け入れ人数を設定する。もし急にギャップイヤー取得者の人数が減れば、大学は新年度に想定より多い数の学生を抱え込むことになる。そうなるとその対処が大変になる。また逆に想定より多くの人がギャップイヤーに出ってしまったら、大学は想定より少ない数の学生で新学期を迎えることになる。従って、翌年の入学を勧めたりその年に入学するように勧めたりしながらその辺りのバランスに対処しなければならない。そのような実務面以外で大学にとっての利点は、高校から直接来る人もいれば、ギャップイヤーでより社会性を高めてくる人もいて、その多様性があることだと思う。概して、ギャップイヤー組とそうでない学生が混在するのは良いことだと考えられている。そして、学科にもよるのだが、A レベル試験を終えて大学入学前にギャップイヤーを1年間取ると、その間に専門知識を忘れてしまうことがある。特に理系の学生は重要な知識を忘れてしまう可能性があると思われる。また、学生の立場で言うと、ギャップイヤーの1年は楽しくて、のんびりできたり、将来について考えたり、新たな経験をしたりできるが、人によっては、勉強から離れてしまってもうすでに勉強する習慣を取り戻せないという危険性も孕んでいる。また、英国政府からの資金援助もないと思う。

(質問7)

ギャップイヤーを経験した学生とそうでない学生とでは、大学入学後の評価は違うか。

Brown : 私は実際に教えてはいないのでその質問には答えにくいのだが、推測で言うとギャップイヤーを取得したからといって高い評価がもらえるというのはないと思う。ただ学科によっては、ギャップイヤーでした経験の分だけクラスに高いレベルの貢献をできるかもしれない。人によっては外国を旅してさらに偏見を持つようになったということもあるかもしれないし、逆にオープンになる人もいる。

(質問8)

最後の質問だが、ギャップイヤーに関するあなたの個人的なご意見を伺いたい。

Brown : 現在の英国では、学生が大学の学費を払わなければならなくなったために、学生に経済的なプレッシャーがかかる。そのため、学生たちは進学に伴う出費について以前より慎重に考えるようになってきている。その結果、ギャップイヤーがいずれ裕福な学生だけができるものとなってしまわないかと懸念している。元々は旅して新たな経験を得るという趣旨だったのが、裕福な学生だけのものになるのではないかという危惧である。そうすると裕福でない学生は、ギャップイヤーは単に学費を貯めるためだけの期間だと、或いは、自分には手に入らない贅沢な期間だと捉えるかもしれない。最近の傾向として、ギャップイヤーから、大学の交換留学プログラムや海外インターンシップの方に力点が移りつつあるかもしれない。これらは大学のコースに組み込まれているものである。多くの学生が大学入学前にギャップイヤーを取得する一方で、また別の学生が1年間海外で勉強する留学プログラムや海外インターンシップに参加している。従って、今後大学の海外プログラムの参加者が増えるにつれて、ギャップイヤーを取得する人の数が減少するかどうか観察するのも興味深いかもしれない。

登道 : 大学を卒業して就職する前にギャップイヤーをする人もいると聞いたが、それはそれほど多くないのか。

Brown : それは私たちには分かりかねるが、学生が卒業後は休暇を取るとか、ギャップイヤーも海外プログラムもしなかったから今やっておくとか言うのを聞いたことはある。このようなパターンも雇用形態が変化して、学生たちが就職できるのかどうかの心配をしなくて済むようになったら増えるかもしれない。ただ、元々ギャップイヤーは高校を卒業して大学入学前にするものであるとは思う。

2. 回答者 : Ms. Nettleton

(質問1)

ギャップイヤーの制度はいつ頃から始まったのか。

Nettleton : 私は18年前から大学で勤務しているが、その頃から大学入学前にギャップイヤーをとる学生はいたので、ずいぶん前から始まったと言えるだろう。近年はますます多くの学生がとるようになってきている。その理由のほとんどは大学の学費を稼ぐためである。ギャップイヤーは大学とは関係のない活動なので、大学も支援や資金援助を行ったりしない。その理由は定かではないが、おそらく大学のプログラムでは

ないからであろう。大学のプログラムで1年間の海外留学というのがありそれは大学も資金援助をするが、ギャップイヤーはそうではないので学生が自費で行うことになる。

(質問2)

ギャップイヤーの広がり、男女の比率、ギャップイヤー取得者の在籍学部のパラつきについてどう思うか。

Nettleton: 今年は106人がギャップイヤーをとっている。2007年度は70人、2006年度は90人、2005年は69人、2004年度は79人となっている。全員が現代言語学部の学生である。また、男女比については女性がほとんどである。女性の方が文系に興味があるようなので、90%が女性といったところである。

(質問3)

ギャップイヤーの内容について、また期間や費用についての例を挙げてほしい。

Nettleton: 何をするかは学生によってそれぞれである。大学の学費を稼ぐために地元で働く人もいれば、バックパッキング旅行に出かける人もいる。行き先は、タイやオーストラリアや南米など様々である。これから大学で勉強しようと思っている言語が話されている国に行き、語学力の向上に励む人たちもいる。旅行する期間としては、3ヶ月から6ヶ月くらいである。現地でアルバイトをして旅費の足しにしたり、例えばフランスに行ってぶどう園でぶどうを摘んだり、またタイに行って英語を教えるとか、海でスノーケリングを楽しむとか様々である。期間はほとんどの人がクリスマスまで数ヶ月働いて、それから6月まで約半年ほどギャップイヤーに出る。数ヶ月だけの人もあるし、個人それぞれである。1年間フルでギャップイヤーに出たという人はあまりいないようである。

(質問4)

リーズ大学では、ギャップイヤーに関して支援制度などはあるか。また、ギャップイヤーを取得するための手続きや準備について教えてほしい。

Nettleton: 我々は学生がギャップイヤーをすることに対して大変関心を持っている。勧められているのは、学生が自分の勉強したい言語が話されている国に行くということである。フランス語を勉強したいのならフランスや他のフランス語圏へ行く、ドイツ語ならドイツ語圏へ行くということである。日本語や中国語やタイ語では全くの初心者なので、語学の学習というよりは当該国を旅してその文化に触れ、それが大学での勉強に役立つというように促している。また、ギャップイヤーを奨励する制度やプログラムなどはないが、学生からギャップイヤーをしたいのだけれど、どう思うかとのアドバイスを求められることはよくある。基本的には、ギャップイヤーを良いこととして提案している。ギャップイヤーで何をすべきかと聞かれたら、どこへ行けばいいかを具体的に提案したりする。海外での仕事についての情報を学校の図書館や市民図書館で収集するように提案したり、また、海外での仕事の見つけ方が

載った本もある。

(質問5)

ギャップイヤーについて、大学や民間の組織からの基金はあるか。

Nettleton : 私が知る限りは全くない。政府もこういったものには支援をしないと思う。ただ、学生が軍隊に入るなら資金援助はあるかもしれない。というのは、入隊希望の学生には大学での奨学金が下るので、まずはギャップイヤーをして、そして奨学金を得て卒業するという方法もある。資金援助に関してはそれくらいしか思いつかない。

(質問6)

ギャップイヤーについて、大学側そして学生側双方からのメリット（長所）とデメリット（短所）を教えてください。

Nettleton : 利点は、先ず外国語の能力を身につけられることと、学習の合間に気晴らしができるという点である。あと大学側からの利点と云えば、何と云っても外国語能力である。そして、高校まで全て親の世話になっていたのが旅に出て一人になるので、自立して視野を広げ、精神的に成長するという利点もある。ギャップイヤーに行った人はそうではない人と比べて、その所作などを見ていて分かる。不利な点は、ギャップイヤーに出かけて、大学に戻りたくないと思う人が出ることであろう。現地で気に入った仕事を見つけて大学に行かず、教育の機会を逃してしまうことも不利な点と言えるであろう。

(質問7)

ギャップイヤーを経験した学生とそうでない学生とでは、大学入学後の評価は違うか。

Nettleton : それはないと思う。ギャップイヤーをしてきても、していなくても、学生は同様に扱われる。時々、ギャップイヤーをしてきた学生は授業についていきやすいということを目にするが、学生の扱われ方に違いはない。外国語のクラスにおいては、ギャップイヤーをしてきた学生はクラスを早く上がれるということはあるが、例えば、イタリア語を初級クラスから始めるところだった学生がギャップイヤーでイタリアに行き、イタリアで1年間ほど語学学校に通ったので大学ではより高いレベルのクラスを取ることになるといった具合である。

(質問8)

最後の質問だが、ギャップイヤーに関するあなたの個人的なご意見を伺いたい。

Nettleton : ギャップイヤーは良いものだと思う。とても素晴らしいアイデアである。精神的に成長して大学に来るとするのは良いことである。しかし、誰にでも良いというわけではないと思う。ギャップイヤーをとり、現地で仕事を見つけて満喫し、大学に戻ってこない学生も多いので。ただ実際は、特に外国語を学ぶ学生にとってギャップイヤーは素晴らしいことである。一年も現地にいれば、語学も確かに上達する。

学生がギャップイヤーでタイや中国や日本に行って現地の生活に触れ文化を学んでくれば、語学のセンスが磨かれたことも手伝って、臆することなく海外語学プログラムに参加することができるという意味でもギャップイヤーは有益である。

3. 回答者 : Ms. Clapham

(質問 1)

ギャップイヤーの制度はいつ頃から始まったのか。また、どのような手続きがあるのか。

Clapham : ギャップイヤーは大学の制度とは全く別個のものである。おそらく 20 年くらい前から、学生たちが自分で企画して行っていることである。中にはギャップイヤーの期間中に仕事をする人もいるし、海外プログラムに参加したり、海外旅行に出かけたりする人もいたり様々である。ギャップイヤーは高校を卒業して大学に行くまでに一年間取って行う。大学がギャップイヤーを導入したのではなくて、学生が自らやっていることである。人気が高まりつつある理由は、大学卒業後は学生ローンを返済しながら働きはじめなければならず、しばらくは旅行などをする機会もないだろうから、そのようなチャンスのある大学前の時期にしておこうというわけである。

(質問 2)

ギャップイヤーの広がり、男女の比率、ギャップイヤー取得者の在籍学部のパラつきについてどう思うか。

Clapham : 学科によって大きく異なる。例えば、英国の医学生はあまり大学前にギャップイヤーをしないと思う。医学部に入るだけでも競争が激しいので。さらに、社会経済的な要素が大きく影響していると思う。例えば、文系の学生の間ではギャップイヤーは非常に人気がある一方で、理系や工学系の学生でギャップイヤーをする人の率はやや低いと思う。また、3 年制のプログラムでは 1 年間の海外留学プログラムがあるので、入学前にギャップイヤーをするよりも、学位取得プログラムの中で 1 年間海外に行くほうが良いと考える学生もいる。

(質問 3)

ギャップイヤーの内容について、また期間や費用についての例を挙げてほしい。

Clapham : それぞれ人によって全く異なる。大学の学費のために、マクドナルドのようなところで働いて 1 年を過ごす人もいるし、様々である。全く個人の自由で取り組んで良いのである。ここ数年の傾向としては、斡旋業者がギャップイヤー用の様々なパッケージプランを揃えている。例えば、ニカラグアの雨林で半年間活動するとか、海外で数ヶ月英語を教えるといったように組織化されたプログラムがある。学生は料金を払わなくては行けないが、住居が与えられ費用には渡航費も含まれる。こうしてギャップイヤーは商品化して市場に出回ってるが、ほとんどの学生は自分で決めている。

(質問 4)

リーズ大学では、ギャップイヤーに関して支援制度などはあるか。また、ギャップイヤーを取得するための手続きや準備について教えてほしい。

Clapham： 専攻分野による。もちろんギャップイヤーで何をするかという内容にもよるが、分野によってはギャップイヤーがプラスになることもある。私たちが学生に求めているのは、ギャップイヤーの経験が大学での勉強にどのように活かせるかをきちんと説明できることである。例えばマクドナルドで1年間働いてきた学生なら、それによってチームワークや時間を厳守することなど信頼を得る術を身につけたというなら、大学側も肯定的に判断する。また、1つ年齢を重ねただけ成長しているし、自分のやりたいことがより具体的に見えていて、大学での勉強に打ち込めるというふうに見る人もいる。学科によっては、これは特に理系で懸念されることであるが、1年間学校に行っていなかったわけなので、戻ってきたときに授業についていくのに困難を感じる人もいる。従って、ギャップイヤーが学術的な意味で有意義だと見なされるかどうかというのは、やはり学科によるであろう。あとは学生がギャップイヤーの経験をどう説明するかであろう。ギャップイヤーをしてきた入学志願者が「マクドナルドで働いて何千ポンド稼いだ」などと言っても、あまり意味がない。責任感が身についたとか、学習能力がついたとかいうふうに、きちんと説明して納得させなくてはならない。それこそが、大学側がギャップイヤー経験者の志願者に求めていることなのである。

(質問5)

ギャップイヤーについて、大学や民間組織そして政府からの基金はあるか。

Clapham： ないと思う。民間団体ではあるかもしれない。慈善団体やトラストなど様々あるの。例えば、ボランティアで何かしたいと願えば、渡航費分などの資金が出るかもしれない。また、政府からの支援は、あったとしてもかなり限られたものだと思う。

(質問6)

ギャップイヤーについて、大学側そして学生側双方からのメリット（長所）とデメリット（短所）を教えてほしい。

Clapham： ギャップイヤー経験者なら精神的に成長していて思慮深く、大学での勉強に対しても真剣な姿勢で向えるという人に来てもらいたい。そのような人は転学するリスクも低いはずで、実社会を様々経験しているので、大学での勉強をきちんと身に付けられ勉強する機会のありがたさをわかっているだろう。以上が良い点と言えるだろう。良くない点は、1年間勉強を離れているので、勢いを失ってしまっている学生もいるということが挙げられるだろう。さらに学生と大学の双方にとっての利点は、英国では大学への志願手続きは予想される成績に基づいて行われるのだが、ギャップイヤーをしてきた人の成績はすでに出ているわけなので、ギャップイヤー経験者は素晴らしい志願者と言えるという点である。というのは、予想した成績をすでに達成しているわけなので、リスクが少ない。その点を学生側は活かせば良いと思う。

求められる成績と自分の成績を見て、自分の成績を最大限に生かすようにすれば良い。

(質問7)

ギャップイヤーを経験した学生とそうでない学生とでは、大学入学後の評価は違うか。

Clapham : それはないと思う。ギャップイヤーをしたかどうかは成績に影響することはないと思う。

(質問8)

最後の質問だが、ギャップイヤーに関するあなたの個人的なご意見を伺いたい。

Clapham : ギャップイヤーをする人は、自分が大学を卒業した後は何をしたいのかということをよく考えて慎重に計画する必要があると思う。ギャップイヤーを自分の目標達成のためにどのように役立たせるのかを熟考するべきである。例えばマーケティングの方面に進みたいのなら、マーケティングを扱う企業は何を求めているのかを調べて、ギャップイヤーがどのようにして必要なスキルの取得に役立つのかを考える必要があると思う。そうすればスキルと学位の両方が得られ、就職に有利になるであろう。つまり、ギャップイヤーをいかに計画して大学在学中と卒業後に最大限にその経験を生かすかが大切である。そうすれば1年遅れて卒業することや、ギャップイヤーにかかる費用といったマイナス面も背負う価値があると言えるであろう。中には運転免許を取るといった実用的な能力を身につけるためにギャップイヤーをする学生もいるので、ギャップイヤーについてはそのプラス面もマイナス面も全体的に見ることが大切だと思う。また、自分の勉強したい学科について大学と相談したり、ギャップイヤーについての見解を尋ねたりするのもいいと思う。良いアドバイスももらえると思う。ギャップイヤーをしてきた人の社交性を評価してくれて肯定的に支持する団体などもあるので。

4. 回答者 : Mr. North and Ms. McCabe

(質問1)

ギャップイヤーの制度はいつ頃から始まったのか。また、どのような手続きがあるのか。

そして、ギャップイヤーの広がり、男女の比率、ギャップイヤー取得者の在籍学部のパラつきについてどう思うか。

North : 学生の立場からすれば、ギャップイヤーというのは勉強から解放される期間なのであろう。小学生の時から学校に通って、試験を受けたり成績を評価されたりをずっと繰り返してきたわけなので。大学というのは学生から社会人になる移行期間なので、そこで一息入れたいということであろう。就職前に羽を伸ばしたいとか、充電をしたいとか、或いは今の英国では特にそうなのだが、学費が高騰しているので働いてお金を貯める期間に充てたいという人もいる。経済的に不安のある人は多額の借金をしなくて済むように貯金をしておくということもある。ギャップイヤーにはこのように様々な理由があるわけだが、確かなことは、我々はそのような個人的な

決断に関わっていないということである。従って、我々のギャップイヤーとの関わりは、翌年度の入学希望者を受け入れるかどうかということである。実際は受け入れている。入試を受けてもらい、合格して条件をクリアした人に翌年度の入学まで籍を確保しておくのである。そうすれば学生は安心して実務経験を積んだり、充電をするなりできるわけである。ギャップイヤーで仕事をするとか旅行に出かける人たちが、「帰ってきたときにちゃんと大学に入学できるのだろうか」という不安を抱えたままの気の毒な状況は避けたいので、保証を与えてあげるということである。手続きとしては、その年の入学希望の人たちと一緒に入試を受けてもらい、翌年度の志願であるという学生と大学側との共通の認識のもとで、書類手続きも寮の部屋も確保もする。そうすることにより、ギャップイヤーの最中に「ちゃんと寮に入れるのだろうか」と心配しなくて済むわけである。あとは、ギャップイヤーから帰ってきた時に入学に関する案内を読んで、寮の部屋の空きを確認するだけでいいのである。そうやって居場所が確保されることで、安心してギャップイヤーの活動に集中できるのである。

また、ギャップイヤーの志願者（入学希望者）は255人であり、昨年的一年遅れの入学希望者は45人である。これはビジネススクールに限った数字だが、このように前年度からの申し込みがあれば我々は籍を確保してあげるのである。この一番の理由は学費であろう。また、男女比については、ビジネススクールでは男子のほうが多いと言えるであろう。これは、旅行や仕事に関わっているからであろう。つまり、男子の方が旅に出ることについて自信があり、大学入学前という時期にギャップイヤーをするリスクを、あまり何とも思わないのかもしれない。ただし、これは前年度の、一年先に向けての申し込みは男子のほうが多いという話をしているだけではあるが。

McCabe : 入学後にギャップイヤーを取得する女子の数を入れたら同じくらいの割合になるのではないだろうか。確か以前は女子のほうが多かったように思う。

North : 専攻別の男女比のこともあるだろう。経済学部だったら必然的に男子のほうが多いし、ソフトな面を扱う心理学や経営学、言語学ならば女子のほうが多いだろう。つまり、全体的なデータでなくて、専攻も影響しているということを考慮しなければならないと思う。おそらく65:35か60:40の割合であろう。

(質問2)

ギャップイヤーの内容について、また期間や費用についての例を挙げてほしい。

North : 英国の大学制度では休学は年単位なので、期間は1年間であろう。9月始まりというのが決まっているので。もし2年間ギャップイヤーに行きたいという人がいれば、同じような手続きでは済まないであろう。大学が受け付けるのは1年先の入学希望までである。キプロスやシンガポール等の学生なら兵役で2年遅れて入学ということはある。また、例えば博士号を持っているような人なら大学にいたほうが良いといったように例外もあろう。とにかく本学では1年先の願書しか受け付けていない。

1年先延ばしにする理由は様々だと思うが、我々はちゃんと系統立てられた説明を学生に求める。その1年間で何をやる計画なのかを説明してもらおう。海外を旅するからとか、仕事をするというのも妥当な理由である。入学前に海外旅行しておく、大学にある海外プログラムに興味を持ってくれるかもしれない。仕事についても同様である。大学生の就職については矛盾もあるのが実情である。多くの会社が、「素晴らしい資格をお持ちですが、実務経験は」と聞いてくる。ではどうやって実務経験を積めるかという話になるわけで、入学前に働いてみるとかインターンシップもあるが、実際にそのようにできる期間は短いであろう。

McCabe : 英国の大学はほとんどがギャップイヤーに対して好意的である。結果として、学生はより雇用に適した人間へと成長するわけなので。それは学生自身にとっても大学にとっても好ましいことである。だから大学側も歓迎するし、とても前向きである。ビジネススクールの見解としても、ギャップイヤーについては意欲的・肯定的で、ギャップイヤーをしてきた人たちは概して精力的で、高校卒業してすぐに大学に来る人たちよりも精神的に成長していると感じている。

(質問3)

ギャップイヤーについて、大学や民間組織そして政府からの基金はあるか。

North : 私が知っている限りはないと思う。

McCabe : その点は英国の高校に聞いたほうがいいかもしれない。

North : 民間でも、人間育成や海外経験やボランティアといったテーマを扱うところなら資金援助の可能性はあり、ギャップイヤーの資金援助につながる。エディンバラ公も全国的に認定された賞を授与しており、アフリカの学校の支援をするといったような活動などを行っている。

McCabe : ギャップイヤーを支援する民間団体はあると思う。

登 道 : 非営利団体か。

North : そうとは限らない。例えばアフリカの学校で教えたいという人にそのような活動の場を提供する団体があったはずである。参加者本人は旅費を負担するだけで、現地では住居や食事の面倒は見てもらえる。

McCabe : または、そのような活動をするための資金を得るために数ヶ月間仕事をする人もいる。しかし高校や大学はギャップイヤーを奨励するけれども、誰も強制はしない。結局は個人の選択なので。

North : そのような活動をする人というのは、大抵とても優秀で自立心のある人である。精神的に成熟していて自立心があり、精神的に満たされた人である。将来的にもその経験を十分キャリアに活かせるであろう。

(質問4)

ギャップイヤーについて、大学側そして学生側双方からのメリット（長所）とデメリット（短所）を教えてください。

North : 何にでも良くない点というのはつきものだろうが、ギャップイヤーに関しては、現

地から戻ってこない危険性があるというのが最大の欠点であろう。大学側が金銭的な損失するというわけではないのであるが。前年度より申し込みのあった人が入学する意思がなくなった場合は早めに知らせてもらえれば損失は生じないし、すぐに次の入学希望者で埋まる。しかしながら、目標入学者数というのがあるので、我々はギャップイヤーが終わった頃にメールや電話で連絡を取って入学の意思確認をする必要がある。現地で良い仕事を見つけた可能性もあるし、何があるか分からない。様々な経験するうちに興味分野が変わって、もうビジネス分野での学位はいらなないと思うこともあるだろう。ただ、ギャップイヤーをしなければそんな発見もなかったわけなので、本人にとればそれは自分がやりたいことについてゆっくり考える機会が持てたということで喜ばしいことであろう。

登 道： 自分の本当にやりたいことが分かってくるということか。

North： はい。高校の卒業後すぐに大学に入学して1年経った頃に、これは自分のやりたい勉強ではないと気づくという失敗よりは良いと思う。従って、予定通りに大学に戻ってこない人もいるわけである。早めに入学の意思がないことを知らせてもらえる限りは大学側の損失はそれほどないし、すぐに空きも埋まるから良いのだが。

(質問5)

ギャップイヤーを経験した学生とそうでない学生とでは、大学入学後の評価は違うか。

North

&McCabe： 全く同等に扱われる。そして、誰がギャップイヤーをしてきた学生かなどいうことは分からないので。

North： 学生同士の会話を聞いていて、ギャップイヤー経験者のほうが知識も話題も豊富だと気づくことはあるが。

McCabe： しかし、ギャップイヤーをする人は元々精力的で精神的に成熟した人なわけだから、どのくらいがギャップイヤーの影響なのか、或いは生まれつきの性格なのか、或いはその両方なのかが分かりにくいということも理解しておかなければならない。

North： そのようなわけで、教える側は最初は何も知らないのである。おそらく学生たちと討論を始めれば、すぐにギャップイヤーをしてきた学生か、高校卒業後すぐに入学した学生かが分かるであろうが。だから、レクチャーやセミナーやチュートリアルには取り立てて何の影響もないと言える。

(質問6)

最後の質問だが、ギャップイヤーに関するあなたの個人的なご意見を伺いたい。また、日本でのギャップイヤーの導入の可能性についてどう思うか。

McCabe： このインタビューの目的は、日本の大学にギャップイヤーを導入しようという文部科学省の計画なのか。それとも日本の大学がギャップイヤーを好ましく思っていないからなのか。

登 道： むしろ雇用者となる企業のほうが好ましく思っていない場合が多いのである。例えば、旅行してきたという学生に対して「ただ旅行して何の意味があるのか、時間の

- 無駄ではないのか」というわけである。英国とは全く異なる考え方なのである。
- McCabe : なるほど。つまり、ギャップイヤーを日本で公式に認められた制度にして支援を得られる仕組みを作る必要があるということ、という理解で良いか。
- 登 道 : 又は、企業の思うような関連業務の実務経験のようにして、企業の理解を得る必要があるかもしれない。いずれにせよ英国とは全く違う状況である。従って、日本政府はギャップイヤーを導入しようとしているのである。
- McCabe : それは分かるが、私が日本にいた頃は教育制度が全国的に一貫していて、日本中どこでも同じ制度を共有しているという印象を受けた。それに対して、英国の教育制度は多様性があり、従って、いわゆる常識的感覚も多様であると思う。
- いずれにせよ英国で大事なポイントは、学生が1年にわたってギャップイヤーを経験して、適応性と行動力を身につけるということである。それは就職や進学において絶対的に有利な経験と言えるであろう。ただ、英国の企業にも卒業したばかりの人（新卒）を採用したがる企業もあるのは事実である。あまり海外経験があったりすると、そこの企業の色に染めるには遅すぎると考えるのである。そのような企業は、大学院に進んだ人も「長く勉強しすぎた」といって敬遠する。従って、その境界は非常に微妙であると言える。
- North : 英国では18歳が成人となる歳で、ライフスタイルが変わる歳でもある。どのような仕事に自分は就きたいのかと考えはじめなければならない時期で、ある意味ではプレッシャーがある。従って、ギャップイヤーはそのような状況から一歩離れてみて一旦学校や友人や家族からのプレッシャーから解放された状態で、自分の進路や目標をじっくり考える良い機会でもあるのだ。構造化された制度でやってみなければ、例えば、「フレンズ・オブ・デューク・オブ・エディンバラ・アワード」ではそういった概念を実際に適応させることができ、政府も奨励している。人格育成にもなるし、社交能力、他者への思いやり、道徳観念も身につく。多くの企業が今や企業の社会責任について言及するようになってきている。つまり、企業として他者に対して何ができるかということであるが、ビジネス面にも活かせることである。将来役員になるような社員を、貧しい地域に学校を設立するために派遣するとか、旅をして世界を見て、そのような制度を確立できるように人を育てるとか、非常に有意義である。企業は、今や都市から都市でなく、国から国へ人を送っている。初めての経験には臆するものがあるが、若い人は適応性があるから若いうちに様々な経験をするのは良いことだと思う。歳を取れば取るほど適応性が失われていくので、早いうちにそのような経験をするのはとても有意義だと思う。
- McCabe : JETプログラムの広告をしている団体の名前が思い出せないのだが、そのような英国の団体は見つからないこともないと思う。JETプログラムを奨励しているその団体は、JETの他にギャップイヤーなどの支援もしている。
- North : A レベル試験を終えた人を対象に、人生が変わるような建設的な経験を大学入学前に提供するという趣旨の慈善団体は多くある。参加すると、人生が豊かになると思う。しかしそのようなところを企業が見抜いてくれるかどうかは定かではないが。
- McCabe : 英国ではすべて個人の責任において個人的決断をするという考え方なので、ギャッ

プレイヤーは自分で決断することに自信を持つための良いチャンスだと思う。しかし日本では、他の様々なプレッシャーや周りの期待や義務があつてギャップイヤーの目的も形を変えてしまうのかもしれない。1年間そのような義務や社会的なプレッシャーから解き放たれて個人の責任で慈善活動をしたとしても、意味合いが違ったものになるのかもしれない。

登 道： ご存じかもしれないが、日本ではインターンシップや海外プログラムというのはあるのだが、ギャップイヤーをする人は少ないのである。

McCabe： 日本では長く1つの会社で勤める傾向があつて、うまくいけば一生1つの会社でということもあるようだが、英国ではそれは滅多にないことで、3回転職ということもある。従つて、日本では標準的な雇用形態の変化に国民を適応させる必要もあるかと思う。

登 道： 日本では終身雇用の形もすでに薄れつつあるのは事実だが。

McCabe： 英国では終身雇用は極々まれである。日本はそのような意味では数少ない国の1つであると思う。

日本政府は柔軟性を持って長い目で将来を見つめようとしているのかもしれない。終身雇用の保証のない時代なので。従つて、日本にこそ多様な背景をもたらすギャップイヤーが必要だと思う。

North： あらゆる意味においてギャップイヤーは有意義だと思う。大学就学前に豊かな人生経験ができて、自分が何をしたいのかより明確になり、大学に戻ってくる頃には勉強したいという意欲的な気持ちに支えられている。しかし高校から直接大学に行つては、新たな考えを取り入れないままなので、勉強する気もそれほど湧かずあまり進歩がないかもしれない。ビジネススクールでも自分を客観的に批評するというのと、自分のやっていることや選択を冷静に見つめることを学生に教えているのだが、それは時間を要することで、果たして大学という環境でできるのかどうかというところである。

登 道： つまり、自分を客観視することが必要だということか。

North： でもそれは鏡に囲まれた状態ではできないであろう。

3. ギャップイヤーを取得した学生に対するインタビュー

(回答者：Terry, Kate, and David)

3. 1. 回答者：Terry

(a) ギャップイヤーに行った理由を聞かせてほしい。

Terry： 私はAレベル試験のためにシックスフォームに進みAレベル試験を終えたのだが、その時点でも自分が何の科目が好きなのか、どういうレベルにいるのか掴めずにいた。何を大学で勉強したいのか分からず、勉強から一旦解放されたいと思ったのが理由である。

(b) ギャップイヤーはどのような内容だったのか。

Terry： プロジェクトトラストというスコットランドを本拠とする団体を通じてタイに行

った。A レベルの大学生のみが対象で、海外 26 ヶ国に派遣される。私はタイを選んで 1 年くらい行こうと決めた。タイでは学校で 15、16 歳の人たちに英語を教えた。また生徒の親や先生、子供たちにも英語を教えた。

(c) ギャップイヤーに行った動機、目的、或いは期待していたことは何だったのか。

Terry : まだ大学に行きたくなかった。もちろん大学にはいずれ行くつもりだったが、少し先延ばしにしたかった。また、ギャップイヤーについてあまり調べもせずに、パンフレットだけを見て応募してしまったという感じである。スコットランドで 1 週間かけて選定審査が行われて、合格したらどこの国に行きたいかを決めて、出発前に研修を受けるのである。私はとてもうまく組織化されていると思った。正直まだ大学に行く気がなくて、ちょうど兄がタイに行ってきて、良かったから行ったらどうだと勧められた。それが理由だと思う。

(d) ギャップイヤーをした結果、得たものは何か。

Terry : 何と言っても自立心である。当時の私はおとなしくて、知っている人が誰もいない状態で家を離れるということをやってみたわけだが、思い切って本当に良かったと思う。活動の中で、多くの様々な人たちと接する能力や、英語を教えながら得た様々な能力など、本当に多くを学んだ。こうして一旦大学を辞めて戻ってきても臆せずになれるのは、ギャップイヤーの経験のおかげである。もしギャップイヤーなしで大学に入学していたら、もっと不安であったと思う。今は全然構えることなく大学に通っているのだから、このリラックスした姿勢が勉強にもプラスに働いている。そして、自分に適した専攻を選ぶことができたと思う。

(e) 大学に入ってから何かギャップイヤーの影響を感じたか。

Terry : 行く前はどの科目を勉強していいのかわからずに社会学を選んでいたのだが、ギャップイヤーから帰ってきて勉強したのは国際開発と東南アジア学である。もちろんそれはタイに行ったからで、現在タイ語も勉強している。

(f) ギャップイヤーのメリットとデメリットは何か。また、資金は自分で調達したのか。

Terry : 悪い点としては、現地で苦労があるかもしれないということだろう。ホームシックにもなったりしたが、他には悪い点はないと思う。振り返ってみると良くなかったことなんてほとんどないと思う。すべてプラスに働いて良かった。自分に起こった変化も良いものだったし、勉強にうんざりしていた私にとって復学のための良い準備期間となり、戻ってきてからは勉強をしようという前向きな気持ちになった。行く前は私自身も貯金がなかったし、うちの家族は裕福ではないので、団体を通して 1 年間海外で過ごすための 4500 ポンドを調達するための活動をしなければならなかったから、それは大変だった。資金は、友達の援助もあったが基本的には自分で捻出した。そしてその団体が食費として少し援助してくれ、また住居費は無料だった。

(g) ギャップイヤーをこれから大学に入学する学生に勧めるか。

Terry : もちろん、100%勧める。私も最初はできないと思っていたが、きちんとできたので。踏み切るのに勇気が要るかもしれないが、悪い点などは何もないと思う。

2. 回答者 : Kate

(a) ギャップイヤーに行った理由を聞かせてほしい。

Kate : 5歳の時からずっと学校に通っていたので、そろそろ休憩を入れるのもいいかなと思った。両親からも離れたかった。つまり、息抜きをしたかったのである。元々はギャップイヤーをしないで高校からそのまま大学に入学をする予定だったのだが、オファーをもらっていたリーズや他の大学に入学を遅らせることは可能か聞いてみた。大学には1年遅れるけれど、籍を確保しておいた。そして、結局ギャップイヤーを取ることにした。だが、実際のところは息抜きのためである。

(b) ギャップイヤーはどのような内容だったのか。

Kate : 先ず6月にAレベル試験を終えた後、レストランとオフィスでの仕事に就いた。貯金するために週に60時間働いた。そして10月中旬にカナダに飛び、バンクーバーのスキー場で3ヶ月半過ごした。1月下旬に1週間帰国して、その後3ヶ月間インドでのプロジェクトに取り組んだが、主に旅行して回った。そして4月下旬に帰国して、またアルバイトを始め9月に大学に行きはじめた。カナダではBUNACでビザを取った。BUNACはカナダとアメリカと英国で提携している団体であり、旅行の手配をするところある。手数料を払って、カナダ領事館でビザを取ってもらった。飛行機の便も、同時期にカナダに向けてギャップイヤーをする人たちが一緒に行けるよう手配してくれた。他には、到着したらオリエンテーションがあつて銀行口座の開設の仕方などを説明してくれて、あとは仕事を見つけて、といった具合に展開した。インドの方は、私一人で誰の助けも得ずに行った。

(c) ギャップイヤーに行った動機、目的、或いは期待していたことは何だったのか。

Kate : 別にキャリアで成功しようと考えたわけではない。スキー場ではスキーインストラクターをしていたので、その実績を履歴書に書けるのはプラスになるとは思いますが、それが主な理由ではない。世間に貢献したと言うつもりもない。しかし、様々なものを目の当たりにしてきた。地理を勉強しているのでそれが幾分か役に立ったとは言える。カナダもインドもとにかく英国と全然違う所なので、新しいことを様々なんだことは間違いない。どちらの国でも友人と一緒にいたのだが、私たちの友情の形を大きく変えた。新たに出会った多くの人たちとは今でも交流が続いているし、今ではオーストラリアやニュージーランドにも友人がいる。

(d) ギャップイヤーをした結果、得たものは何か。

Kate : 何を得たかと言うと、スキーインストラクターの資格を得ることができた。もう一

度ギャップイヤーをしたら、次はどのように改善できるかという点は、おそらくもう少しちゃんと計画を練るということであろう。インドについてはモンスーンの時期に行ってしまい、最適な季節ではなかったし、カナダの場合はせっかく1000ポンドも払って行くわけだからもっと長くいて、より充実させたかった。3ヶ月は充分とはいえない期間であった。ただ、現地で得た経験は全て素晴らしいものであった。

(e) 大学に入ってから何かギャップイヤーの影響を感じたか。

Kate : 帰国してから大学に溶け込むことが困難だったと言える。高校からすぐに大学に入学した人たちよりも当然1年歳をとるわけだが、たとえ実家で暮らしながら仕事をしてギャップイヤーの1年を過ごした人でも、他の人たちよりどこか大人っぽいのだ。そこがギャップイヤーをしてきた人とそうでない人の違いだろう。私自身は、以前より人とよく話すようになった。それが変化と言える。そして大学での勉強については、特に地理に関しては、実際に学んだり、見たりしてきたことを活かしていると思う。インドのことなども。

(f) ギャップイヤーのメリットとデメリットは何か。また、資金は自分で調達したのか。

Kate : 利点としては、間違いなく素晴らしい人々との出会いがあったことである。不利な点としてはお金がかかるということであった。しかし、働いてお金を貯めることは可能である。もし高校から直接大学に入学したとしたら、夏にアルバイトをして3000ポンド稼げたと思う。実際ギャップイヤーをして帰ってきたら、手元には500ポンドしかなくて両親に借金をしなければならず、経済的には申し分のない大学のスタートとは言えなかった。経済的に余裕があればギャップイヤーへの参加は良いと思う。

(g) ギャップイヤーをこれから大学に入学する学生に勧めるか。

Kate : 誰にでも勧められるわけではないと思う。例えば、私の18歳の弟はもうじきAレベル試験を終えようとしているところだが、彼がバックパックで世界を旅すると考えると怖い。弟は人間的に若く、精神的に未熟なので、そのような人は自国にいた方がいいとは思っている。ただ、誰にでも勧めるというわけではないけれど、多くの人にとっては良いのではないだろうか。また、資金はすべて自分で働いて貯めた。オフィスでの派遣の仕事とレストランでの仕事で、一週間に平均220ポンド貯めた。

3. 回答者 : David

(a) ギャップイヤーに行った理由を聞かせてほしい。

David : 高校を終え、Aレベル試験を終えた。高校では厳しい試験漬けの3年間だったので、この辺りで1年の休暇を取るのもいいかなと思った。そしてこのような1年間の時間を取って旅行ができるという機会は滅多にないことなので、やってみようと思った。実際、やって良かったと思う。

(b) ギャップイヤーはどのような内容だったのか。

David : 高校を卒業後、まず夏の終わりに仕事を見つけて4月まで働いた。そして4月にヨーロッパに向けて出発した。電車でヨーロッパ中を4ヶ月間旅行するという、基本的にはバックパック旅行であった。非常に楽しかった。そして、旅は全て自分で企画した。

(c) ギャップイヤーに行った動機、目的、或いは期待していたことは何だったのか。

David : 動機や目的、期待したことというのは、何と言っても世界を見たいというのが一番大きかったと思う。英国と大陸ヨーロッパというのは近くに位置しているが、実際にするヨーロッパは多様性に富んでいるので興味があった。毎日新しい発見があり、そのようなところにも興味があった。

(d) ギャップイヤーをした結果、得たものは何か。

David : 得られたものは、何よりも経験である。次いで、精神的成長や率先力、そして自立心である。今大学に通っているが、ギャップイヤーで得たスキルは個人的にもステップアップになっていると実感している。そして何よりも良かったのは、様々な人と出会って話をするとき、それらの経験がとても役立っているのだから、得るものは多かったと思う。

(e) 大学に入ってから何かギャップイヤーの影響を感じたか。

David : 絶対に役立っている。専攻はヨーロッパ政治だが、クラスでは発表をすることが多いので様々な人と向き合う。その際の社交術が身についた。また、旅行中に得たヨーロッパの知識もヨーロッパ政治に織り込んで考えられる。だから行き先にヨーロッパを選んだということもあるのだが。

(f) ギャップイヤーのメリットとデメリットは何か。また、資金は自分で調達したのか。

David : 9割が利点で、何よりも参加することで得た経験が最も大きい。本当に得るものが多く、ギャップイヤーでしか得られない経験をし、それによってしか出会えない人たちとも出会えた。もしやっていなかったら、このようなチャンスは今度いつやってくるかわからない。私にとってはそれほど有益なものであった。不利な点は、例えば、大学に入ってから専攻したコースが面白くなくて変更しようと思ったとき、高校からそのまま大学に進んだ人ならばそれほど躊躇せずにやり直す道を選ぶかもしれないが、ギャップイヤーですでに一年遅れている人にとっては、その遅れを不利と感じるかもしれない。さらに、ギャップイヤーはお金がかかるというのも不利な点であろう。もしギャップイヤーの経験を楽しめなかったら、多額の費用が不利益だと感じるであろう。私の考えでは、仮に不利な点が3つあるとしてもやる価値はあると思うが。

(g) ギャップイヤーをこれから大学に入学する学生に勧めるか。

David: もちろん。ただ、学位コース（専攻）の種類によってはそれほどの得にもならないということもある。例えば、数学を勉強したい人には利益がないかもしれない。気をつけたほうがいいのか、高校から直接大学に進学するのであれば先生方が力になってくれるので簡単だが、ケンブリッジのような大きな大学はギャップイヤーを取らない学生に優先的に入学許可を出すので、ギャップイヤー組には不利かもしれない。また、資金は自分で仕事をして貯金をした。3つの仕事を掛け持ちし、資金が出来るまで結構長い間働いた。最後にバルセロナにいて、そこで少し仕事をして得たお金を旅費の足しにしたのだが、それ以外はすべて自分で貯めたお金が資金であった。

③リーズ大学でのインタビューを終えて

本報告は、文部科学省研究プロジェクトである平成20年度「先導的・大学改革推進委託事業：英国におけるギャップイヤーなど、学生または入学予定者に対する長期に渡る社会経験を可能とする取組に関する調査研究」（研究代表：秦由美子准教授）による調査研究の一環である。

リーズ大学のインタビュー調査を通じて、当大学及び英国におけるギャップイヤープログラム導入の取組みとその現状を包括・報告し、今後の日本の高等教育におけるギャップイヤー導入の可能性を探り、その制度化の検討のための基礎資料となることを目的としている。

調査者自身が2000-2001年度にリーズ大学に交換留学をしており、その折には素晴らしい経験をさせて頂いたわけだが、今回のインタビューも非常にスムーズに進み内容的にも充実したものとなった。

Ms. Brownからはギャップイヤーについての英国全体の傾向も含めリーズ大学を総括したお話を頂き、Ms Nettletonからは現代言語学部における傾向、Ms Claphamからは大学入学に関するギャップイヤーの効用、そしてMr NorthとMs McCabeからはビジネススクールにおけるお話を頂いた。特にビジネススクールは大学卒業後民間企業に勤めようとする学生が多く在籍する学部であり、ギャップイヤーと企業側の思惑との関係性を知る上でも有意義なインタビューとなった。また、Ms McCabeはJETプログラムによる1年間の日本での滞在経験を有しており、その立場から日本へのギャップイヤーの導入の可能性についても深く示唆を頂いた。さらに、3人の学生へのインタビューにおいても3人それぞれが違ったバックグラウンドを有しており、多様性に富んだお話を伺うことができた。

末筆ながら、インタビューに快く協力下さったリーズ大学のMs Brown, Ms Nettleton, Ms Clapham, Mr North, Ms McCabe、そして学生のTerry, Kate, Davidに心より御礼申し上げます。



ウォリック大学

(写真提供： 飯塚和明)

資料 1

表 1 リーズ大学全日制学部課程への英国人出願者による入学延期申請
2005～2007 年度の入学延期希望の割合 (%)

学部	学科	2007 年度入学			2006 年度入学			2005 年度入学		
		入学申請者総数	次年度入学延期申請者	入学延期者割合 (%)	入学申請者総数	次年度入学延期申請者	入学延期者割合 (%)	入学申請者総数	次年度入学延期申請者	入学延期者割合 (%)
芸術	英語	1850	258	12	1664	255	13	2011	275	12
	歴史	1304	227	15	1308	222	15	1948	266	12
	人文科学	1073	158	13	961	182	16	965	192	17
	現代言語および文化	1096	152	12	959	139	13	951	147	13
小計		5323	795	13	4892	798	14	5875	880	13
生物科学		3509	344	9	3022	348	10	3402	338	9
複数専攻センター		5575	951	15	5161	935	15	5328	964	15
教育と社会学および法律	教育	233	32	12	201	20	9	207	29	12
	法律	2365	151	6	1980	151	7	2093	146	7
	政治および国際学	798	155	16	831	188	18	937	154	14
	社会学および社会政策	734	107	13	616	83	12	749	95	11
	小計	4130	445	10	3628	442	11	3986	424	10
工学	土木工学	754	52	7	621	61	9	568	46	7
	コンピューター	486	28	5	464	30	6	591	43	7
	電子電気工学	399	19	5	401	39	9	428	31	7
	機械工学	1083	102	9	964	130	12	984	150	13
	プロセスと環境および材料工学	692	62	8	624	55	8	653	60	8
小計		3414	263	7	3074	315	9	3224	330	9
環境	地球と環境	868	103	11	788	114	13	944	114	11
	地理学	1082	172	14	1023	194	16	1203	177	13
小計		1950	275	12	1811	308	15	2147	291	12
リーズ大学ビジネススクール		3274	328	9	2705	234	8	3098	270	8

数 学 お よ び 自 然 学 (理 学 部)	化学	532	31	6	509	46	8	488	44	8
	色彩科学	43	3	7	32	3	9	43	4	9
	食品化学	178	13	7	158	17	10	139	9	6
	数学	988	46	4	778	49	6	815	42	5
	物理学と天文学	684	55	7	604	47	7	593	51	8
	自己組織化分子系	35	2	5	38	2	5	47	3	6
小計		2460	150	6	2119	164	7	2125	153	7
医学	ヘルスケア	4537	173	4	3525	224	6	3213	350	10
	医学医療研究所 (LIGHT、LIHS、LIMM)	2361	179	7	2321	168	7	2012	148	7
	心理科学研究	1279	151	11	1195	145	11	1562	171	10
	歯学研究所	983	30	3	862	18	2	858	22	3
小計		9160	533	5	7903	555	7	7645	691	8
演 劇 と ビ ジ ュ ア ー ア ー ツ お よ び コ ミ ュ ニ ー シ ョ ン	コミュニケーション研究	1323	134	9	1076	138	11	1257	177	12
	デザイン	1089	76	7	1011	81	7	1778	169	9
	美術と美術史および文化化学	750	133	15	631	137	18	853	184	18
	音楽	624	93	13	579	84	13	575	93	14
	演劇と文化産業	1298	97	7	1050	115	10	1849	154	8
	小計		5084	533	9	4347	555	11	6312	777
リーズ大学合計		43879	4617	10	38662	4654	11	43132	5118	11

9. オックスフォード大学キャリアサービスセンター訪問調査

佐藤万知

青山学院大学ヒューマン・イノベーション研究センター

調査日及び訪問先

2009年2月18日オックスフォード大学キャリアサービスセンター/ Mrs Fiona Whitehouse(インターナショナルプロジェクトオフィサー)

1. はじめに

本項では、オックスフォード大学で2007/08よりはじまったインターナショナルインターンシッププログラム(Oxford University International Internship Programme, OUIIP)について報告をする。インタビューを行っている時点では2008/09の募集中だったため、インタビューでは特にプログラムの開発過程について話を聞いた。具体的には、プログラムの目的、開発過程、スポンサー(インターン受け入れ企業及び団体)確保の手段、学生や学部の反応などを中心に話を聞いた。また、本項を書くにあたって、インタビュー内容、及びOUIIPのウェブサイト、資料を参考にした。

2. Oxford University International Internship Programme (OUIIP)概要

2-1. OUIIPの目的

オックスフォード大学国際戦略オフィス(International Strategy)のディレクターであるHeather Bell博士によると、21世紀における大学教育の課題の一つとして、グローバル化している世界の中で仕事をし、生きていくために必要な資質を身につけること、ということがあげられる。オックスフォード大学はこれまで、世界の様々な分野におけるリーダーの育成に貢献してきたが、今後、グローバルに活躍できる人材育成という側面を教育体制にどのように含めていくかを考えていくことは重要なことである。しかし、オックスフォード大学の教育システムは3学期制、チュートリアル制度、試験制度が組み合わさったユニークな制度になっているため、カリキュラムを変更してグローバルな視点を身につけるような内容のプログラムを導入することは大変困難である。そこで、考えられたのが、夏休み期間中を利用したインターナショナルインターンシッププログラムである。

2-2. 担当部署

OUIIPの立ち上げは国際戦略オフィスが行った。2007/08に3人の学生に試験的なパイロットプログラムに参加してもらい、学生および受け入れ側の満足度を確認できたため、2008/09より本格的なプログラムの開始が決定した。プログラムの担当部署はキャリアサービスセンターとなった。キャリアサービスセンターは日本の多くの大学にある進路就職センターと同様、学生の進路、就職に関する情報提供、履歴書の書き方や面接の受け方など就職活動に関する支援、企業を迎えたセミナーの開催などを主に実施している。今回、話を聞いたMrs Fiona Whitehouseは、ロンドン大学で博士課程に在籍しつつ、このキャリアサービスでOUIIPの担当およびインターナショナルリクルートメントの担当をしている。

2-3. プログラムの概要

以下にプログラムの概要をまとめる。まず、インターンシップは、夏休み期間中（6月末から9月末まで）に8～10週間行われる。インターンの受け入れ先は、企業だけではなく、NGOや研究機関、個人事務所など様々である。インターンの応募例については後述するが（資料1: OUIIPの応募例）、学生がインターンシップ期間中にかかわるべきプロジェクト、必要な知識やスキルは参加者募集の段階から明確に示されている。インターンシップ期間中、学生はプロジェクトリーダーの指導のもと職務に携わり、インターン受け入れ先は学生の支援のため、メンタが用意されている。学生は自分の出身国以外でのプロジェクトに参加申し込みをすることを推進されているが、強制ではない。

2-4. 受け入れ先の責任

インターン受け入れ先は、あらかじめ学生が関わる明確なプロジェクトを用意し、必要な知識、スキル等も明確に示すことが求められている。また、学生を受け入れるにあたって、職場にインターンのための場所を確保し、必要な備品（パソコンなど）なども準備することが求められている。これは、学生が受け入れ先のメンバーの一人として責任を持って仕事に携わるためである。また、学生が仕事の内容に関して指示を仰ぐべき指導者を明確にし、この指導者が大学との窓口にもなる。もし就労ビザが必要であれば、ビザ取得に必要な書類を揃え、インターンシップ期間中の居住場所の斡旋、生活に必要な最低限の賃金の支払いを行い、インターンシップ終了後には大学に対して、報告を行うことを条件とされている。受け入れ先が大学に提出すべき書類を資料として（エラー! 参照元が見つかりません。 ）添付する。

2-5. 参加申し込みの手順

参加を希望する学生は、申込用紙、志望理由、履歴書、推薦状、及びカレッジからの許可書を提出する。これらの書類はインターン受け入れ先に送られ、彼らがインターンを決定する。参加申し込み書を参考資料（資料3）として添付する。

特徴としては、カレッジからの許可書が必要なため、学生の学業成績によってはカレッジがインターンシップに行くことを許可しないこともありうる。つまり、大学としては学生の学業を一番重視しており、インターンシップなどの課外活動は、学業ができた上で参加するべきだという考えが明確になっている。

3. パイロット

OUIIPの概要を決めるにあたって、国際戦略オフィスはまずパイロットプログラムを実施した。パイロットプログラムには3名の学生が参加をした。参加プログラムや学生の体験談はWeb上に公開されている（表1: ウェブ上に公開されている学生の体験談）。パイロットプログラムを実施するにあたり、国際戦略オフィスはまず、大学同窓会にプログラムの趣旨を説明し、学生の受け入れに協力してくれる企業や事務所などを募った。次に、受け入れ先がインターンとして迎える学生の条件を決め、公募をし、3名の学生が選出された。パイロットプログラムの結果、受け入れ先もインターンとして参加をした学生も予想以上に得るものが大きいことが明確にな

The screenshot shows the University of Oxford website's media section. The main article is titled "International internships on offer" and is dated 26 Jan 09. The text of the article states: "Applications are now open for places on the Oxford University International Internships Programme (OUIIP) 2009. Following a successful pilot last summer, the University has expanded the opportunities on offer and current students can apply for one of 26 roles in nine countries." It further details that the internships range in size from small Canadian fiction publishers to a Danish nature reserve, and mentions the Academy of European Law in Germany and an offshore and marine engineering group in Singapore. A quote from Dr Heather Bell, Director of International Strategy, is included: "One of the challenges of educating students in the 21st century is equipping them to work and live in a global context". There is also a photo of three people (Sean MacKenzie, Morgan Murphy, and Catherine Russell) and a caption: "Participating companies can be of any size - Sean MacKenzie worked at a new social networking website in America and is pictured at its 'worldwide headquarters' with the staff, Morgan Murphy and Catherine Russell." The page also features a search bar, navigation menu, and social media sharing options.

ったため、本格的にプログラムを開始することとした。Fionaによると、パイロットプログラムに関して特に問題になることはなかったので、申込み手順や、プログラムの内容として変更する点はなかったとのことだ。2008/09の募集の際には、パイロットプログラムに参加した学生の体験談や受け入れ先の体験談を利用して宣伝を行ったため、多くの申込みがあった。また、2008/09プログラム参加者が決定したら、過去の参加者、学長、カレッジ長などを招待したパーティーを予定しており、これが OUIIP の広報となることを期待している。

表 1：ウェブ上に公開されている学生の体験談

4. 受け入れ先

インターンシッププログラムを始めるにあたって、困難なのは、インターンの受け入れ先を確保することだ。OUIIP の場合、同窓会のネットワークを利用してこの問題を解決している。

3. 現段階の課題

現在は、手続きがすべて紙ベースなので今後は ICT を活用してオートメーション化していく必要がある。プログラムの評価についてもこれからの課題となる。

4. 日本への示唆とまとめ

まず、少人数の参加者でパイロットプログラムを実施することが、プログラムの内容を充実したものにするためにも、より学生や受け入れ先のニーズに合ったプログラムにするためにも、また、受け入れ先を増やすことにも望ましい。

2 点目に、受け入れ先としては、卒業生がかかわっているなど大学と何かのつながりがある企業・団体を選んだ方が確保がしやすい。単にインターンシッププログラムに協力をしている、ということだけではなく、母校に何らかの貢献をする、という感情が受け入れ先に含まれる方が、プロ

グラムの意義が高まる。日本の大学の場合、一部の大学を除いて、大学として同窓会を有効に利用しているところは少ないので、インターンシッププログラムなどに同窓会を巻き込むことで、縦のつながりの充実、大学の文化の継承などといった点においても、一定の効果が期待できる。また、インターンとして参加する学生も、自らと同じ大学で学んだ先輩が、どのような生き方、仕事をしているのかを身近に見ることができ、自らの人生設計を考える上でも一つのロールモデルとなる可能性が高い。

3 点目に大学が提供するプログラムのため、インターンシップの期間、実施時期などを、カリキュラムとの兼ね合いで調整することができ、より、その大学の学生にとって参加のしやすいプログラムになる可能性が高い。

カリキュラムの中にインターンシップを組み込むのではなく、夏休み期間を利用したインターンシッププログラムにすることで、大学としても導入しやすいと考えられる。大学の中に大学の講義、ゼミ、インターンシップ、留学プログラムなど様々な“学びのプログラム”があることで、学生の学びを多角的に支援することができ、学生としても視野を広げるきっかけとなることを考えると、OUIIP は一つのモデルとして日本の大学にとって参考になると考える。

参照

Oxford University International Internship ウェブサイト

http://www.ox.ac.uk/international/international_support_services/internships_programme_ouiip/index.html

資料 1 : OUIIP の応募例

*受け入れ先団体名は変更してある。

プログラム名	出版社でのインターンシップ (カナダ、バンクーバ)
受け入れ先	A 出版社
受け入れ先概要	A 出版社は 1996 年にバンクーバに設立された、アート関連(絵画、デザイン、絵本、詩集など)の書籍を出版している小さな出版社である。2008 年には 7 冊、2009 年には 8 冊出版をした。オフィスはハーバー近辺にあり、夏は大変美しい景色を楽しむことができる。現在、編集長、アートディレクター(オックスフォード卒業生)編集者数名、コピーライター、その他数名が働いている。
受け入れ期間	2009 年夏 8 週間
給料	無給のインターンシップ。ただし、居住先は A 出版社が紹介。インターンの仕事内容 : A 出版社の facebook (日本における mixi のようなソーシャルネットワーク) とブログの更新。編集者を手伝って原稿集め。マーケティングを行い、今後出版す

べき書籍の立案。コピーライターとともにコピー文句を作成。

参加者の要件

文章力があること。フィクションストーリーを多く読み、フィクションの特徴を理解していること。

10. ギャップ・イヤーに関する報告書

アール・キンモンズ

大正大学

はじめに

この報告書は、イギリスの「ギャップイヤー(Gap Year)」についてのインタビューをした際の印象をまとめたものである。("Gap Year" はこれ以後 GY と表記する) ゆえに学術的報告書というよりも、むしろ個人的感想の要素が強い。関係者各位には特別のご配慮をいただいたが、現段階では特定の個人名は引用しないことにする。

1. 方法論

UCAS 関係者以外で、インタビューさせていただいたのは、日本と日本の教育に造詣の深いイギリス人研究者の方々である。インタビューは対談、ディスカッションの形式で、(1) イギリスの GY について、(2) GY 制度を日本に制定すること、についての意見を伺った。このインタビューはオックスフォード、シェフィールド、ロンドンにおいて2月7日から21日の間に行われた。

ディスカッションの論点として、GY は中等教育(日本の高等学校でイギリスの第6学年)を終了し、カレッジか大学へ入学する前の若者たちが取るものと定義づけた。学位プログラムの一環のインターンシップ、海外旅行、その他休暇や一時中断は、時に GY として広く適用されることもあるが、それらは含まないものとした。

ほとんどの質問が、今現在イギリスにあるような GY と関連性のないもとであるとすぐにわかったので、インタビュー形式には従わないことにした。GY は中等教育を終了した後の高等教育機関に入るまでの期間に、若者が個人単位で取るものである。基本的に大学がそれに関わるのは、入学予定者に1年間の入学延期の許可を与えるときだけである。2008年2月18日に非常に制限のあるプログラムが発表されたが、これまでに GY に政府が関与することはなかった。

<http://education.guardian.co.uk/students/gapyear/story/0,,1150863,00.html>

インタビューさせていただいた方全員が、GY については新聞記事で読んだ以外はほとんどわからないと言われた。これは、実際に GY を取ったことのある人に聞いても同じであった。GY 経験者は、自分達の1970年代もしくは1980年代の個人的経験と、現在の状況は関係するところがありそうにないと強調する。というのは、それはオックスブリッジ入学者についてのことで、全体の典型ではないからだ。

また、イギリスでは高等教育機関に進学する際(進学できること自体が各生徒の優秀さを示したため)、当時進学者は大学進学に必要な授業料と日常経費のための補助金を受けることができた。つまり、学生は授業料を支払うために働く心配がなかった。

インタビューさせていただき方には、個々の学生が GY を取ったかどうか知ることが出来るのかと質問した。答えは、学生が自主的に申し出るか、あるいは教官が特に尋ねない限り、教官には分からないだろうということだった。例えば、東南アジア研究を担当する教官が、この地域に行ったことがある者はいるかと学生に質問したとすると、申し出た 1 人かそれ以上の学生が GY 旅行でその地域へ行ったことがあると、それでやっと分かるのである。そうでもしなければ、教官は自分の学生が GY 経験者かどうかはおそらく分からないのであろう。

どのインタビューでも、なぜ日本人が GY に興味を持つのか、特に日本政府がなぜこれに興味を示すのかとの質問を受けた。イギリスの見解からいうと、学生の GY 活動は単に個人的問題で、政府や大学の方針ということではないのだ。高校以下の学年度制を変えず、日本の短大と大学に 9 月入学制導入を検討する上で、6 ヶ月間の GY は、学生が 3 月に卒業して 9 月に入学できる制度の可能性を開くものになると説明した。すると当然のように、なぜ 9 月入学に変更するのかとの質問がでた。私は、(1) 日本人学生及び研究者が一年間の海外での研究期間を取りやすくなる、(2) 外国人学生が日本の学年度制に合わせやすくなる、と説明した。すると今度は、ではなぜ日本は何十年もの間、北米と欧州のほとんどの国のやり方に合わせなかったのかと、私が答えられないような質問をされた。(3) GY 経て学生はより成熟できるという提案では、概して懐疑的な印象を与えたようである。

2. ギャップイヤーと人としての成熟

インタビューに答えていただいた方々は、GY を経験することで若者は人として成熟する場合もあるという考えには好意的であったが、(GY 経験者数を表すものとして入学延期を利用した) GY 経験者の数が少ないことと、その経験内容が非常に組織化されたものから、全く個人的なものにいたるまでバラエティに富んでいることから、一般論とはできない。

GY のイメージは、若者がバックパックを背負って世界中を旅したり、世界の僻地や未開発地域でのボランティア活動に参加したりといったことが一般的であるが、実際そのようなケースは少数でしかもかなりかけ離れたものである。GY プログラムを提案している企業及び団体のインターネットサイトには、少しだけ地域奉仕という方向性を持たせたグループ旅行と見せかけて、事細かに計画された比較的高額な旅行が案内されている。

インタビューさせていただいた方全員が、最近のイギリス人学生の自立心と成熟さは低下しつつあると示唆した。これは親達の姿勢が変わってきたことにあり、いわゆるヘリコプターペアレントと言われ常に子ども達の周りにうろつき、頻繁に子ども達の下を訪れたり電話したり(メッセージを送ったり)、彼らの日常生活にまで口出しをするような、10 年前では考えられなかったような親達が出現してきたというのがその理由である。その上、多くの企業が提供している用意周到な GY プログラムでは、若者の成長を後押しできるとも到底考えられない。それどころか、そのようなプログラムでは、若者達が人生の中で管理され守られる期間を長引かせるようにさえ思える。

“ヘリコプターペアレント” についての最近の記事

<http://www.guardian.co.uk/uk/2008/jan/03/students.highereducation>

<http://education.guardian.co.uk/higher/news/story/0,,2234183,00.html>

http://www.dailymail.co.uk/pages/live/femail/article.html?in_article_id=508761&in_page_id=1879

<http://www.independent.co.uk/opinion/commentators/johann-hari/johann-hari-overparenting--is-the-curse-of-our-time-777702.html>

この現象はアメリカでも見られる。

<http://www.washingtonpost.com/wp-dyn/content/article/2007/03/02/AR2007030202042.html>

http://www.iveyfiles.com/2007/04/helicopter_pare.html

http://www.businessweek.com/bschools/content/apr2007/bs20070416_089164.htm

年間に 3000 ポンドの授業料徴収の導入に伴い、授業料と日常経費補助金交付が事実上廃止されたことが、学生の自立心を低下させている一番の理由であると引き合いに出されることがよくある。かつては、イギリスの学生はあえて親元から離れた大学を選んだ。しかし今や節約のために、ますます多くの学生が実家から近い大学を選び、独立せずにできるなら実家から通学するほうを選んでいっているのだ。

3. 旅行としてのギャップイヤー (Gap Year as Tourism)

ある情報では、書店に多くの GY ガイドブックが置かれているとのことだ。しかしそのような書店は見つけない。オックスフォード、シェフィールドやロンドンの Waterstones、Blackwells、Borders といった大手の書店を探したが、GY ガイドブックの在庫があったのは、たった一件だけだった。書店のインフォメーションデスクで尋ねても、「あるとしたら旅行本棚です」と同じ答えが返ってきた。

これには納得できる理由もある。探したのは、どこも大きな大学（オックスフォード、シェフィールド、LSE）の近くの書店だった。GYに関心を持つのは大学入学前の若者だということを考えたら、大学の近くの書店がGYガイドブックを置いて、意味がないのであろう。それにGYを取ろうかと検討している若者は、情報にどうしても遅れが出る出版物よりも、タイムリーな情報を入手できるインターネットを頼りにしている、というともっとわかりやすいだろう。

企業はGY経験のある学生を好む、と（たいていは同じような少数の例を引き合いに出して）いわれることがよくあるが、履歴書の書き方や求職ガイドは、そのようなことを反映しているようには見えなかった。そのようなガイドのチェックはたまたま行っただけなので、雇用におけるGYの役割とは、今後の研究課題として残しておく。(My check of such guides was, admittedly casual, and the role of the gap year in employment remains as a subject for future research.)

4. ギャップイヤー期間のボランティア活動に対する批判

インタビューさせていただいた方全員がご存知だったことは、VS0 (Volunteer Service Organization) 国際開発慈善団体が、GY 期間のボランティア活動に苦言を呈するようになってきているということだ。

<http://www.VS0.org.uk/>

ボランティア活動志願者にとって注意すべきことは、開発途上国ではほぼ何も慈善活動はしないのに、かなりの費用のかかるような GY 活動旅行が、営利目的で宣伝奨励されていることだ。(Its warnings to would-be volunteerism about commercially promoted gap year activities that do little or no good in developing countries while being quite expensive to have grown increasingly blunt.)

http://www.VS0.org.uk/news/pressreleases/mind_the_gap.asp

2007 年 8 月 14 日、VS0 理事は以下のような意見を発表した。

GY 期間を海外でのボランティア活動に費やすことは、若者にとっての通過的儀式になってきており、GY 市場は大きく成長している。GY 活動を提供する良い機関も多くある一方で、計画性もサポートもお粗末でいい加減な内容の企画が多いことに懸念している。結局のところ、得をするのは他の誰でもない旅行を企画する旅行会社だけなのだ。若者達はボランティア活動を通して、自らの何かを変えたいと思っても、彼らになんの影響ももたらさないプロジェクトに大枚をはたき時間をつぶすくらいなら、異文化を体験するだけの旅行をするほうがよほどましである。

<http://www.VS0.org.uk/news/pressreleases/ditch-unworthy-causes.asp>

前年には、「開発途上国での GY 旅行者らのボランティア活動に対する姿勢に変化がなければ、彼らは新しい植民地主義者になる恐れがあるとの警告があった。GY 市場は、ボランティアで支援する地域社会のニーズよりも、ボランティアする側のニーズに合わすようになってきている。GY 活動の抜本的再考が必要であり、斡旋業者側には、若者が意味のある影響をもった活動ができるように、活動地域社会と協調して取り組むように強く求めた。」

このような批判はイギリスの報道機関でおおいに注目を集めた。

<http://www.guardian.co.uk/uk/2007/aug/14/students.charitablegiving>

http://news.bbc.co.uk/2/hi/uk_news/6945370.stm

http://blogs.guardian.co.uk/news/archives/2007/08/14/should_gap_years_be_for_backpacking_fun_.html

<http://www.telegraph.co.uk/news/main.jhtml?view=BLOGDETAIL&grid=F11&blog=yourview&xml>

<=/news/2007/08/14/view14b.xml>

VS0 の批判は、アイルランド、オーストラリア、ニュージーランドのように様々な点でイギリスに似ている国でも報道された。

http://www.nzherald.co.nz/section/7/story.cfm?c_id=7&objectid=10458385

<http://www.independent.ie/education/latest-news/the-big-issue-mind-the-gap-year-1306929.html>

VS0 は営利目的の GY ボランティア旅行を痛烈に批判しているため、VS0 ホームページ上に、GY ボランティア経験者が自分達は無益で危険なまた生産性のない活動をしていたと気付いたという「悲惨な体験」を掲載している。2007 年にこの問題を提起するよりも以前に、VS0 は、海外の開発途上国でボランティア活動に取り組む“GY”は、より年輩の世代（定年退職者）が行うほうが有益で生産性があると述べていた。

<http://www.independent.co.uk/news/uk/home-news/VS0-seeks-a-more-mature-volunteer-536044.html>

このような民間会社が、いかがわしい高額な GY プログラムを日本の市場に売り込む可能性は、特に日本への GY 導入において何らかの強制力か政府補助があるならば、少なくともイギリスの場合と同じくらい十分あると思われる。これを回避する方法は、下記の GY の奨励（incentive）に関するディスカッションにおいて提案されている。

5. ギャップイヤーを取る動機

GY 期間の活動に対して大学に単位申請ができれば、若者たちは「GY 期間」をのんびりするかアルバイトをして過ごすよりも、何か他の事のことをしようというやる気を持てるのではないかという提案があった。GY で単位が認定されれば、学生は就職活動をしなければならない最終学年の単位履修数が減り、それに学生は GY 経験を経て将来の就職企業にアピールできるポイントが増やせるだろう

イギリスでは、基本的に単位は大学側と学生の話し合いによって認定される。これには大学側の事務的努力が必要となるが、正式にコースが始まる前から学生と大学を結ぶつるものとなりえる。

イギリスの大学のプログラムの例は、インターネットで“work based learning” や高等教アカデミー(the Higher Education Academy)を検索、参照できる。

<http://www.heacademy.ac.uk/>

単位認定されるにふさわしい特定の研究課題のない学生や、大学レベルの授業に備えて補修授業の必要な学生に対しては、大学は学力不足 (academic deficiencies) を補い、大学での勉強方法を教えるためにサマー・プログラムを開講している。通常の授業に加えて、サマー・プログラムでは在校生による新入生指導も行われる。

イギリスでは、「夏期大学」(“summer university”) という名前は、義務教育より上の教育を続けることができない若者を対象にしたプログラムに使われている。タワー・ハムレット夏期大学 (Tower Hamlet Summer University) の場合はそうである。

http://www.summeruni.org/pages/about_us/

そして

<http://www.halifaxcourier.co.uk/news/39Summer-university39-gives-a-view.3859279.jp>

ヨーロッパの大学の中には、大学志望者を対象に「夏期大学」(“summer university”) を開催しているところもある。事例はインターネットで“summer university” と検索すると見つかるだろう。

イギリスの「高い目標 (“aim higher”) 」・プログラムは、おそらく日本の環境に馴染むだろう。「高い目標 (“aim higher”) 」はイノベーション・大学・技能省 (DIUS) (the Department for Innovation, Universities & Skills) と協力して、イングランド高等教育財政審議会 (Higher Education Funding Council for England: HEFCE) が運営する国家プログラムであり、高等教育への進学を促進するためのものである。」

http://www.aimhigher.ac.uk/about_us/index.cfm

日本では、高等教育に進学する上でその人が属する社会的階級は、概して問題として見られることはない。この部分で、イギリスでの受け取られ方と明確な違いがあるのだが、日本でも学生が特に名門と言われる大学に入学できるかどうかは、社会的階級が重要な要素であることに疑いの余地はない。日本版「高度な目標」プログラムは、高校卒業者の大学進学への関心を高めさせ、さらに彼らにより高いレベルの大学を目標にできるように、GY を活用していこう。

これに関連して、イギリスでは、大学へ進学する学生が比較的少ない学校の管理を大学が請け負うという方法を取っている。この方法は、18歳人口の減少に直面する中で、入学者を増やそうと努力している私立大学に強くアピールできるだろう。このようなプログラムを通し、私立大学はより緊密に地域社会との繋がりを持つことができる (地域貢献)。

このようなプログラムの妨げとなるものは、日本の階級差を問題として認めない体質と、私立大

学で見受けられるように、大学の管理下にある学校の学生がもっと良い大学に入学できるなら、「親」大学を選ばない可能性がかなりの確率で出てくることだ。日本のたいていの私立大学が直面する厳しい財政状況と、そもそもの営利主義的体質を考えたら（大学の形式的、法的立場はどうであっても）、政府補助金が交付されるか、あるいは管理下の学校から生徒の入学が保証されていなければ、そのようなプログラムへの投資などありそうにもない。

6. 今後の調査

VS0 の所見が広く報道されたことから、個人的経験に基づくたくさんコメントが聞けるようになった。このようなコメントは、ブログに投稿されたり、イギリス内外の大手新聞のオンライン版に掲載されたりした。コメントは、直接経験者から得た豊富な情報源となり、それらの分析は今後の研究課題としておく。

インタビューさせていただいた何名かの方のお話と、そして過去の調査からわかったことは、中等学校（第6学年）の教員からアドバイスが、学生にとってGYを取ることを決めた大きな要因だということだ。学生たちにはいかなる大学の指針よりも、このような教員からのアドバイスの方が影響を持つのだろう。さらに、過去の研究のなかには、男性よりも女性のほうがGYを取る傾向がある、と示しているものがある。それが本当であれば、性別による相違があることになり、口やかましい学校評議員たちが取り組むべき課題だろう。(This gender difference, if it indeed, exists may well be addressed by talking to school councilors.)

GYを取る学生は一般的に、中流層以上というイメージを持たれている。日本には階級差がないと見る傾向が強いが、それでも最近「格差社会」に関する論争がある。日本は（1）階級社会であり、（2）GYはボランティア活動と旅行に費やされるので、個人負担額はかなりの額になり、そしてアルバイトで稼げるはずの放棄所得に換算しても相当の金額になる、という事実があるのだ。(the fact remains that Japan is (1) a class society and (2) a gap year spent in voluntary work or traveling involves substantial costs both out of pocket and in terms of foregone income that might come from casual employment (アルバイト).) GY期間に何をするかを決める上で、社会階級と家族の所得の持つ役割は、よく考慮すべき事柄だ。特に日本では、一流大学入学者は、そもそも子ども達を高額の私立高校に通わせその上に補修的な教育を受けさせることが出来る裕福な家庭の出身者なのである。

UCASは、教育フェアでGYプログラムを斡旋している会社に場所を提供している以外は、GYとの関わりはほとんど持っていないにもかかわらず、GY経験やGYを取る学生のタイプについての幅広い情報を集めたデータベースを持っている。しかしながら、一般向け版のデータベースで出来ることは、かなり範囲が限られている。データベースを改善するためには、UCASとの密接な取り組みと、それに伴う費用の負担が必要になる。私は、UCASは原則として費用回収できる形で、委託調査を行うという情報を得た。UCASはGY自体の調査していないが、もし資金があり、GYは個人的な私的活動あり、それゆえに調査はGY参加者に聞くことができるものに限るとの条件があれば、GYを実施すべき調査プログラムとして立案する可能性があるかもしれない。

11. ギャップ・イヤー研究ノート

ロバート・アスピノール

滋賀大学

4 大学からの回答

I. マンチェスター大学

2月28日

新入生募集・入試担当責任者 ティモシー・ウェストレイク (Westlake@manchester.ac.uk)

ロバート・アスピナル様

あなた様からのEメールは、ジョンから転送にて拝受いたしました。私はマンチェスター大学新入生募集・入学担当責任者です。

マンチェスター大学の入学に関する方針としては、学生の成績を重要視しています。もし学生がコースの全必要条件を満たしている場合、入学担当者はその他の補足情報を審査することになります。ギャップ・イヤー経験はふつう肯定的に受け取られますが、例えば学生がその何にも属さない時間（ギャップ・イヤー期間）を建設的に活用したのかが問われます。

必要な情報があればお知らせください。

よろしく申し上げます。

ティム

追記

2008年2月12日

私の時代では、工学科の学生にとってギャップ・イヤーをとることは稀でした。有益だったことは『サンドイッチ計画』でした。私達は長い休暇の間に工学系の企業との職業幹旋を行いました。時には生徒が一年休学して、工学系企業で職業経験を積むこともあります。そういう点では、文科系と理系学部生の姿勢や経験において違いを感じられると思います。

マンチェスター大学教授（退官）デビッド・アスピナリ

II. カーディフ大学

2008年2月21日

（カーディフ大学はギャップ・イヤーに関して大学全体の方針はありません。）

一言で私の見解を言うならば、ギャップ・イヤーは完全に時間の無駄だということです。(しかしながら、私は高校卒業から9月に大学に入学するまでの時間を埋める手段としてギャップ・イヤーを採用するという日本的考え方には賛成ですが、この変革に全く賛成しているわけではないのです。それは多くの本校の学生が日本にいる時、4月から6月の間の授業がどうなるのか心配だからです。) 学生はギャップ・イヤーによって成長して多くを学んでいるとは思えません。ギャップ・イヤーを経て貯金を増やして帰ってくる者はほとんどいません。ですから学生にとってギャップ・イヤーは経済的にプラスとはならないと思いますし、どちらかといえばそれをする事で、彼らがお金を稼げるようになるときや、資産を築き始めるときを遅らせてしまうのです。(それは英国の大学卒業生にとって大きな問題なのです。) しかし本校の状況は特殊です。まず一つ目、本校は3年課程ではなく4年課程を採用しており、その多い一年分を海外で過ごすことになっています。二つ目として、本校の卒業生の多くは卒業後に(だんだんと減ってはいますが)JETへの参加を選ぶことが出来ます。これは基本的に有給のギャップ・イヤーなのです。私の考えですが、大学入学前にギャップ・イヤーをとる学生は概して、そこからまた学生生活と学業に順応していくことは楽ではないと感じているようです。(しかしながら、後期中等教育と高等教育の水準の差が大きく開きつつあることから、これについては現在のところ問題としてはあまり目立つものではないはずですが、明らかに(問題は)あると思います。(学生の)個人的な姿勢によるものかもしれません。)

以上、お役に立てていただければ幸いです。

(Dr.) クリス・フッド

カーディフ大学日本語研究センター長

Ⅲ. エセックス大学

アスピナリ博士

ギャップ・イヤー経験を持つ学生の入学について本学の見解につきましてご質問いただいた件につきまして、クリス・クーパー教授宛のEメールを拝見させていただきました。

本学は海外において過ごす一年間は、文化的・言語的経験から価値をもたらすものと考えています。また高等教育進学のための資金を稼ぐために海外に出る入学希望者のことも、懸命な時間の使い方を見なしています。本校におきまして、ギャップ・イヤー経験があるまたはこれから経験する予定の入学志願者を受け入れない方針の学部はございませんし、むしろその経験は彼らの志願動機にプラスに働くものと見えています。

この件につきましてさらにご質問がございました場合は、ご遠慮なくお知らせください。

敬具

レイチェル

レイチェル・アール

エッセクス大学入学・高等教育機会拡大担当部門長

Wivenhoe Park

Colchester

Essex

CO4 3SQ

Tel: 01206 873979

Fax: 01206 873423

Email: rearle@essex.ac.uk

IV. ケント大学

ロバート・アスピナル様

ギャップ・イヤー経験のある学生の取り扱いに関するご質問について、ケント大学ではその学生が、i) ギャップ・イヤー期間に仕事に従事あるいはそのほか組織的な活動に活発に取り組んでいる、あるいはii) ギャップ・イヤー期間の活動が大学志願時の自己紹介文ではっきりと説明できるものであれば、学生にギャップ・イヤーを取るることによっての不利益が生じることはない。ということ以外の大学としての公式の方針はありません。

単に一般的事例からは、ギャップ・イヤーをフルに活用した学生が大学へ復学した場合、教育一般証明試験でAレベルを獲得して進学してくる学生よりも、より集中力があり精力的に学業に取り組んでいるということが示されます。しかし本学では、ギャップ・イヤー経験のある学生とそうでない学生の教育課程の修了率について、詳細な調査をしたことがあるとは私は知りませんし、また特にそのような学生を区別するようなこともしておりません。

またご質問がございましたら、どうぞご連絡ください。

以上よろしくおねがいします。

スティーブン

スティーブン・ホールドクロフト

情報・新入生募集・入学事務所 所長

入試入学・地域連携サービス

登録事務所

ケント大学

CT2 7NZ

Email: s.p.holdcroft@kent.ac.uk

Direct Tel: 01227 823259

追記 ケント大学日本語研究のサラ・ハイド講師によりますと、自身の経験上ギャップ・イヤー経験者と高校卒業後すぐに入学した学生に差は見当たらないということです。